

八幡、捻くれたままNEWゲーム

nyasu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

きっと、八幡が特に劇的な変化もなく人生を過ごしていたら大学に進学して、就活失敗した時用に教員免許取って、挙句に公務員とか良いかもとか平塚先生に憧れて教師になるところまで想像した。

でも、そうなっても踏み出せないだろうから、友達以上恋人未満でみんなと付き合ってるんだろうな。

それを後悔して、もし過去に行ったらどうなるかなと逆行物の俺がイルを読んだ私は思った。

私が書こうとな。

この作品は皆様の誤字報告によって出来てたりもします。

色んな人がやってくれるので校閲されてる気分、ありがとうございます。

目次

就職は嘘と欺瞞に満ちている	1
相も変わらず、俺の目は腐っている	6
アザレアとか探しても見つからないんですけど	11
争いは同じレベルじゃないと起きない	16
教訓とか、色々な所から得られる物だからな	22
俺の同級生がこんなに来るのが悪い訳がない	28
等価交換だろ、錬金術師。いやチェンジをお願いします	34
夢が叶うわけがない、現実に敵わないんだから	41
感情的になるとか、子供かよ……子供だったわ	47
中二病でも感想が欲しい	53
震えるぜ膝、燃え尽きるぞ情熱、刻むぜ精神的ダメージ！	59
男なら戸塚、女ならアナスタシア、どちらを選ぶべきかが問題だ	65
知らなかったか、ポッチからは逃げられない	71
俺、やっぱお前のこと嫌いだわ	78
ぼっちとは孤高なるや否や……孤高っていうか孤独だね	85
男と男の勝負に女子供は引っ込んで……えっ？	91
ラブコメの神様働きすぎだろ、今日は休め	97
ポッチが強いのは当然に決まっている、そのメンタルは鋼鉄のガラス	103
ハートの塊で出来ている。	103
俺、死ぬのか……	108
携帯電話とかポッチを加速させるツールだわ	113
玄人は悩まない、俺はブラックコーヒーを召喚するぜ。	119
大なり小なりがゆるされるのは、まんがタイムきららのキャラだけだ	119

から

吐き気を催す邪悪とは何も知らぬ無知なる者を利用する事よ、自分の利益だけのために利用するっていうね！

やめてよね、本気で殴ったら僕が敵うはずないだろ」

シルバーのアクセサリーとかさ、いや、そのセンスはねえよもう一人の俺。

ハムの人みみたいな覚え方してんじやねえよ。あつてるけど、それだとお歳暮にクッキー送ってきそうじゃん

俺は戸塚が猫系でも一向に構わない。むしろ猫耳とか最高の高だと思うんだが、いや待てよウサギも捨てがたい。それはそれでセンチティブだが、普段から妙に色気があるからな

何だお前、免罪体質か何かなの？確かに孤独な人間かもしれないけどこの社会に孤独じゃない人間はいないからって、それ言われてるからおいおい、口と行動が一致してないんだが身体は正直なようだな。

174
おっと、そのへんの高校生なら通用するかもしれないませんが、俺は指名客にはならないんでどうして勝てなかったか明日までに考えて下さい

い
だが断る！この比企谷八幡が最も好きなことは助けてほしいという材木座にNOと言ってやることだ

誰だよ、攘夷戦争つてなんだよ、参加してねえよ。いや、確かに目は腐ってるかも知れないけどね、そこしか共通点無いよね

186
193
199
遊戯王って、楽しいよね

俺はアカギや金と銀で履修済みだ、タッグでやる麻雀はイカサマがあ

るって詳しいんだ。

205

偽物の方が本物になろうって気持ちか籠もってるからお得だって

211

リーマンショックって、サラリーマンがショックって意味じゃないのよ

222

バカ、社会に出たら2ヶ月も休みなんて無理だよ。夏休みでダラけることは学生にしか出来ないよ、毎日が日曜日なニートでもないかぎり

231

大人になると、30過ぎてから太るし、脂っこい物も食えないし、婚期に焦るようになるからな

238

就職は嘘と欺瞞に満ちている

就職とは嘘であり、悪である。

就職を成功せし者達は常に自己と周囲を欺く。

自らの過去を肯定的に捉え、致命的な失敗は学生時代のいい思い出として教訓とする。

バイトしすぎて単位がヤバかった奴は、少し早めに社会を経験しました何ぞ言う。

彼らは就職の二文字の前ならば、どんな行動も全て就職に役立つように脚色する。

そして彼らは就職を前にして、その妥協に特別性を見出す。

自分達はやりたい仕事だったから何社も受けなかったと言い、他者の就職に対してはやりたい仕事があるからって何社も受けるとか現実見ろと言う。

仮に就職する事が成功の証であるのなら、何社も受けても就職出来たなら妥協したとしても同じ結果として扱われなければ可笑しい。

しかし、彼らはそれを認めないだろう、全ては彼らのご都合主義でしかない。

ならそれは欺瞞だろう、糾弾されるべきものだ、つまり彼らは悪だ。

ということは、逆説的に就活で何社も受けて吟味の結果教師となった俺は正義である。

敢えて言おう、リア充爆発しろ！

「痛っ」

「何をしているか、この馬鹿が。生徒の手本になるような例題を書けと言って、どうして犯行声明を書き上げてるんだ。一周回って、懐かしさで涙が出てくるぞ」

「ハハッ、歳取ると涙腺が弱くなるって言いますもんね」

「ああん？」

ピクピクと小じわが揺れながらドスの利いた声を平塚先生が上げた。た。

異様な眼力に、思わず圧倒されてしまう。つか、マジで怖い。

「い、いやほら一般論といいですか、平塚先生に当てはまるかどうかは統計学的な見地から考えるとしたら一考の余地があるとかないとか、さあ仕事しなきゃなあ〜」

「おい小僧、私に何か言うことがあるんじゃないか？」

「小僧って、いや確かに俺が高校生の時点で先生は結構な年齢で——」
腹部に強烈な衝撃が走り、俺は二の句を告げずにいた。

痛っ、えっ、何、今俺殴られたの？

「……………」

「えっ、いや、あの、無言で涙目は辞めて下さい死んでしまいます」
主に俺のメンタルがマツハでヤバイ。

昔は次は当てるぞとかそういう感じだったのに、遂にそんな余裕すらなくなってしまったか。

「そ、そう言えば比企谷。結婚とか、その彼女とかいないのか？」

「なんですか急に、母ちゃん？母ちゃん、なんですか？いや、今はいませんけど」

「今も、だろ？」

「ぐっ」

さっつきの意趣返しか、俺の唯一の生命線を否定される。

いたことあるし、アレは彼氏役で実際に告ったらフラれるけど、フラれちゃうのかよ。

っていうか、なんで深夜の職員室で自分の恩師と恋バナしないといけないの？女子なの、修学旅行なの？

しねーよ、つうか出来ねえよ。

「雪ノ下や由比ヶ浜とは、その連絡とか取ったりしてないのか？昔から、仲良かったろ」

「罵声を浴びせたり気持ち悪がられるのを仲がいいと言うのなら、この世のイジメはなくなるんじゃないでしょうか。いや、まあ偶に飯とか行くぐらいには続いていますけど」

「そ、そうか。あれ、終わりか？」

「えっ、いや、まあ……………」

何を期待しているのか、この八幡自慢じゃないが浮いた話は一切な

い。

妹に対する愛が重いから、他人との交流で浮いたりしないんだ。

上手いこと言おうとして失敗した感が半端ないな。

「いいか、今からでも遅くない。女は待ってるんだ、だから幸せにしてやれ」

「ちよ、急になんすか。痛い痛い、肩掴まな、意外と力強いなおい！」

ガシツと、両肩を掴まれ逃げ出すことが出来ない俺。

怖い怖い、あと怖い、目が血走ってるから！

「私はな、後悔してるわけじゃないんだ」

「あー出たよ、出たよこれ、絶対後悔してるアレだよ」

「おい、心の声がダダ漏れだぞ」

怒ってないよ、怒らないから言っつてごらんと同じパターンですね分かります。

「就職すると大学時代の友達と疎遠になりやすくなる、時間が合わないのは色々な地方から来てる場合もあるから仕方ない。それに仕事を覚えるのに必死な時期だ、必然構ってられない。だが、そうすると気付けば自分の周りにしか出会いが無くなる、同じ職員室の中から見つけないと行けなくなり婚活を始めようにも何故か途中で追い出される始末。拳句、男がいても碌な事がないと悟り、いつしか自分と結婚してしまうのだ。そして、ふと偶に別の未来を想像して一人で涙する」

「重い重い、ヤケにリアル過ぎて引くんですけど。分かりました、頑張って結婚しますよ。つうか、誰か貰ってやれよ、俺が貰うぞ」

「マジで!?!」

ガシツと掴まれていた肩に、再び力が込められる。

目の前には、キラキラした目をする平塚先生。

あの、その、すいません、今のは本心じゃないので、はい。

「おい、なんで目を逸らすんだ。もう一度言ってくれ」

「世の中には、言うと後悔するという場面が何度かあると思うんです」

「やめろ、やめろ！聞きたくない、聞きたくないぞ！」

「すいません、俺が今回は全面的に悪いです、なので肩が脱臼する前に

離してもらえませんかね」

いつも感謝してるけど、それと結婚したいは違うんだよ。

いや、俺も結婚くらいしたいけど、学校辞めて専業主夫になりたいけど、一人暮らししてわかったけど専業主夫になるほどの経済力がある女と結婚できるスペックが俺にはなかった。

「もう、アラフォーなんだよ！そろそろ、独りぼっちは嫌なんだよ」

「一人は嫌だもんな……」

もはやキャラ崩壊が進んでしまっていた。

俺もアラサー、過去の先生と同じ年齢になっていた。

何だかんだ言いながら、俺も先生のような教師になってしまっていたのだ。

あの頃の俺は先生が結婚できない理由を察していたが、同じ感じを生徒に抱かれているんだろうか。

うわ、恥ずい。なに、女子高生に十年前に生まれて十年早く出会っていればなんて思われてるの、照れるわ。

いや、ねえな。自分で言ってる無いと思っただわ。

「最近思うんだ、もっと早く行動していれば良かったのではないかと。婚活に勤しむ前に自分の周囲でいい男を探せば良かったんじゃないかと、高望みしすぎていたのかもしれないよ」

「ああ、なるほど。まあ、アラフォーで結婚なんて今時珍しくないですよ」

「おい、それに対して根拠はあるんだろうな、なあ？」

「ひ、ひや、ま、まあ、俺があと十年早く生まれていてもっと早く出会っていけば、多分先生に心底惚れていたなんて学生時代は思っていましたよ」

思わず平塚先生への恐怖にゲロってしまったが、明日から合わせる顔がない。

急に自分の髪を弄りだして、別に興味ねえしみたいな思春期の男子的な行動で、照れてることバレバレなのがまた恥ずかしい。

くそお、こんな所にいられるかトイレ行こう。

まあ、でも確かに俺も先生に及ばずながら過去に思いを馳せる事は

ある。

あの時、と後悔することは多く経験したからな。

もしも、なんて考えて色々妄想するくらいはしたことあるさ。

今の関係を壊したくなくて、なあなあで、その結果がベストでなくベターで、でも確かに悪くはないんだ。

良くもないけど、悪くもない、普通の結果だ。

ずっと友達でいる、そういう関係だ。

だが、もし俺が学生の時に一歩踏み出していたら、俺は本物を手に入れる事が出来たんだろうか。

建前や義理の関係じゃなくて、お互いが傷付かないように一定の距離感で踏み込まない関係じゃなくて、考えてもがき苦しみ、あがいて悩んで、踏み出したなら本物が手に入っていたんだろうか。

「あつ……」

一瞬の浮遊感、足を踏み外して初めて自分が廊下から階段に居たことを自覚する。

トイレと逆方向だし、俺ってばどうしてこんな所にいるのだろうか。

取り敢えず、公務員なのに残業させる学校から労災って降りるのかなと思いつながら目をつぶり来るべき衝撃に備えるのだった。

……痛い。

相も変わらず、俺の目は腐っている

「知らない天井だ」

気付けば、ネタに走っていた俺は首を傾げて痛みを覚える。

イタタタ、なんで寝違えたのか!?

横を向けば、病室が目に入った。

あー、なるほど俺ってば階段から落ちたんでした、そうでした。

にしても、病院とか学生以来だなおつちゃん泣きそうと考えていると、病室のドアが開いた。

「あつ……」

「小町……じゃない!？」

「ゴミいちゃん、何を寝ぼけてるの。私の涙も引つ込んだよ」

「いや、小町か。小町なのか?」

頭までおかしくなったの、元からかと快活な笑顔で言ってくる妹。間違いない妹だった。

にしては、肌のハリとか身長とか声の違いから違和感を感じる。

お前、そんなに若かったけ?というか、明らかに子供じゃね、寧ろお前の娘と同じレベルと言っても良いくらいだ。

「ムチムチ?なんか、良くわかんないけど入院だつて」

「安心しろ、医者がムチムチなんてセクハラ紛いの説明はしない。学校になんて説明するか」

「ああ〜ね。高校デビュー失敗だね」

「高校デビューだあ?何言ってるんだ、俺はピチピチの三十路だぞ」

「何言ってるの、お兄ちゃん15でしょ?馬鹿なの、死ぬの?」

「えっ?」

「えっ?」

何だか噛み合っていない感じに、いよいよ俺も違和感に気付く。

俺の声、なんか若くね。それに視力も良くなってる気がするし、全体的に身体が軽やかに思える。

「小町ちゃん小町ちゃん、俺はどうして入院してるんだ」

「それは犬を庇って轢かれたから、犬も心配だけど小町はお兄ちゃん

も心配だよ。あつ、今の小町的にポイント高いっ！」

「ハハハ、お前将来それ黒歴史になるからな」

おいおいマジかよ、とフサフサの前髪に触れながら俺は気づいた。
「どうやら、俺は過去の自分になっているらしい。」

退院当日、次の日から学校に行くことになる俺は自宅で準備をしていた。

昔に使っていた携帯にガラケーかと感慨深げに懐かしんだり、レトロゲーが最新作として出ていることに懐かしんだり、お袋や親父が若いことや小町が可愛らしい姿を見て懐かしんだり、何だろ俺ってば懐かしんでばかりだな。

「何、お兄ちゃん」

「何が？」

「何か視線が」

「何だ、目が腐つてるとでも言いたいのか。知ってた」

「そうじゃなくて……孫を見るお爺ちゃんみたいな目をしてたよ」

「……やったな、どうやら俺は将来結婚するらしい」

勘の良い妹は……嫌いじゃないな、うん。

小町の懐疑的な視線に晒されながら、俺は今後の事を考える。

激しい喜びはいらない……そのかわり、深い絶望もない……植物の心のような人生を……ダメだ殺人鬼になる未来しか無い。

まあ、冗談はさて置き健康とキャリアアップは大事だ。

若い頃の生活習慣は、後々負債となつて積み重なってくる。

健康診断、判定、再検査、入院、うつ、頭が……因みにハゲもやってくる。

筋トレと食事を変えよう、それと勉強もな。

ラーメンとか糖質バイ、本当に平塚先生はどうやってあのスタイルを維持していたのか。

社会人になって、勉強しておけばと思う場面はそんなになかったけど、就職の時に勉強しておけばと思う場面はたくさんあったからな。

健康だけでなく勉強もおこう。

「MAXコーヒーは、たまににしよう」

「えっ、お兄ちゃん大丈夫？平気なの？」

「おい妹よ、流石の兄も怒るぞ、そんなに変か？」

「変だよ、いつも変だけど……あうっ」

この野郎と、消しゴム飛ばしで相手を絶対落とす勢い、つまり全力のデコピンを御見舞してやった。

まあ、そんなこんなで時間を潰しているとインターホンが鳴った。

誰だよ、アマゾン頼んだの。小町か、小町しかいないな。

「お兄ちゃん、誰か来たよ」

「妹よ、俺に行けと？」

「もお、そう言っただけで立ち上がってるお兄ちゃんってば捻じれてるう」

「あつたま悪そうな単語を作るんじゃない、行ってくる」

なんだかんだ小町に甘いのは治しようがないようだった。

人生は苦くて辛いのが、妹くらい甘くていい。

名言っぽい事を考えたけど、ないな。八幡的に、ポイント低いわ。

学校に入学して、まあ相も変わらず俺はぼっちだった。

ただ思うのは、授業中に教師の話を聞いていると工夫してる点や、お前教科書そのまま読んで手抜いてるじゃねえとか、アシストが下手過ぎて生徒が困ってるだろとか、そのまとめ方良く出来てるなとか、なんか教師目線で見ってしまう。

特に平塚先生の授業なんか、同じ国語教師として洗練されてると思ってしまう。

滲み出る生徒への気遣い、なんでこの人彼氏とか居ないんだろ誰か貰ってやれよ。

「はい、それでは君達の文章力を試すように悪いが高校生活を振り返ってというテーマで作文を作ってくれ。まあ、中学生の時にも似たような事をやっているだろうから、これを気に自分を見つめ直して抱負など考えてくれたまえ。提出は——」

ああ、そう言えばそんな事もあったなと平塚先生の言葉を聞く。

作文、それは俺が奉仕部に入る切っ掛けになった物。

今考えるとアレはこじつけで先生なりの生活指導だったんだろ
うな。

そんなに、俺ってばヤバそうに見えるんだろわか。

俺なんかコミュ障に先生って親近感湧いて話しやすいって人気な
のに、親近感抱かれるほどコミュ障とか社会人として終わってたわ。

作文に関して言えば、まあ俺は高校生活を振り返って真面目な事を
書いた。

さあ、俺の作文の何に不満があるのか言ってみろ。

そんな俺の前に国語教師である平塚静は青筋をたてながら悩まし
げな声を出した。

悩んでるんだろわか、ちよつとエロい。

「なあ、比企谷。私が出した課題はなんだったかな」

「高校生活を振り返ってという、生徒達にまず自分の今までの生活態
度を見つめ直させて、これから中弛みになる期間に進学の事を意識さ
せるテーマだったと思います」

「いや、そういうことを言いたいわけじゃないんだよ。私が言いたい
のはなんで筋トレとか食事改善した話とか、教師に対して教え方の上
手い下手の評論をしているかということなんだよ。何目線、君は教師
なのかな？仕事も覚えてきたベテラン教師目線なのかな？」

「おっと、そんなに褒めないでくださいよ」
「褒めてない、先生褒めてないよ」

もーと言いなながら髪を掻き上げる平塚先生。

若いなあ、普通にストライクゾーンに入るレベルだ。

……ハッ、俺は何を!?これが、精神が身体に引っ張られるという転
生者特有の副作用とでも言うのか。

「痛てっ」

「ボーっとするな、話を聞け」

「すみません書き直します。つきましては、問題点がどこかなどを」

「君と話していると生徒と話している気分じゃなくなる」

うんざりと身体で表現した平塚先生ははちきれんばかりの胸元か

らセブンスターの銘柄を取り出す。

ああ、そう言えば吸ってたな。将来、喫煙が問題視されて嘆いてたっけ。

おっと、っていうかダメだろ。

「あつ、何をする」

「平塚先生、教師が生徒を見るように生徒もまた教師を見えています。喫煙するなどは言いませんが、多感な時期の学生への影響も考えてのTPOという配慮が必要じゃないですかね」

「うえっ!?……あつ、はい」

シユンとしながら、タバコを受け取ってしまったちやう平塚先生。

おっと、いかんいかん新米教師にお説教するように思わず反応してしまった。

あの後、くつそうゼエわあのか言われてPTAから苦情が来たら見捨ててやろうと思った新米教師を思い出したわ。

俺、間違っていないのにツイッターで呟くとか裏垢特定してんだからな、ふざけんなよ。

いかんいかん、嫌な事を思い出したぜ。

「と、所で君は部活をやってなかったよな」

「部活はやってないですし、友達も先生の見立て通りいませんよ。彼女は募集中で、生活指導として人と関わらせる必要はないです。そんなもの、嫌でも将来関わるってのが社会ですし」

「君は……エスパーなのか? いや、そうはいかない。私は君に怒られて傷付いたので罰を与えます、奉仕部で活動しなさい」

「ええ……」

世界は、俺に逃げるといふ選択肢を与えてはくれないようだった。

これがシユタインズゲートの選択というのか。

アザレアとか探しても見つからないんですけど

奉仕部に向かう道中など、道案内などなくても行けるので暇で仕方なかった。

記憶の中では荷物置き場となっている空き教室を思い出しつつ、学生時代に思いを馳せる。

やっべ、今がその時だったわ。

「所で先生、今ってどのくらいワンピース進んでるんですけどっけ」

「おい、どうして教師との会話が漫画なんだ。まあ、読んでるが……因みに、今は空島に来てる頃だ」

「ああ、懐かしい。エネルが強キャラ感出してる頃でしたね、それで覇気が伏線として出て来る」

「覇気？なんだそれ、どこ情報だ？確かにエネルがなんか気配を感じていたが、そのことを言ってるのか？まったく、ワンピースは人気漫画だからな。ネットでは色々な憶測での話が出てくるが鵜呑みにしてはダメだぞ」

「ネットの海は広大だわ」

奇しくもネタバレしてしまった事に後悔を感じつつ、先生とワンピースについて話しをしながら部室に向かう。

部室はなんの変哲もない空き教室、今まで思い出が詰まっていた場所、これから思い出が詰められる場所。

俺の中で忘れることの出来ない三年間があった場所だ。

ただ教室の場所を表すプレートにはシールは貼られていない。

由比ヶ浜が、確かシール貼ってたんだよな。

それを雪ノ下が見つけて注意してたか、懐かしい。

俺が懐かしんでいると、無遠慮に平塚先生がドアを開ける。

俺はついつい癖になってしまっているのか人がいる場所に入る時はノックしてから入るのだが、平塚先生にはそういう習慣がないようだった。

教室は伽藍としていて、何もないように見えるくらい殺風景だ。

あるのは積み上げられた机と椅子、それと一人の女の子だ。

日差しが差し込む、国語教師として訂正するならば斜陽とでも形容すべき景色の中で本を読んでいた手を止める少女が一人いる。

黒い髪が風に流され、光沢のある髪から反射した光が目に入り美しさを演出している。

そつと髪を押さえる指は白くて細くて、手荒れ一つ無い女の子の指先だ。

まるで絵画染みた姿に、不覚にも見惚れてしまう。

顔立ちはスツキリとしているが、どこか柔らかさそう丸っこい。

綺麗だと思っていたが、この頃はまだ幼さがあり子供なんだと再認識させられる。

未来の雪ノ下はゾツとするほど綺麗になって、綺麗を通り越して寒気を覚える程の美人だったからな。

視線で人を凍りつかせるくらい出来そうな程の美人だ。

まあ、その美貌も相まって注意する度に新人が泣くことから、鬼の部長と呼ばれる未来が待ち受けているのだが割愛しよう。

「平塚先生、入る時はノックをとお願ひしていたはずですが」

「ノックしても返事をした試しが無いじゃないか」

「それは、先生が返事をする間もなく入ってくるからですよ」

久しぶりに聞いた声も、随分とまあ違うものだ。

女子も声変わりりつてするんだね、幼さを声からも感じるとは……何だろうアイドルだと思ってたら妹のような声だったと言うくらい違う。

さすはちつて言っても良いんだぜ、誰だお前こんなキャラじゃないか。かつたろ八幡は錯乱している。

「ところで、そのぬぼーっとした人は？」

雪ノ下の視線が俺を射抜く。

怖い怖い、お前の顔に慣れてる俺でもドキッて来るわ。

これは恋？違います、緊張です。

目と目が合う瞬間、好きだと気付いたのは大体勘違いだから。

ソースは俺、男子高校生は勘違いする生物、しやすいではなくする、ここテスト出るからな。

さて、俺はこの少女を知っている。

というか誰でも知っている、頭一つ飛び抜けた特進クラスとでも他の学校では言いそうな、進学校に有りがちな学力が著しく高いクラスに在籍している子達の中で、彼女は容姿も優れているからだ。

国際教養科という偏差値高めのクラス、頭がいい。

でもってお前何なの、芸能人なのというレベルの可愛さ、見た目がいい。

なお、それは本人が当たり前だと思ってやっているスキンケアなどの結果だったりする訳だがな。

さらに定期テストでは常に総合点学年一位をキープする成績優秀者、なお国語だけは俺が一位、勝った第三話完。

つまり、有名になる項目が多すぎるので誰もが知ってるのだ、QE D証明終了。

「彼は比企谷、入部希望者だ」

「なんですか、そのコナンくんみたいな紹介の仕方。というか、入部希望者って、希望はしてないんですけど、寧ろ絶望してるんですけど」「というわけで、見れば分かるが非常に彼は面倒くさい性格をしている。性根も根性も腐っている」

「西尾維新みたいなこと言いながら結局貶してるんですが、話聞けよ」

コツンと小突きながら紹介する平塚先生に抗議の声を上げる。

腰に手を当てて人を小突くんじゃないよ、スタイルいいなオイ。

思春期の男子特有の気安いスキンシップにドギマギする現象が起きていた。

「私からは、彼の捻くれた孤独体質の更生を依頼したい」

「それなら、先生が殴るなり蹴るなりして躡ればいいと思うんですけど」

「私だつて出来るならそうしたいが最近是小うるさくてな」

「先生、今は良いですけど精神の暴力も許されてませんからね。ハラメントと騒がれる時代が来ますよ。具体的には十年後、世はまさにハラメント時代」

すぐにセクハラだ、パワハラだの言ってくるんだから。

先生がスカートの短さを注意した、セクハラですって親が来るんだから。

「ばっか、お前、学校の規定では短いのがダメなの長くしろって言ったの。」

「なんで、長くしろって言った訳じゃないのに親が来るんだよ、逆に短くした方がいいのかよ最高じゃねえか。」

「視線だけでセクハラ、手伝いを頼めばパワハラ、もう受験の時期だからと言えばエイジスハラスメント」

「ひ、比企谷？おーい」

「挙句、親が出てくるって何だよ。じゃあ、自宅学習させろよ、親の顔より見てるんだぞこっちは……」

……ハッ、なんか二人がキョトンとした顔で見ている。

「オイやめろ、そんな可哀想な目で見るんじゃない。」

「育毛剤を使ってるのを見た小町と同じ目をしやがって、ちくしょーめ！」

「最近思うんだが、誰目線なんだ。君の考えてることが先生、ちよつと分からないんだが……いやまあいい」

「良くないです先生、身の危険を……これはモラルハラスメントになるのかしら？」

「なんだ君達、ひよつとして似た者同士なのか？学生が深く考えるのはやめて、取り敢えずで喋ってみることも大事だと思うぞ」

なるほど、コミュニケーションは大事だ。

「ただし、コミュニケーションはバッドコミュニケーションだ。」

平塚先生はその後、俺が自己保身とかリスクとりターンの考えられる人間だとか、まあ小悪党とか言ってる雪ノ下を説得した。

「それで納得する方もどうかと思うが、今にして思えば納得したのではなく納得した事にして一緒にいることを選んだということだろう。」

俺は既に知ってるが、彼女は俺が事故の事を知っているということを知らないわけで、つまり関わりを持つべきか持たざるべきか葛藤があつたんじゃないかと、こういう光景を目にして思い至ったりした。

勝手知つたる教室、平塚先生の計らいで二人きりにされたが、プロの独身である俺は別にラブコメ展開とか感じて緊張しない、本当だよ。八幡、緊張、しない。

こんな経験、何度だつてあるんだからな。

放課後、二人きりの職員室。

カタカタと聞こえるキーボードを叩く音、忙しそうな新米教師、勇気を出して初めての後輩に声を掛ける。

『いや手伝いとか本当に良いんで、あと彼氏いるんでそういう口実で近付かないで下さい』

あーいや、これダメな思い出じゃん。

しかも、その後彼氏がいるのに口説かれたとか変な噂が広まって校長に注意されたアレじゃん。

SNSとか、教師がやつちやう時代怖いわ、あとそれをチエツクしてる男子生徒もな。

まあ要するに、美少女と一緒にの教室になろうが最悪を想定する俺はラブコメなんて現実に起きないのである。

二度と忙しそうだからって手伝ってやろうと思うものか。

まあ、だからと言ってコミュニケーションを取らないというわけにはいかない。

不器用なりに取ろうとして罵倒し合うのはナンセンスだ。

こちらら、毎年初対面な環境にいたんだぞ。

初対面の相手との会話の始め方くらい知っている。

こんな事もあるうかと用意していた秘策を、俺はカバンから取り出して読むことにした。

見せてやろう、これが大人のコミュニケーションだ。

争いは同じレベルじゃないと起きない

猫、ウチで飼ってるペット。

携帯などにより容易く動画を取れることや、それを公開する場が出来たことで猫ブームが起きるくらいに将来人気になる動物。

そんな動物達を収めた、ちよつと未来に生きてる什么的な写真集。

俺は猫の写真集を見ていた。

フフフ、相手の好きなものをリサーチし、さり気なく共通の話題として会話のネタにする。

これが社会人として俺が学んだ空気の読み方である。

「……………」

「……………」

視線を感じた。

よく、女子は胸元を見ている男子のチラチラとする視線に気づくと言うが、そのの比じやなかった。

一切、視線がブレず穴が空くくらい見られていたからだ。

チラチラ、ではなく、ジーってレベルだ。

怖い、あと怖い、何なのお前そんなにネコ好きなの、好きだったな知ってたよ。

一回、一緒に猫カフェ行っただけな。延長しすぎてキャバクラかよって思ってたわ。

なおキャバ嬢より気まぐれなお猫様であっただけだな。

「なあ」

「何かしら？」

「雪ノ下、やっぱり猫とか好きなのか？」

「何を言ってるのかしらねこの男は、何を根拠にやっぱりとか言ってるのか理解に苦しむ発言だわ。いつ私が写真集を凝視していたというのかしら、証拠もないのに断定するなんて失礼よ」

「いや恥ずかしがらずに、言ってみ。そしたら、これ見してやるから」

「私が見たがっているなんて妄想はやめて貰えるかしら。そうして、あわよくば私と仲良く出来るなんてところまで想像しているかもし

れないけど、その可能性が無いことくらい気付くべきだわ。罰として、そんな妄想の原因である写真集は没収するわ」

「お前、昔から照れてる時は早口で視線が鋭くなるって言われないか？ほら、やるよそれ」

雪ノ下の視線は、それ以上言えば殺すぞ貴様という感じだった。

まあ、そんななんだったから写真集を投げて渡してやれば、すごい勢いでキヤッチして、ハツとして俺の方を見る。

ほら見ろ、と言わんばかりに笑ってやれば、恥ずかしかったのか写真集で顔を隠しやがった。

きつと写真集の後ろでは耳まで真っ赤にしていることだろう、あざといなお前、いろはす仕込みなの？

「持つ者が持たざる者に施しを与える、奉仕部らしいだろ？ついでに、入部届も渡しとく」

「良いでしょう、奉仕部への入部を認めます。所で、奉仕部って教えたかしら？」

「ああ、いや、アレだよ。先生から聞いてたんだよ」

「明らかな嘘ね、奉仕活動という先生の発言から予想したというところね」

一人、納得できる理由を考えて会話を終える雪ノ下。

その視線の先には写真集があった。

キラキラした目で見やがって、そんなに喜んでもらえるとおじさんとしても、買った甲斐があったと思うよマジでな。

「じゃあ、帰って良いか？特に、時間を潰せる物とか持ってきてないし」

「いきなり人と関わるのは貴方にとっては酷な事かもしれないけど、逃げてるだけでは現状は変わらないわ」

「逃げるは恥だが役に立つって言うだろ、逃げちゃダメなのはパイロットになった中学生だけなんだよ」

「何それ、そんな造語作らないでくれるかしら？あと、どうしてパイロット？」

「ハンガリーの諺なんだが、それとエヴァくらい見とけよ必修科目だ

ぞ」

主にコミュ障の成長を見るアニメとして、コミュ障の奴らは見るべき。

そして、オタクになるのだ。ようこそオタクの世界に、これぞ人類オタク計画。

「マニアックな分野の知識を披露している所申し訳ないのだけれど、会話をする上では共通の話題が良いって知ってたかしら？ 貴方、だからぼっちなのよ」

「良いんだよ、人間強度が下がるから」

「言いたいことは分かるけど、理解しにくい言葉だわ。精神的に向上心の無いやつは馬鹿って言うでしょ？」

「夏目漱石の心かよ、よだかの星じゃないのか」

「……意外だわ、流石国語の成績だけは一位だけあるわね。」

「あれ、俺の成績なんて言っていないよな」

「……別に、成績が張り出されるから覚えていただけだわ」

「プイツと首を捻って、顔を逸らす雪ノ下。」

その気まずそうな姿に、今のは失言だったと遅れながら気付く。

まあ、先に失言したのは雪ノ下の方なのだが、何はともあれこんな会話を懐かしいと俺は思った。

お互いに小休止、というか会話のネタが尽きてしまったというのもある。

雪ノ下は羞恥から、俺は単に切っ掛けが無くなったから会話する事ができなくなっていた。

そんな現状を打破するが如く、ドアが開かれる。

平塚先生だ、来た、平塚先生来た、やったこれで勝つる。

「邪魔するぞ」

「邪魔するなら帰って」

「あいよ〜ってちよつと待て待て待てえーい」

撃てば響くとはこの事か、平塚先生はネタを拾ってくれるので弄っていて楽しい。

流石先生、雪ノ下には出来ないことを平然とやって退ける！そこに

痺れる、憧れるう！

なお、そういう女子力とは掛け離れた所が婚期が遅れる原因だろう。

「ノックを」

「悪い悪い、様子を見に寄っただけなのでな。許して欲しい」

平塚先生は鷹揚に微笑みを掛けて、そのまま教室の壁に凭れ掛かる。

「仲は良さそうだな」

「悪くはないですが良くもない、つまり普通です。普通の間係を築けたという訳です。更生する必要ないでしょ？」

「雪ノ下、どうやら比企谷の更生は梃子摺ってるようだな」

「本人が問題点を自覚していないせいです」

懐かしいやり取りに、思わず笑ってしまうと何がおかしいとばかりに詰問するような視線が向けられる。

そんな雪ノ下に、恐怖を覚ええない。

今の俺からしたら威嚇行動する小動物に思えるくらいだ。

「雪ノ下、世の中には色々な価値観がある。そこに折り合いを付けることも、まあ大事なんだわ」

「どうして、世の中の道理を説かれなくてはいけないのかしら。貴方のやり方じゃ悩みは解決しないし、救われないわ」

「正論だな、だが正しくない。正論はいつだって人を傷付ける。逃げる事を肯定してやらなければ、逃げるしか出来ない奴を、出来なかった奴を切り捨てるのと一緒だ。一人くらい、そんな奴の味方がいたって良いだろ？」

変わることは素晴らしいか、過去の俺は現状からの逃げだと反論したっけな。

今の自分や過去の自分を肯定しろって言ったな。

それは、今の現状から変わりたい雪ノ下に対して琴線に触れる一言だと知らなかったから言えたことだ。

「人は一人で勝手に助かるんだよ、西尾維新を知らないのか」

「誰かしら？ 誤魔化すような事を言わないで欲しいのだけど」

「お前って負けず嫌いだよな」

「なっ……今の話と私のことについて因果関係はないはずよ」

むすつと擬音がつきそうな雪ノ下は、凶星を突かれた人のそれであつた。

ムキになるとというのが、まだ彼女が子供であるという証明のようで可愛らしい。

子供雪ノ下である、鬼の雪ノ下部長ではこうはいかない。

「君達、一旦落ち着け。よしこうしよう、古来よりある伝統的な」

「勝負しようとか、そういうのはジャンプだけで良いので。というか先生、他にやり方という物があるでしょう。生徒同士を焚き付けるようなことはどうかと思いますよ」

「えっ……」

「勝負、というの？」

「あ、ああ！奉仕活動にどちらが従事出来るかと言うものだ。判定は私が決める」

雪ノ下は当然のように食い付き、思惑通りに進んだことに平塚先生は喜びを露にする。

でも、前提条件が間違っている。

「雪ノ下、多分俺はお前ほど奉仕活動に取り組めるとは思えない」

「それは敗北宣言かしら？」

「そうだよ、先生には悪いがそういうのにムキになるほど子供じゃないんだ」

「それは、私が子供ってことかしら？私、貴方の事が嫌いだよ」

「そうか、それは残念だ。俺はお前の事、それほど嫌いじゃないけどな」

どうしよう、この空気と俺達の顔を交互に見る先生が居たたまれない。

雪ノ下もなんか、変に動揺してるしおじさんうっかりしてたわ。

ある程度関係が出来てる雪ノ下ならまだしも、初対面の雪ノ下だと軽口が軽口となり得てない事に失念していたわ。

はあ、失敗したと頭を搔く。

「じゃあな、また明日。平塚先生、お先に失礼します」

「あつ……」

「……何だよ」

「……いえ、何でもないわ」

「そうかい、じゃあな」

「ええ……呼びとめてしまつてごめんなさいね」

教訓とか、色々な所から得られる物だからな

八幡は逃げ出そうとした、しかし回り込まれてしまった。

「知らなかったのか、学生は教師から逃げられない」

ホームルームを終えて教室から出た瞬間、待ち構えていた平塚先生に捕まってしまった。

襟首を掴まれて、連行。

まるで、他人の家に来た飼い猫のようである。

借りてきた猫状態、なおウチの猫は借りてきてないのに大人しい。

「どうせ暇だろ、部活の時間だ」

「いや、俺ってば多忙ですから。多忙すぎて過労死するレベル」

「嘘を言うな、家に帰ってもやることないだろ」

「いや、マジでやることありますって試験勉強とか」

「試験？テスト期間はまだ先だが」

「現代用語能力検定、語彙・読解力検定、国語力検定、諺能力検定試験・ことわざ検定、作文・小論文検定

実用日本語検定、語彙力検定、その他諸々、簿記とか色々」

「な、なんだその、これだけやってるんだぞアピール。よくそれだけ覚えられたな、資格の種類」

いやマジだって、ユーキャンとかやってるから。

レベル上げ楽しいって感じでやりこんでるから。

君は、国語教師になりやすい資格ばかり狙うフレンズなんだねって言われるレベルだから。

べ、別に暇すぎて時間潰しでやってる訳じゃないんだからね。

半分は勉強しないでも何となくで合格出来たし、腐っても現国教師だしな元から持ってた。

「今度から逃げたら三年で卒業できると思わないほうが良いぞ」

「そしたらずっと平塚先生と一緒ですな」

「なっ……」

歩いていたら首を後ろに引っ張られる。

うげっ、急に立ち止まってどうしたんですか平塚先生。

首締まるから、締まっちゃうから、比企谷から比企カエルになっちゃうから。

あつ、トラウマが……鬱だ、死のう。

「どうしたんですか、平塚先生」

「はあ……君という奴は、まったく」

「お、おう。ち、近つ……」

平塚先生が俺の関節を極める。

この距離は、見ようと思えば同伴したキャバ嬢のようだった。

なお、現実のキャバ嬢は手も握らしてくれない子もいる。

殆どってというか、俺は腕を組んでくれる子とまだ同伴したことはない。

違うのは他にもあるが、金は払ってないし、関節は極まってるし、胸が当たってるけどウキウキしてないことぐらいか。

本当だよ、八幡ウキウキしてない、インディアン嘘つかない。

「あの、別に逃げたりしないので大丈夫ですよ。こんなの誰かに見られたら」

「そう寂しいことを言うな、私が一緒にいきたいのだよ」

あつ、そうか今は教師じゃないから別に変な噂が立ってもいいのか。

いや、良くないだろ八幡、生徒と先生とか何それ燃える！燃えちゃうのかよ、燃えるのは間違いなくSNSだよ。

上手いこと言ったな、八幡的にポイント高い。

「君を逃して歯噛みするくらいなら、心理的ストレスが少ない方がいい」

「おい、俺の三分の一の純情を返せ」

「壊れるほど愛するとか、君はどここの獣殿だよ」

怒りの日、知ってるのかよと思わずびっくりする。

やっぱ、趣味が男っぽいよな。

いや、どっちかっていうと中二病なんだろうか。

中二病でも結婚したいとか、そんなんだろうな。

売れる気がしないわ、誰か貰ってやれよ。

「しかし、そうかそうか。純情を返せとか少しは可愛げがあったんだな」

「いやまあ、世間一般で言えば先生はまだ若いですし綺麗ですからね。それに、今までの人生の中で数えるウチに入るくらい女性と距離が近いですし、それに俺先生の事は特別に思ってますから」

国語教師やって、偉大さが改めて分かるからな。

国語教師って添削とか文章書く仕事とか、色々と押し付けられたりするんだよな。

俺は嫌がってたけど、平塚先生は文句一つ言わないし、それを聞いたら頼られてるんだから応えてやるだけさ。

とか言って、笑ってたな。

生徒からなら分かるけど、他の教師の仕事は頼ってるではなく押し付けてるだと思っただがそれでもやってたっけ。

などと、遠い過去を思い出していると平塚先生が俺の腕を離れた。

あつ、着いた感じですか。

「ひ、比企谷……そのだな」

「じゃあ、部活行ってきます」

「えっ、あつ、そうだな。うん、それがいい」

さてと、今日も部活動に勤しみますか。

教室に入ると雪ノ下はいつもの状態で本を読んでいた。

ドアを締めて、チラッと視線を向けた雪ノ下に俺から挨拶する。

挨拶は基本、古事記にも書いてある。俺は古典も出来るのだ。

「よお」

「変わった挨拶ね」

「まあ、気恥ずかしいんだよ男子高校生には」

「こんにちは、挨拶は基本よ比企谷君」

ニコツと笑顔の雪ノ下さん。

何それ可愛い、お前がナンバーワンだっ！

まあ、女子高生の笑顔に心が癒やされるほどおじさん疲れてないからね。

テンションとかバイブスぐらいしか上がらない、なお意味は分からないけどな。

バズるって何だよ、おじさん分かんないんだが……この時代にはまだ無かったか。

「あれだけこっ酷く言われたら二度と来ないと思うんだけど……マゾなの？」

「ちげえよ、ストーリーカーでもないからな」

「私の発言を先回り、ハイスペックなストーリーカーね。言動まで待ち伏せするなんて」

「確かにスゴイが、俺がお前を好きみたいに言うんじゃない」「違うの？」

小首を傾げてキョトンとする雪ノ下。

確かに可愛いが、何だろう姪を見る感じだ。

恋愛対象というには、いや行けなくはないのだが罪悪感がな。

背徳感に興奮する歳でもないんで、いや今は同じ年なんだけどね。

「経験則から言ってるんだろうが、何でもかんでも経験が物を言うと思うなよ。少なくとも、世間一般の可愛いが恐怖な奴らだっているんだ」

「初めて聞いたわ、どういうことかしら」

「そりゃ嫉妬とかで色々あんだよ、俺の妻に色目使いやがってとかな」

なんで三者面談中にそんな言われなきやいけないんだよ、こちとら工作中だよ。

ちよつとくらい、エロい目で見てもいいだろ人妻とか存在がエロいだろう。

だから、俺は悪くない。だって、悪くないんだから。

「安心して、貴方のそれは妄想よ。その誰かの奥さんが貴方に乗り換えることは絶対ないわ」

「安心できる要素がないし、言外にデイスるな」

「だって、真実は時に残酷じゃない。さり気なさって大事だと思っわ」

「お前、然りげ無いつて辞書で調べたほうが良いぞ」

「嘘、私の遠回しの気遣いが理解できたの」

「分かったお前、俺の事を馬鹿だと思ってんだな」
何なの、どこの戦場ヶ原さんなの。

毒舌とツンドラな性格と長髪って、おいおい殆ど同じじゃないか。
だが、安心しろお前に彼氏は出来ないからな。

俺はお前の未来を知ってるぞ、この野郎。

「確かに嫉妬に関しては一家言あるわ、ソースは私」

「ああ、お前って女子に徒党を組まれて排除されるタイプだもんな」
「ぐっ……悔しい、でも反論できないわ」

だろうな、お前が昔俺に教えてくれたことだ。

意趣返しがちよつと出来たとドヤ顔になる。

雪ノ下は、鼻で笑って遠い目で語った。

「獣以下よ、排除しようとすることでしか、自分の存在意義を確かめられない哀れな人」

「雪ノ下さん、戻ってきてくれるかな。ある意味、痛い子だからね」

先生、流石の問題児に困っちゃうぞ。

今は先生じゃなかった、じゃあ困りませんね。

そつとしておこう。

「小学校の頃、上履きを隠された事があるのだけど、うち五十回は同級生の女子だったわ」

「残り十回は男子と教師と犬だろ。ロリコン教師かよ、死ねばいいのに」

「よくわかったわね、おかげで毎日上履きは持って帰ったしリコーダも持ち帰るハメになったわ」

「俺が驚くとしたら、それをすべて覚えてカウントしているお前の所業だ。怖いわ、お前には絶対デスノート渡せないね」

「そうね、人はみな完璧ではないから弱くて心が醜くて、きっと私はデスノートを手に入れたら、新世界の神になるしかないわね。変えるのよ、人ごと、この世界を」

「デスノート知ってたのかよ、あとぶっ飛びすぎだろ発想が」

まあ、映画化してたりするし有名だからだろうか。

別に興味があったとか、そんなんじゃないよな？

コイツ、ギャルゲーだと手帳とか同級生に拾われて豹変するヒロインとかやりそうだからな。

「少なくとも、貴方のように弱さを肯定してしまう部分、嫌いだわ」

「俺はお前の強くあろうとする姿勢、嫌いだわ」

自分にも他人にも厳しいと、生き辛くて仕方ないだろう。

人は厳しきだけじゃ生きていけないんだからな。

「それじゃあ、自分も他人も辛いだけだ。辛い人生なんかより、優しい世界の方がいいだろ」

「貴方……」

「少なくとも、俺は深夜アニメを見てグロよりやっぱ百合だなんて思った」

「……一瞬、カツコイイことを言ったのかと思って勘違いしたわ」

雪ノ下は頭を押さえやがった、でもってうへえみたいな顔をした。

やっぱコイツ可愛くないわ、女子がしちやいけない顔だろ。

現実には厳しい、そうだと二次元に生きなきやと思うのだった。

俺の同級生がこんなに来るが悪い訳がない

調理実習の授業をやり終えた俺は、そう言えば昔は調理実習をサボったなと思ひ出す。

あの頃は、というか将来もだが人と一緒にいるのが苦痛で仕方なかった。

でもね、悟りを開けば良いんだよ。

それほど人は他人に興味が無いんだから、自分が気にしなきゃ良いの。

料理っていうのはね、科学実験と一緒に誰だってレシピ通りにすれば出来るのよ。

味が違うとしたら、それは食べる側が問題なの。

「つべーわ、これって所謂手作りって奴じゃね！」

「ああ、そうだな」

「優美子、マジいい奥さんって奴でしょ！ワンチャンあるっしょ！」

「べ、別に普通だし」

「ああ、そうだな」

「隼人……」

モノを食べる時はね、誰にも邪魔されず自由でなんとというか救われてなきゃダメなんだ。

独りで静かで豊かで……つまりリア充うるせえよ、黙って喰え。

あと、あーしさんは奥さんじゃなくてオカンな。

ああ、そうだなだけでラブコメの波動を感じる……。

「旨っ」

「普通に美味しい」

「ま、負けた……」

俺の班員の口から声が漏れる。

そうだろう、一人暮らしが長いと嫌でも料理が美味くなるんだ。

俺なんか特にやること無いから、料理研究しちゃうしな。

「そ、そうか。あの牛肉に小麦粉を付ける工程が美味しさの秘訣か」

「それだけじゃないわ、野菜を炒める前にレンジに入れてたわ」

「ルウを溶かす時、火を止めていた。俺でなきや見逃しちゃうね」
……………あれだな、意外と他人のことみんな見てるのな。
やべえ、超恥ずかしい。なんなの、お前らのやれば出来るじゃんつて視線。

アレだから、ジャイアンが映画版のときカツコイイのと一緒に、ギヤップ効果だったの。

若者達の視線に、何だかこそばゆいおじさんであった。

「うん？」

「ッ!？」

「……………気のせいか」

まさか、俺の回りに傭兵がいたり……………なわけないか、何か見られている気がしたのは被害妄想って奴だ。

放課後、奉仕部で読書をしていると部屋を開ける人間がいた。

ノック音と共にドアを開けたのは由比ヶ浜結衣であった。

肩まで伸びる茶髪が左右に揺れて、探るように動く視線は落ち着かず、極めつけに俺と目が合うとひいと小さく悲鳴が漏れた。

やめてよね、俺が抜け毛を見つけたときみたいな声を出すの。

「な、なんでヒツキーがここにいんのよ!」

「おいおい、誰が引きこもりだ。酷い渾名を付けるんじゃない」

「くふつ……………」

「笑うなよ、タイキツクするぞ」

やってきた女子は、俺と前の世界線で奉仕部だった由比ヶ浜だ。

前の世界線とか言っちゃうと、ちよつとカツコイイな。

なお、俺から言わせれば可愛いけど校則を守れよ小娘と言いたくなる。
因みに今後大きくなるとは言え、結構デカイ。

いや、今気付いたんだよ本当だよ。

「同じクラスだが、会話するのは初めてだろう。比企谷八幡です、よろしく」

「わあ、なんかクラスの時と全然違うんだね……………なんかキモい」

「罵倒されるのが趣味なんてやっぱリドMなの？」

「俺が言わせたみたいに言うなよ、あと由比ヶ浜は無自覚に人を傷付けるからそういうこと言うなよ」

「あつ、ごめん……」

「あと、脱色は校則違反だ。アクセサリーの着用も、あとブラウスのボタン3つも開けるんじゃない、スカートも膝頭まで伸ばしなさい。ウチの校則じゃ、色付きや柄の靴下はダメだぞ」

「うわあ……やっぱキモい」

「注意するのを理由に、然りげ無く下卑た視線を送るなんて人として最低だと思わないかしら、セクハラ谷君？」

「俺の名前は比企谷だ、あと疚しい気持ちはない」

「本当だよ、ちよつとだけしかないよ。」

こうしてみると、意外と小さくて可愛いか思ったけど、この可愛いは子犬を見た時の女子の可愛いと一緒だからな。

「あのさあのさ、ここって平塚先生から聞いたけど願いを叶えてくれるんだよね」

「そのためには、俺達が用意した七つの球を集める必要があるんだが知ってたか」

「なにそれ聞いてない!？」

「嘘よ、騙されなくて由比ヶ浜さん」

「騙されたよ、もう!もうもう、ヒツキー最低っ!」

やめ、やめろよ、近付いてくんない香りするだろうありがとうございます。

ふう、危ないところだったぜ。危うく条例違反になるところだった。

「奉仕部は手助けをするだけよ、叶うかどうかはアナタ次第」

「どゆこと?」

「クツキーを作ってやるんじゃないくて、作れるようにするって事だ」「なるほどー」

守りたいこの笑顔、にぱあと由比ヶ浜は笑顔だった。

こういう子って教えがいあるんだよな、理解できるけど納得いかな

いんですけどとかいう奴より楽だ。

「あ、あのね……」

「比企谷君」

「俺がいると言い辛い感じか、じゃあ売店行ってくるけどお前ら何かいるか」

「えっ、いいよ、悪いし」

「野菜生活100いちごヨーグルトミックス」

「学園都市ぐらいにしかないだろ、なんだそのゲテモノ」

クッキーを作る話をするんだろうなと思いつながら、売店に買い物に行くんだった。

「あつたよ」

商品開発部が度重なるストレスの中で気が狂って作ったんだろうかと思うような商品が並んでいやがった。

マジであんのかよ、っていうか美味しいのこれ。

まあ、安定のMAXコーヒをチョイス、由比ヶ浜は無難に、な—
にお茶を買っておく。

なんで返事してんだよ、おいお茶と並べたいなこれ。

教室に帰ると鋭い視線が俺に送られる。

そして、雪ノ下が可愛い口から叱責の声を上げた。

「遅い」

「悪かったよ、ほら。由比ヶ浜もやるよ」

「えっ、悪いよ。はい、これ」

「いや、アレだよ。最近の自販機は当たりとかあるんだよ、だからそういう感じでいらねえよ」

「でも、そういうわけには」

たかが飲み物代、学生に取っては大きい額だと思いがオッサンになるとな。

後輩に奢る時とか、大人の金銭感覚からするともうね。

数百円で女の子と喋れる、キャバクラよりエコだよ。

つまり、貰わなくても十分ということがここに証明される。

QED、証明完了な。

困った顔する由比ヶ浜をスルーして自分の席に座る。

暫く俺の事を見つめて、小さい声でありがとうと零す由比ヶ浜にほっこりする。

昔はビッチとか言ってたけど、ちゃんと返事挨拶出来るんだから親御さんが素晴らしい人達だと実感する。

そんな由比ヶ浜も将来は幼稚園の先生だからな、今からでも溢れ出る包容力。

あの包容力は男の子からも大人気だった、変な意味じゃないよ。

「それでなにすんの」

「家庭科室に行くわ」

「なにすんの？」

「ク、クッキーを焼くの」

「由比ヶ浜さんは手作りクッキーを食べてほしい人がいるのだですよ。でも、自信がないから手伝ってほしい、というのが彼女のお願ひよ」

ふむふむ、知ってた。

という訳で家庭科室に移動する。

俺が特に理由も聞かないのに驚いてないで、お前らも行くぞ。

家庭科室はバニラエッセンスの香りに包まれていた。

雪ノ下が牛乳やら卵やらを手早く持ってきて料理しているからだ。

難なく料理しちゃうとか、この完璧超人め。

女子力とかそういうこと言うやつは、料理くらい出来るようになればいいと思う。

なお、意外と女子高生は料理が出来ない。

必要に迫られるような年齢じゃないしな。

「おい、エプロン曲がってるぞ」

「ごめん、あり……ヒッキー！マジキモイ!」

「悪かったよ、セクハラだったな」

ばつと、料理器具を持ちながら胸元を隠す由比ヶ浜。

あの、俺が指摘したのは後ろの部分で胸ではないんですが、すいませんセクハラでしたね。

「由比ヶ浜さん、遊ばないの。比企谷くんみたいに取り返しがつかないことになるわよ」

「おい、人を騷の道具に使うな、なまはげかよ」

「初めて人の役にたったのだから喜びなさいよ……ああ、別に頭皮に對して含む所があるわけじゃないから安心して」

「そうか、安心した。答えは得たよ、雪ノ下……」

まだだ、まだ俺の頭皮は大丈夫。

一応ね、気にしてるんだからやめろよな。

おい、なんだその優しそうな微笑みは、見るんじゃねえよ。

「ふふっ、ふふふ」

「んんっ、由比ヶ浜さん。何をしているの、それとも結べないのかしら。もう、仕方ないわね」

「えっ、あつ、雪ノ下さん」

「早く」

苛立ち混じりの指示におっかなびつくりしながら由比ヶ浜が従う。

そうか、まだゆきのんではなく雪ノ下なんだよな。

尊い、尊いでござるなあと俺の中の黒ひげが囁いてやがった。

「なんか……お姉ちゃんみたいだね」

「私の妹がこんなに出来が悪いわけがないけれどね」

「夜に人生相談しそうだな、それだと」

「えっ?」

「えっ?」

「えっ?」

「ごめん、今の発言は忘れて下さい。」

等価交換だろ、錬金術師。いやチェンジでお願いします

微妙な空気を無視して、俺は料理に取り掛かる。

用意したのは売店で買ったお菓子、じゃがりこをお湯で蒸してなんちやつてポテサラ。

ベビースターと卵、キャベツ、小麦粉、その他色々を混ぜてもんじや焼き。

うまい棒を何本も投下、お湯で煮る、コーンポタージュ。

「……喰うか」

「ねえ、どうして貴方は一人でそんなことをしてるのかしら？」

「男子高校生はお腹が空くんだよ、ほら男飯は男限定だから、女子はクッキー作ってなさいっての」

オレ一人でやらなくても出来るという信頼の表れが何故読み取れない。

別に、距離が近いのにドギマギするから逃避してるわけじゃないよ。

「なんか、すごいね！」

「お、おう」

「……はあ」

まったくやれやれとでも言いたげな顔だった。

お前、実は親戚に承太郎とかいう名前の人がいたりする？いない、あつそうですか。

少なくとも一回目のクッキーは失敗してしまった。

まあ仕方ない、由比ヶ浜の料理スキルは尋常離れしていたからな、マイナス方向にな。

「じゃ、じゃーん。見た目はアレだけど食べてみなきゃわからないよね」

「理解できないわ、どうやったらアレだけのミスを重ねる事が出来るのかしら」

由比ヶ浜が物体Xをテーブルの上に置いた。

俺も雪ノ下も、教育方針としてはやって覚えさせるといふ方法を取っている。

だから、今回の料理は犠牲として考えている。

たどえ溶き卵に殻が入っていようが、小麦粉がダメになろうがバターが固形で混入しようが、砂糖と塩が入れ間違えられてようが、バニラエッセンスドバドバ牛乳マシマシでも本人が気付かないならスルーだ。

もう途中から、どんなミスするか予想するくらい連発するミス。

そして、案の定時間まで失敗し見事炭素の塊が出来たわけだ。

敢えて見過ごしたミスの責任を取るために、食材を無駄にしないという信念を雪ノ下から感じる。

俺、感じちやつたからお前が食べてくれると信じてる。

「食べてみないとわからないよねー」

「悪いな、自分の料理でお腹いっぱいなんだ」

「比企谷君」

俺が自分の料理を食べようとすると、横から手を掴まれた。

えっ、なんですかやめて下さい痴漢で訴えますよ。

「比企谷君、分かっているわよね」

「どうしたんですか、雪ノ下さん笑顔で何か良いことでもあったんですか」

「比企谷君、ねっ」

「ねっじゃねーよ、いやいやいや、離せ！離せば分かる」

「そうね、分かりきっていることだけど貴方はまた逃げるのよね」

死なば諸共、お前だけ逃しはしないという執念がひしひしと伝わってくる。

具体的に、その白くて細くて俺の手首をキュツとしている指先からだ。

この女、俺を逃がさない気満々である。

これを見越して、食べれない理由を作ったのに意地でも巻き込む気が。

「味見」

「味見って、お前にしては珍しい言い間違いだな。これはな毒味、もしくは人体実験っていうんだぜ」

「どこが毒だしっ……うーん、やっぱ毒かなあ？」

首を傾げる由比ヶ浜、小首を傾げてどうみたいに覗き込んでくるけど、聞いちやう時点でダメです。

明らかにダメです、木炭だよこれ木炭だよ。

正月に見るわ、囲炉裏とかの横にあるアレだ。

もしくはバーベキューで下に入ってる。

「食べられない材料は使ってないから大丈夫よ」

「マジで、食べるのかよ」

「私も食べるから大丈夫よ」

「いつの間に俺も食べる流れに……」

も、って貴方、私もって俺が含まれちゃってますよ。

雪ノ下は皿を自分の側に引き寄せてゴクリと生唾を飲み込んだ。

ちよつとエロいと思っってしまった俺がいた。

そんな雪ノ下さん、更に煽るようにちよつと涙目になっていた。

じつくりと皿を持ち上げて周囲を観察する、お値段はいくらでしょうかとか鑑定団みたいな雰囲気だ。

「し、死なないかしら」

「おい、声が震えてるぞ。無茶しやがって」

「おい、声が震えてるぞ。無茶しやがって」

そう言いながら由比ヶ浜を見ると、昔同様に仲間になりたそうに此方を見ていた。

「おい、声が震えてるぞ。無茶しやがって」

ちよつといい、昔のようにお前も食べる、人は痛みを知る必要があるってペインも言ってただろ。

「行くぞ雪ノ下、MAXコーヒーの貯蔵は十分だ」

「行くぞ雪ノ下、MAXコーヒーの貯蔵は十分だ」

意を決して飲み込み、俺は死んだスイーツ。

それはクッキーと言うにはあまりにも黒々しかった。

硬く、ジャリジャリしていて、苦く、そして大雑派な味だった。

それは正に炭素だった。

俺ならドラゴン殺しならぬ八幡殺しって名付けるね、MAXコーヒ―無かったら復活できてなかった。

「うう〜苦いよ不味いよ〜」

「ぶふっ、ごほっ、おほっ……」

「ちよ、大丈夫ヒツキー!?!」

由比ヶ浜が自然体で苦味を表現していた。

ただ、俺の上げたMAXコーヒ―を飲んだ後に目の前で口を開けるもんだから思わず咳き込んでしまった。

おま、男の前でそれっぽい行動やめなさい無意識でやるとかビツチかよ。

俺みたいなのプロの独身じゃなかったら、大変な事になるぞ。

なんか最近、下ネタばかりだな。男子高校生の身体になったからなのだろうか、鬱だ死のう。

「なるべく舌に触れないように流し込むと良いわ、劇薬みたいな物だから」

「言外に毒だつて認めちゃってるよ」

「えっ? あつ、本当だ! 酷いよ、雪ノ下さん!」

「ごめんなさい、つい本音が……んんっ、なんでもないわ」

「ごまかせてないわ」

俺の発言に、お前それ以上言ったら殺すと養豚場の豚を見るような目で見られた。

要するに鋭く睨みつけられた。

すいません、これ以上の発言は控えさせていただきます裁判長。

雪ノ下は紅茶を口直しの為に入れて、反省会をスタートさせた。

議題、由比ヶ浜の料理をどうするか。

「さて、どうすれば良くなるか考えましょう」

「最近は何だかバリーというのがあるが、大丈夫だ旦那が飯を作るなんて珍しくもない」

「そうそう、毎日バリーすれば……あれ、私ってば作ってないよ!」

「おい、やめとけよ。いつか死人が出るぞ、お前は頑張ったよ。もう、

「ゴールしてもいいよな」

「良くわかんないけど馬鹿にしてるよね！ねえ！」

「お前が料理をしないことで解決したな」

「全否定された！」

「比企谷君」

咎めるような雪ノ下の言葉が俺に向けられる。

そうだな、雪ノ下俺が間違っていたよ。

「雪ノ下さん……」

「それは最期の解決方法よ」

「それで解決しちゃうんだ！」

がつくしと肩を落として深い溜め息をつく。

……揺れ、揺れる!?

まあ、それは置いといて真面目にやるか。

「やっぱりあたしに料理は向いてないのかな、才能ってゆーの？そういうのないし」

「努力あるのみだな、頑張れ応援するぞ」

「う、うん……」

いつもの癖でそんなこと言ってしまったが、教師の応援するぞは期間限定で卒業してしまうんだ。

ごめん、今は教師じゃなかったな。

「そうね、努力は立派な解決方法だわ。正しいやり方をすればね」
「でも」

「さつき才能がないって言ってたけど、その認識を改めなさい。最低限の努力もしない人間には才能がある人を羨む資格はないわ。成功できない人間は成功者が積み上げた努力を想像できないから成功しないのよ」

雪ノ下の言葉は正論だった。

正論過ぎて、強すぎて、反論する気力を殺す程に鋭かった。

その鋭さは人を殺して傷を付けるほどで、殺傷するレベルだった。なんて西尾維新みたいな感想を抱いていた。

もうちよつと優しく言えないもんかな。

「雪ノ下はトラウマスイッチが入って酷いことを言ってるが、由比ヶ浜の事を思っ言ってるから誤解するなよ。ちよつと敵を作りやすいタイプなんだわ」

「その言葉そっくりそのまま返すわよ」

「悪いが俺は敵は作らない、何故なら敵になるほど強くないから相手が認識できない」

「それって無視されてるだけだよな」

そうともいう。

あれ、なんでフォローしたら俺が傷付いてるの？いつの間にかカウンター食らってたのかよ。

「でもさ、こういうのって最近やらないって言うし」

「その周囲に合わせようとするのはやめてくれるかしら、不愉快よ」

雪ノ下はそこで言葉を止めた。

うる覚えだが、もっと酷いことを前世では言ってた気がする。

少なからず俺のフォローが効果を発揮してたのかもしれない。

あれだよ、あとから響いてくるんだよ、時間差だったってわけだよ。

俺の行動は、無駄じゃなかった。

「か、かつこいいいー」

「えっ？」

「建前とか全然言わないんだね、なんかそういうのかつこいいい！」

「な、何を言ってるのかしら？これでも結構キツイこと言ってるつもりなんだけど」

「世の中にはそれがご褒美な人とかいるし、そういう人種なんだろうな」「違ふよ！ぶつちやけ軽く引いたけど、そういう人種じゃないしっ！」

悪いな、シリアスな雰囲気は俺は苦手なんだ。

茶化さないと、切っ掛けだとしても見てられないんだわ。

お前らが仲悪そうにしてるのって、なんか嫌じゃん。

「ごめん、次はちゃんとやるから」

「ッ……」

雪ノ下は言葉を失っていた。

強い意思の籠もった目で真正面からまっすぐに謝られたからだ。

落ち着き無く視線を反らし、手櫛で髪を払う。

手を上げたり下げたり、何か言いたげな感じを出しつつ言葉を探していた。

頑張れ頑張れ、雪ノ下さん。

「わ、分かってくれたなら……ごめんなさい、言い過ぎたわ」

「はいはい、そういう百合展開はいいから。仲直りした所で、もう一回作るぞ。今度は先生と一緒にやってみようなあ」

「いつから貴方が私の上になったのかしら、妄想もここまでくると痛いを通り越して恐怖すら感じるわよ」

「あはは……ヒツキー、流石の私もフォローできないかも」

「いいんだよ、これで……」

共通の敵が居たほうが蟠りが無くなりやすいだろ。

少なくとも、さつきよりは空気が軽くなったように感じられた。

夢が叶うわけがない、現実には敵わないんだから

再び挑戦することに相成った。

錬金術の歴史から分かるように料理は科学である、これくらいはみんな知ってるよな。

知らないって言った奴らはたぶん中二病に患ってないんだと思う。

「由比ヶ浜、まずは作る前に復唱しろ。説明を読む、アレンジしない、数値は正確に」

「何言ってるの、さっきと同じだから出来るよ」

「まったく、いいか菓子というのは結構難易度が高いんだ。というのも、グラム単位の差でも味が変わるから料理みたいに大雑把だと誤魔化せない」

「そ、そうなんだ……」

基本が出来てないのに応用編に入るから大抵の料理初心者は失敗する。

小町ちゃん、湯煎ってチョコにお湯を入れることじゃないのよ……うう、頭が。アレは嫌な事件だった。

「粉を振るう時は円を描くように……」

「円だぞ、丸を描くんだ」

「ちゃんと小学校で習ったでしょ、円よ」

「知ってるし、二人共……あれ、円？丸？」

「悪い、今のは俺が悪かった」

「ダメだわこの子、早くどうにかしなきゃ」

あれ、あれれ、と首を傾げる由比ヶ浜に頭を抱える雪ノ下。

しかし、それは序章に過ぎなかった。

「待つて、止まれ」

「由比ヶ浜さん、ボウルが回っているわ」

「混ぜろ、混ぜろってんだこのポンコツが！」

「ヒツキーうるさいっ！」

「MAXコーヒーでも飲んでリラックスしたらどうかしら」

もはや、笑うしかない状況に俺も雪ノ下も混乱していた。

にも関わらず、本人は先程の約束すら忘れた様子で隠し味を入れようとする始末。

「おい、その後ろに隠したものはなんだ」

「な、何のことかな」

「来なさい由比ヶ浜さん、桃缶なんか置いて来なさい」

「アレンジはしないって言ったけど、アレは嘘だよ」

長く苦しい戦いがそこにはあった。

雪ノ下が、あの雪ノ下雪乃がオーブンに入れた時には疲弊していたくらいだ。

「目を離すなよ由比ヶ浜、室温や湿度によって食感が変わるからな」

「そ、そうなんだ」

「今のは口から出まかせだ」

「騙された!?!騙されたよ!」

オーブンからオーブンすると、いい匂いが立ち込めていた。

さあ、実食!

「なんか違う……」

「美味しい、美味しいけど……」

「どう教えれば良いのかしら」

由比ヶ浜の味は普通だった。

普通にクッキーだった、美味すぎる味ではない。

まあ、雪ノ下は作り慣れてるから上手いのであって、上手に作れるから美味しいのだ。

作れるだけマシになったと思うしか無い。

「別にこれで良いんじゃないか。美味しいものが食わせたいなら買えば良いんだし」

「うわぁ……」

「今までの事が全否定されてるのだけど」
き、企業努力を舐めるなよ。

昨今の食品業界は、日夜研鑽に努め少しでも営業成績を上げるために頑張ってるんだから出来合いの食べ物でもいいじゃない。

既製品の方が手作りより美味しい事であるだろ。

「まあ女子だし、男心が分からないのだろう」

「仕方ないでしょ、付き合ったこと無いんだから！そりゃ、つ、付き合ってる子とかいるけどそれに合わせてたらこうなってたわけだし」
「別に由比ヶ浜さんの下半身事情については聞きたくないのだけど、比企谷くんは何を言いたいのか？あと、貴方が男子代表なのは不服だわ」

「下半身事情なんて中々聞かないわ。あと、不服申し立ては受理しません」

プロの独身舐めるなよ、俺ほど男の子の気持ち分かるやつは居ない。

少なくとも、三十年以上は男の子やってます。

「これは友達の友達の話なんだが……ぶつちやけ、もう貰えるだけでいいんだよ。手作りじゃなくてもいいんだよ。既製品しか貰えない、そんな時が来るんだから……」

「ああ、やけに実体験染みてると思ったらヒツキーの話だったんだね」
「友達の友達……比企谷くん、友達というのは数えられないから友達なのよ、友人すらないのに馬鹿なの？」

「はっ、そうだよ！矛盾、矛盾してる！異議あり！」

「おい、俺にだって友人いるかもしれないだろ！逆転しようとするんじゃない、それは違うよ！」

ははは、俺だって友達はたくさんいる。

雪ノ下と由比ヶ浜と彩加だろ、不本意だが、葉山だろ。あと戸塚だろ、卒業してから会ってないが葉山の取り巻きズだろ、あと彩ちゃん。ほら見ろ、たくさんいるわ。

「いい、比企谷くん。貴方の数えたそれは妄想で、実在しない人物よ」
「そういうお前だって友達いないだろ」

「なっ……」

雪ノ下は口元を押さえて狼狽え始めた。

はい論破、お前は敵は居ても友達は俺達しかいないのだ。

「ねえ知ってる、争いは同じレベルでしか起きないんだって」
「ぐっ……」

「お前、卒業したら殆ど会わなくなるからな」

「友達がいるってそんなに素晴らしいことかしら？」

「なんで二人から集中砲火食らってるの!？」

「そりゃ、だってお前、それを言ったら戦争だろうが。」

まあ、落ち込んでる由比ヶ浜に言えることは別にそんなの気にするほどでもないという事だ。

犬の事も、気にすることではないのだ。

「ヒ、ヒツキーはさ……貫えたりしたら嬉しかったりする？」

「俺の名前は比企谷だ。まあ、悪い気はしないわな」

「ふ、ふうん……」

「ヒツキーは？ヒツキーもじゃなくて……」

「わ、わーわー！何言ってるの雪ノ下さん、馬鹿なの？」

「はあ？」

「心の底からごめんなさい」

半目で低い声を出した雪ノ下の背後には吹雪が見えた。

何、耳が遠くて聞こえなかつたのだけれども一回言ってくれるかしら？とでも幻聴が聞こえそうだった。

あと新手のスタンド攻撃かと思うくらい、絶対零度の視線だった。

一撃必殺が確率で決まるだろうな、なお反撃する間もなく全面降伏する由比ヶ浜がいた。

色々あったが、もう大丈夫だろうということその日は解散となった。

前回と違った結果になったが、俺がビッチ発言してないからかもしれない。

なんてことだ、こんなことでバタフライ・エフェクトが起きるとわ。

俺は俺が恐ろしいぜ、いや汚い言葉を使ってないだけなんだがな。

帰り際、俺は由比ヶ浜がいなくなった後にした雪ノ下の会話を何気なく思い出す。

「私は自分を高められるなら限界まで挑戦すべきだと思うの」

「そうだな、努力することは無駄じゃない」

「あら、貴方が肯定するなんて明日は雨ね」

「頑張った事實は慰めになるってのが俺の持論だ」
「ただの自己満足よ、貴方のそういう甘い所嫌いだよ」
「でもそういう甘い所嫌いじゃないぜって言うところだろ、そこは」
「何とも言えない雪ノ下の表情が堪らなく辛かった。」
「なんか言ってくれよ、居た堪れないだろ。」

後日談、平塚先生から送られてくる悩める生徒はいなくなった。
いないということは俺達の部活は寂しいもので、警察官が暇して
のと同義だった。

優しい世界だ、平和でいいな。

まあ、その平穏は軽いノック音で崩壊された訳であるがな。

「やつはろー!」

「なにそれ、知能指数低そう」

「はあ……」

雪ノ下が盛大な溜息を吐く。

どうした、疲れが今頃になってきたのか。

「え、あんまり歓迎されてない感じ? 雪ノ下さん、私のことひよつとし
て嫌い?」

「別に嫌いじゃないわ……ちよつと苦手、かしら?」

「それ女子言葉で嫌いだからね!」

へえ、なお社会人言葉でも嫌いだよ。

ソースは俺、まあ俺レベルだと発言すらされないけどね。

「で、何か用かしら?」

「私ってば料理にハマってるじゃん!」

「初耳よ」

「で、こないだのお礼ってーの、クッキー作ったからどうかなくて」

「やだ、聞こえなかったのかしら? スルーされたわ」

雪ノ下をここまで困惑させる由比ヶ浜、ガハマさんや君にはポジ
ティブモンスターというあだ名をつけてやろう。

「いやー、やってみると楽しいよね。そうだ、ゆきのんお昼一緒に今度
食べよう」

「私、一人で食べるのが好きだから……ゆきのんって気持ち悪い」
「うっそ、寂しくない？どこで食べてるの？」

「部室だけど、私の話聞いてたかしら？」

「あ、それでき、あたしも放課後暇だし部活手伝うね。これもお礼だから全然気にしないでいいから」

「お話……私の話を……聞いてる？」

どうしよう、と雪ノ下が此方を見ていた。

怒涛の一斉攻撃に雪ノ下はどうかしろと言いたいらしい。

助けるわけねーだろ、いつも俺に暴言吐いてくるしお前の友達だろ、なんとかしろよ。

「おつかれさん」

「あ、ヒッキー」

「うわっ」

声を掛けられて反射的に振り返ると、黒物体が飛んできていた。

思わずキャッチではなく叩いてしまって床に落ちた。

や、やめて泣きそうな顔しないで！若い頃ならいざ知れず、動体視力衰えると避けれないから防衛しちゃうの。

「い、いちおーお礼の気持ち……気持ち、だったんだけどな……」

「わ、わーい嬉しいな……なんかごめん」

「今のは、どちらも悪かったということにしましょう」

雪ノ下の言葉が偉く優しく聞こえた。

感情的になるとか、子供かよ……子供だったわ

四限のチャイムが終わった。

今こそ、社会人になってからじゃ分からないありがたいがたみを噛みしめる時。

いやあ、仕事の合間にゲームやるような申し訳ないようなこの感じが寧ろ特別感があっていいわ。

別にやってしまっても怒られないんだもんなあ、学生最高だわ。

なお、社会人が昼休みにゲームばかりしてるとうわあつて視線を送られる。

「ああ、懐かしいわ」

これ、別の会社のハードになって戻ってきたと思つたら今度はオンラインとかスゲー高い新ハードじゃないとプレイ出来ないとか色々あつたけ。

それにしても、流石昔のゲームはエグいぜ。

無印の方がエグかつたけど、今も十分エグいぜ。

「ちよおま、ハンマーとか!」

「ガンランスでジェノサイド余裕でした」

「お前らあぶねえぞ、ほい」

「おい、自爆……ダメージ食らってない!」

知らなかったのか、片手剣使いは極めるとボマーになれるんだぜ。

ハンターハンターみたいに、この方法については解説しないけどな。

俺はボマーだが、そこまで親切じゃない。

「流石だぜ、ぼっちなだけあつて極まってる」

「友達の協力が出来ない分、一人で戦えるレベルだ」

「回りを巻き込む立ち回り、一人でやってるだけあるぜ」

「お前ら、遠回しに傷付けてないか?剥ぎ取り邪魔するよ、邪魔するよ?」

思えば、いーれーてーの一言が言えない子供だった俺が社会の荒波に揉まれて丸くなったものだけ。

コミュニケーション、学生となら取れるんだからな！

なお、教師とか普通に無理です。

年下とならコミュニケーション取れる、つまり年下の奴らしか居ない学生時代はバラ色と見た、フハハハ。

そう、スクールカーストの低そうなゲーマー達となら仲良く出来るぜ。

まあ、そういう生徒間の序列とか正直学生のうちだから楽しんでけと言いたいけどな、俺からしたらみんな同じだからな、序列とかテストの点数以外でないからな。

「いやー、今日は無理だわ。部活あるし！」

「二日くらい良くない？今日ね、サーティワンでダブル安いんだって、あーしチョコとシヨコラが食べたい」

はいうるさい、葉山お前のところの奴らだよ。

なんなの、キラキラしてて教室我が物顔ムーブとか、イケメンだからって許されると思うなよ。

「葉山くんいいわー、目の保養だわー」

「ねー、カツコイイよねー」

なん……だと……許されるだど!?

嘘だろ、どういうことなんだよ現実って奴は！

「あつ、ハチ、ハチなんとか君やられてんじやん」

「あと二回までだぞ、ヒキなんとかくん」

「お前らうろ覚えだな、ハチマンってキャラ名書いてあるぞ、これ本名じゃね？」

おーい、お前ら。

友達だと思ってたのは俺だけだった、っていう事実も突きつけないでくれませんかね。

なんで名前覚えてないのよ、俺も覚えてないから人のこと言えなかったわ、スマン。

「悪いけど、今日はパスな」

「俺ら、今年はマジで国立狙ってから」

葉山の声が聞こえた。

見なくても、アレだろ額に指当てて許せ三浦って言うてんだろ。イタチみたいなこと言ってるんだろ、知ってた。

あと、スポーツばかりじゃなくて勉強もしなさい。

国立は勉強で目指しなさい。

「それにさー、ゆみこ。あんまり食いすぎると後悔するぞ」

「あーし、食べても太らないし。あー、やつぱ今日も食べるしか無いから、ね、ユイ」

三浦、お前は代謝が落ちたら後悔するぞ。

三十過ぎるとな、節々は痛いし太りやすくなるし、痩せにくいしで大変なんだぞ。

若いうちから、食べるのが癖になると後悔するぞ。

その先は、後悔しかないぞ。食べたいと思った気持ちは間違いじゃないとか言ってる場合じゃないぞ。

「あーあるある、優美子スタイルいいよねー。でき、あたし今日は予定があるから」

「もう今日は食いまくるしか無いでしょ」

何が面白いのか周囲から笑い声が聞こえる。

怖い怖い、雰囲気ですべてでしよ、今の面白いか？

まるでバラエティの笑い声みたいだ。

「だーからー、いくら食べても平気なんだって。太んないし。ね、ユイ」

「やーほんと、優美子神スタイルだよねー足とかキレー、で、あたしちよつと」

「えーそうかなー。でも雪ノ下さんとかいう子の方がやばくない？」

「あ、確かに。ゆきのんはやばー」

鋭い視線が由比ヶ浜に刺さる。

怖い、あと怖い。

女子って探り入れるの自然にやってるじゃん、でもって確信すると好戦的じゃん。

なんなの、戦闘民族なの？視線で、殺せそうだな。真の女子は視線で殺すのか。

「あ、や、でも優美子のほうが華やかというかー」

あー、そういえば雪ノ下と飯食ってたな。

最初にアイツが教室来たんだっけ、忘れてたわ。

案の定、約束してるのか由比ヶ浜が困った顔を浮かべる。

「あのさ……あたしお昼にちよつと行くところあるからさ……」

「あ、そーなん？じやさ、帰りにあれ買ってきてよ。レモンティー。

あーし今日飲み物忘れちゃってさ。パンだし、お茶ないときついじゃん」

「えっ、え、けど、あたし戻ってくるの五限になるっていうか、お昼まるまるだから、それはちよつと無理ゲーみたいな」

俺が偶に言うからって今、無理ゲーって言わなかったか？

そんなことを思っていると三浦の足が不機嫌そうに揺れ始めた。

見え、見え……おいおい、お前らも死んでるじゃんかクエスト失敗すんなよ。

「あー、死んだわ……なあ」

「やべえわ……モンスターの、揺れがな」

「本当、あともうちよいだよな！もうちよい！」

横を見たら、ゲームしてた奴らも三浦を見ていた。

お前ら、俺と一緒にかよ。

悲しいけど、これ男子学生だから仕方ないよね。

「はあ？ちよ、なにになに？なんかさー、放課後こないだもばつくれなかった？ちよつと、最近付き合い悪くない？」

「やー、それは何ていうかやむにやまれぬというか、私事で恐縮ですが一身上の都合により、私用がありまして離席させていただきます、またの機会にご利用を……」

なんか無理して単語を捻り出そうとしてるのだけは分かった。

頑張ったな、そこだけは評価してやる。

でも、今度は文法も気を付けような。類語とか多いし、最後は意味がわからないぞ。

「ごめん」

「だーからー、ごめんじゃなくて。言いたいこと良いなよ」

「…………ごめん」

「またそれ？あんさー、ユイの為に言うけどさ、そういうはつきりしない態度って結構イラツとくんだよね」

さて問題です、貴方の前でイジメが発生しています。

答え①ぼっちの八幡は突如反撃のアイデアがひらめく。

答え②仲間がきて助けてくれる。なお、その仲間は雪ノ下以外にいない。

答え③見ないふりをする。現実是非情である。

さあ、どれでしょうか。

昔の俺ならどうしただろうか、まあ流石に助けてやるべきだろう。なんか、クツキーとか貰ったし、一宿一飯の恩義ってあるじゃん。

「おい、その辺で——」

「るっさい」

「うるせえのはテメエだろ三浦、周りに聞こえるような大声で、謝ってる人間に対して怒鳴り散らして熟年離婚したての教頭みたいだぞお前」

「はあ、いきなり出てきて何、意味分かんないこと言ってるの？アンタ、何？ユイの彼氏気取り？もしかして、好きなの？」

イラツ、この女……俺だって釣り合うとは思ってないがそれとこれは関係ないだろ。

バンバン机叩きやがって、学校の備品を何だと思ってるんだ。

落書きとが掘ったりとかお前みたいなタイプがするんだよね。

ああ、イライラするぜ。

「すぐ恋愛に結びつけるお前のような女をネット界限でなんて呼ぶか教えてやるよ、スイーツ脳って言うんだ。スゲエな、糖分取りまくりなお前にびったりだな」

「お生憎様、アンタじゃ釣り合わないから。ユイのこと諦めたら？」

「釣り合わないとか、葉山の事が好きなお前に言われたく……スマン」

「なっ、えっ、あっ!？」

「いや、悪い。なんか、ごめん……口が滑った」

「ち、ちが、隼人！違う……くないけど、じゃなくて……ふえ!？」

おいおい、何だよこの空気。

クラスの居心地の悪さは尋常ではなかった。

由比ヶ浜の責める視線も、言い過ぎたと思う要因だった。

「由比ヶ浜さん、自分から誘っておきながら待ち合わせ場所に来ないのは……なに？」

「ご、ごめんね。でも、ゆきのんの携帯知らないし……」

「そう、そうだったかしら。なら、仕方ないわね、所でこの空気は何？」

「ゆきのん、そういう空気読まないところよくないと思うよ」

「ご、ごめんなさい。今、空気読めてなかったのね、何だか違和感を感じただけど口にしないほうが良かったのね」

そんな中、やってきた雪ノ下の無遠慮な発言が羞恥心を煽る。

こ、殺せー！いつそ殺せえ！

三浦が顔を真赤にして睨んでくる視線とか、女子の冷たい視線とか、男子のニヤニヤした顔とか、もう忘れたいわ。

すまない、三浦……悪気はなかったんだ、今のは俺が悪かった。

中二病でも感想が欲しい

暫くぶりのことであつた、部室の前で雪ノ下と由比ヶ浜が立ち往生していた。

「何してんだ」

「ひゃう!？」

可愛らしい声でビクンビクンとする二人がいた。

何それ、エロい。

俺の頭が腐つてるのか、普通にビビってたただけだった。

「比企谷くん……び、びっくりした」

不機嫌そうに睨んでくる雪ノ下は、まるでウチの猫そっくりだった。
た。

ウチの猫も、夜中にリビングで出くわすとそういう動きするわ。

「で、何?」

「部屋にね、不審人物がいんの」

「で、何?」

「話聞いてよー!」

いや、聞いたよ。

不審人物がいたんだろ、どうせ材木座だろ。

あつたな、こんなのつて感じで思い出せるわ。

「そういうのいいから、中にはいつて様子を見てきてくれるかしら」

部長命令という感じでプイツとする雪ノ下。

仕方なく、へいへいと言いながらドアを思いつきり開ける。

ビクツとしながら、部室の中にいた不審人物が口を開いた。

「ククク、こんなところで出会うとは驚いたな、待ちわびたぞ、比企谷八幡!」

「な、なんだと?!驚いてるのに待ちわびたつて、文法的に矛盾してるだろ」

「えっ、あつ、いやそこはほらノリというか言葉の綾というか」

「意味知つてて言葉の綾つて使つてるか?」

「……………」

因みに、技巧的な、飾った言い回しという意味である。

弁明の際に使うので間違っていないが、一応小説家志望なら意味くらい教えておいたほうが良いだろう。

決して、嬉しそうな顔に面倒だなど思ったから八つ当たりしたわけじゃない。

「比企谷くん、あちらはあなたの事を知ってるようだけど」

「もうすぐ夏だというのに、コートを羽織って指ぬきグローブとか付けてる知り合いなんぞ、俺にはいない」

「まさか、この相棒の顔を忘れたとはな……見下げ果てたぞ、八幡」
「相棒って言ってるけど」

由比ヶ浜が冷ややかな視線を向けてくる。

いや、体育のペアが一緒なだけだからね。

「貴様も覚えているだろう、あの地獄のような時間を共に駆け抜けた日々を……」

「いや、だから体育のペア組まされただけじゃねーか」

「ふん、あのような悪しき風習、地獄以外の何物でもない。好きなやつと組めだと、あの身を引き裂かれるような別れなど二度は要らぬ！アレが愛なら、愛などいらぬ！」

「そのネタ平塚先生とやったから、いらない」

「えー、そんなー」

うるさい、みんな北斗好きすぎ。

それにしても、お前やめとけよ。

社会人になってから死にたくなるだけだぞ、なんで大学でもやっちゃったんだろって後悔するぞ。

高校で卒業しておけ、高校生活は手遅れだから諦めろ。高校生活は犠牲になったのだ。

「取り敢えず、害はないから気にしないで入ってこいよ」

「本当に？ほんとに本当？」

「俺が嘘ついたことがあったか？」

「ドラマとか漫画でたまに聞くセリフだけど、あるよね多分」

「なんでもいいけど、あなたに用があるんじゃないの？」

由比ヶ浜と談笑していると、はやくどうにかしろよお前の客だろみたいな視線で雪ノ下が俺に声を掛けた。

いや、知らんし。

「ムハハハ、ときに八幡よ。奉仕部とは、ここでもいいのか？」

「ええ、ここが奉仕部よ」

「そ、そうであつたか、平塚教諭に助言頂いたとおりならば八幡、お主は私の願いを叶える義務があるわけだな」

「あるあ……ねーよ。お前の願いは、俺の実力を超えてるから無理だわ」

「えー、そんなー」

無理なものは無理、お前を小説家になんて出来ないのである。

コネとか無いから仕方ない。

コネで入つても、なんだこのクソラノベって言われるだけだぞ。

「うわあ……」

「彼は今流行りの中二病なんだ、そつとしておいてさしあげろ」

「ちゅーに病？」

やだ近い、やたらかわいい顔があつていい匂い、ちゅって発音する時の唇つてスゲー可愛い、おつと少し混乱したぜ。

俺じやなきやこの程度じやすまなかつた、プロの独身舐めるなよ。

「病気なの？」

「ネットスラングみたいなものだ。自分でカツコイイと思って黒歴史を量産する、ある意味病気みたいな物だ。病気みたいに治るんだが、治ったら悶えてしまうんだ」

「気持ち悪い……」

「言葉には気をつけるよ由比ヶ浜、うっかり自殺するぞ」

俺も覚えがあるからな、中二病じやないにしても思い返してみるとなんであんな事言つたのかとか色々あるからな。例えば、平塚先生に……あああああ、死にたい！おつと、うっかり自殺するところだった。

「顔色が悪いわよ、比企谷くん」

「何でもない、意図せず口説いてた事実には気付いて悶えてただけだ」

「口説……そう、はやく立ち直るといいわね」

「フラレた前提はやめてくれます、つてか告ってないから！」

「わかってるわ」

「分かってねー顔だよ、なんも分かってない」

や、やめろー！その優しい目で、俺を見るんじゃないやねえ。

あと、由比ヶ浜は侮蔑の視線を送るな死にたくなるから。

お父さん、臭いって言うような娘みたいでしょ、娘とかいたことないけどさ！

雪ノ下は呆れながら、材木座の眼前に立っていた。

由比ヶ浜から、ゆきのん逃げてという声が掛けられる。

やめてやれよ、可哀想だろ。あと、雪ノ下は怪人に襲われるヒロインか何かなの？

「だいたいわかったわ、貴方の依頼は心の病気を治すってことでいいかしら」

「は、八幡よ、余は汝との契約の下、朕の願いを——」

「話してるのは私なのだけど。人が話してる時はその人の方を向きなさい」

学校の先生のように、雪ノ下は襟首掴んで無理矢理、正面に向けさせていた。

動けば触れてしまいそうな距離、いや近いでしょ顔が赤くなってるじゃん。

やめたげてよ、材木座のライフはもうゼロよ。

「モハ、モハハハハ、これはした——」

「その喋り方もやめてちょうだい」

「……………」

「なんで、この時期にコート着てるの？」

「この外套は瘴気から身を守る外装であり」

「喋り方やめて」

「……はい」

「その指ぬきグローブは？指先、防御できてないんじゃないの？」

「えーと、これは我が」

「喋り方」

「ハハハ！ははっ、はあ……」

高笑いは小さくなり、湿り気を帯びた溜息となりて沈黙へと移り変わった。

雪ノ下は優しい目で語りかける。

「その病気を治すってことでいいのよね？」

「別に、病気じゃないですけど……」

もはやキャラを作ってなかった、素だった。

キラキラと人の言葉を信じて疑いもしない雪ノ下の視線に耐えられなかったのだ。

いや、突っ込まれて設定の作り込みが微妙だったただけだな。

そろそろ助けてやるか。

「これだろ、お前の依頼って」

「それ何？」

「んっ」

由比ヶ浜に手渡すが数秒見てから、無理って顔で返却してきた。

そして首を傾げて聞いてくる。

「これ何？」

「読めよ」

「読んだけどよくわかんない。殺しはしない、喰らえ必殺のとか変な文章だった」

「殺さない必殺技とか哲学かよ」

「それは新人賞に応募しようとしているが、友達がいないので感想が聞けぬ。読んでくれ」

「とても悲しいことがさりと聞こえた気がするわ、いえ、言われたのかしらね」

ああ、徹夜で読んだ記憶が蘇る。

嫌な事件だったな……俺達に見せようとしてたな確か。

「投稿サイトとかスレに晒せばいいだろ」

「それ無理、奴ら容赦ないから死ぬぞ、我、酷評されたら多分死ぬ」
「でも、雪ノ下のほうが容赦ないよ」

「比企谷くん、人聞きが悪いこと言わないで」

「でもなあ……」

「言わないで」

「……はい」

なつ、材木座容赦ないだろ。

結局、俺達は持ち帰って原稿を読むことになった。

「取り敢えず、校閲するか」

誤字脱字が気になって、読むとかそういうレベルじゃなかった。

火蓋が切つて落とされたとか、火蓋は切るもので、落としたら火縄銃撃てないだろ。

満天の星空とか、満天で空いっぱいって意味だからな。

役不足とか、本人の力量に対して役目が軽すぎるからだから、難しい言葉を無理して使うな。

「今日は徹夜になるな……」

震えるぜ膝、燃え尽きるぞ情熱、刻むぜ精神的ダメー
ジ！

材木座の書いたジャンルは学園バトル物だった。

俺の前世の記憶では、アイツはいつのまにか小説投稿サイトに書いてたりしてたけどな。

その頃は、今と違ってアニメ化する作品が多くて今みたいにビビったことは言っていなかった。

とはいえ、そこで奴が書いていたのは異世界転生物だったのだが今と対して変わりはない。

まあ、変わらない作風と言えれば聞こえが良いと思うんじゃないか。成長しないのと停滞はイコールではない訳だから、何故か昼間ではなく夜限定で戦いが始まることもツツコンではいけない。

秘密組織があつて、運良くそこと出会って、でもって自分みたいな能力者が実は知らないだけでたくさんあつたのもツツコンではない。ない。

普通の少年だったくせに、ずっと戦ってきた奴らを何も訓練してないのに無双ゲーばりに倒していても主人公だから仕方ない。

でも、一言で表すならちよつと疲れた。

六限を終えて部活の時間、背中から元気のいい声がかかった。

振り返れば、振り返らずとも分かっていたが、俺に話し掛けるやつは一人しか居なかった。

由比ヶ浜が、お前カバンに何にも入ってないじゃんとツツコまれそうな薄いカバンを肩に引っ掛けながらあらわれた。

「ヒツキー、元気なくない？どしたー」

肩を叩いた後に、俺の前に回り込む。

下から首を傾げながら、後ろ向きで歩きながら覗き込む。

その際揺れる胸は蠱惑的で、端的に言ってやめて八幡を翻弄しないで！である。

「反応からして、お前は読んでないようだな。あんなの読んで元気な理由が知りたいわ」

「え?」

なんのこと、何いつてんの、そんな感じでぱちぱちっ目を瞬かせる由比ヶ浜。

そこから思い出したのか、あーとかえーとかいいながら同意の言葉を吐く。

「あー、だよねー!や、あたしもマジ眠いから」

「はいはい、眠い眠い」

「むー」

不満そうに、そんなことを口走る由比ヶ浜。

はいはい、あざといあざとい。

俺が教室をそつと開けると、案の定雪ノ下が眠っていた。

カーテンが棚引く教室の窓際で、髪を揺らしながら穏やかな寝顔のまま、すうすうと寝息を立てていた。

その微笑むような、柔らかな寝顔はいつまでも見ていたい気分になる。

サラリと揺れる黒髪も、白く透き通る肌も、形の良い桜色の唇も、黙っていれば綺麗だということがよく分かる。

そんな唇が、いきなり動き出し、視線を上げれば射抜くような瞳が俺を見た。

「驚いた、あなたの顔を見ると一発で目が覚めたわ」

「その意味を聞くと精神衛生上良くなさそうだな」

「賢明な判断ね」

賢明な判断になるとか、やっぱり聞かないでおこう。

それにしても、やはり苦戦したらしい。

「私、この手のものは全然読んだこと無いし。……あまり、好きになれそうにないわ」

「あー、あたしも無理無理」

お前は読んでないでしょと俺が視線で投げかければ、ジト目に耐え

られなかったのか由比ヶ浜はさっと目を逸らす。

まあ、品評会が始まるまでに軽くなら読めるだろうけどここは後の経験の為に放置しておこう。

いつか、つまらない書類を読んでこないといけない仕事を大人は一度くらい経験するのだから、はやいうちに失敗した方がいい。

「頼もう」

「挨拶」

「……し、失礼する」

「そうか、失礼するなら帰ってくれ」

「なんなの、二人して拙者をイジメて楽しいか！」

「おいおい、イジメなんて我が崇高なる学び舎にあるわけ無いだろ、殺すぞ」

「今！なう！イジメより怖いわ！」

意気揚々と入ってきた材木座を、雪ノ下が窘めるように言葉を呟く。

単語だけで意思を示す、その有様はまさに女王だった。

この部室のヒエラルキーが一瞬で理解できたな。

その後のやりとりは、俺との軽快な会話だ。

八幡は裏表のない良い人、いいね？

「さて、では感想を聞かせてもらおうか！」

「それでは、これより材木座氏の作品に関する品評会を始めます」

「お、おう」

こういうのは雰囲気が必要だろうと、俺は机を移動させてさながら面接会場のような物を作ってやる。

決して、人が疲れてるのに自信満々で腕組みしてムカ……イラ……腹が……まあ、不満があった訳じゃないよ。

原稿をちようど持っていた由比ヶ浜にタイトルをまず読んでもらうことにする。

「双剣は交錯し反転世界は流転する、できた」

「おー、すごいぞ読めるんだな」

「えへへ……って、当たり前じゃん！学力一緒だかねー！」

言い方は馬鹿っぽかったが、たしかにこの学校に入れる程度の学力があつたか。

なお、材木座はタイトルを音読されて耳を真っ赤にしていた。

フハハ、恥ずかしいだろう知ってた。

「ごめんなさい、私にはこういうのよくわからないのだけど、つまらなかつたし読むのが苦痛ですらあつたわ」

「ぐふう……参考までにどの辺がつまらなかつたのかご教授願えるかな」

「なぜ倒置法ばかりなの？てにをはの使い方知ってる？小学校で習わなかつた？」

「ぬぐう……それは読者に——」

「それはまともな日本語を書けるようになってから考えることではないの？それとこのルビだけけど誤用が多すぎるわ、能力にちからって馬鹿なの？だいたい、幻紅刃閃と書いてなんでブラッディナイトメアスラッシャーになるの？ナイトメアはどこから来たの」

それは、まるで言葉責めであつた。

ところどころ変な声を出すから、余計に変な感じだった。

いいよそういう効果音、由比ヶ浜のむーなら可愛いけどお前のぶひいは豚にしか聞こえないわ。

「どうか話の先が読めすぎて一向に面白くなる気配がないわね。突然ヒロインが服を脱いだのはなぜ？地の文が長いし、似たような説明が続きすぎて展開が進まないのが嫌だわ」

「ぴゃあ!？」

材木座がビクンビクンしだした、虚しい光景だ。

男がやつても需要がない、戸塚なら可だがな。

「そのへんでやめてやれ、一度に言っても処理できないだろう」

「まあいいわ、じゃあ次は由比ヶ浜さん」

「え、えーと、あれあそこが良かったよねー」

「ふおおおー！どこが、どこが良かったああああー！」

俺の助け舟で由比ヶ浜とバトンタッチする雪ノ下、今までのダメージのせいで急に優しくされた材木座は興奮していた。

正直、俺でも引く。なお、由比ヶ浜はドン引きだ。

だが、悲しいことに由比ヶ浜の言葉は口から出まかせだった。

「こう戦うところとか、ヒロイン助けるところとか、初登場とかいいよね」

「そうだろうそうだろう」

「ねえ、それってこういう作品全般に言える当たり障りのないことなんじゃ」

「テレビで具体的な内容に触れないで本を褒めるアイドルがいるだろ、アレと一緒にだからそつとしてやれ」

材木座には聞こえていなかったが、由比ヶ浜には聞こえていたらしくプルプル震えていた。

頑張れ由比ヶ浜、これも経験だぞ。

「さて俺の番だがタイトルが双剣なのに、なんで主人公の武器日本刀なの？あと反転世界って何、いつ出て来るの？灼眼のシヤナの封絶でも意識してるの、パクリやめろよ。あと祖父から剣を習ったらしいけど祖父って幼いときに敵の襲撃で死んだらしいじゃん、いつ習った」「ぐあああああ！」

「あと、相手の能力を無効化する主人公って二番煎じだろ。お前から二つてキャンセル能力好きすぎ。ライバルがコピーする能力って、お前からコピーする能力好きすぎ。あと学園バトル物なのに日常描写が登校だけって意味分からん、設定の理由は？組織の人間、学生いないじゃん」

「うああああああ！」

「特に理由もなく敵を殺せるのも可笑しいだろ、なんで自分に能力があったことに戸惑ってるのに初めて人を殺すのには戸惑わないんだよ。敵なら仕方ないですぐ殺して、その後死体に目もくれずにヒロインに話し掛けるなよ。ヒロインも素敵とか言ってる前に、目の前で起きた凶行に動揺しろよ、あとなんで脱ぐ」

「ぶひひひひひー」

取り敢えず、第一章のダメな所はこれくらいでいいか。

材木座にしては起承転結を気にしたらしいし、あと三章残ってるか

らな。

「それじゃあ、次は第二章の話にはいるが」

「ヒツキー、もうやめて！ちゅーにのライフはもうゼロよ！」

「HA☆NA☆SE！なぜ、お前がそのネタを知っている」

「急にどうしたの、まるで意味が分からないわ」

やめろ、俺は徹夜したんだ。

この徹夜テンションで、指導せずにいられるか！

「材木座、お前に足りないのは作り込みだ。設定一つを適当にするな、描写は拙くても良いから分かりやすくしろ、話の流れは繋がりを意識しろ、で一番言いたいのは」

「一番言いたいのは……？」

「これ、なんのパクリ？」

「ぐはあ!？」

KO、そんな声が聞こえそうなくらい材木座はダメージを受けた。

どうやら、俺の言葉がトドメを刺したらしい。

やっちまったぜ。

男なら戸塚、女ならアナスタシア、どちらを選ぶべきかが問題だ

朝、妹の小町がトースト片手に雑誌を読んでいた。

横から覗けば頭の悪そうな、ラブ活だの激モテなどムカつく単語が羅列されている。

「お前、将来買った服に対して幼すぎ買うんじゃないよ、まったく言うことになるぞ」

「いいんです、だって小町ってば若いから、それはもう若気の至りつてやつ……若至ちやうの!?!」

「あつたま悪そうな造語を作るんじゃないよ、まったく」

お兄ちゃん知らないの？今はやってるんだよ！必読推奨なんだよとか言われた。

うんうん、それもラブ活だよねとか言っていればいんだろ、と適当に流す。

はあ、今日もブラックコーヒーが美味いわ。

「あれ、お兄ちゃん。それって砂糖入ってないよ？」

「何その角度、シヤフトなの？シヤフ度なの？」

「質問に質問で返さないで、これだからゴミいちちゃんは……」

「……………甘い見通しをする奴が多すぎる世の中だ、コーヒーくらい苦い方がいい」

「こないだと言ってること違うよ」

歳を取れば嫌でも分かるさ、MAXコーヒーはおじさんには甘すぎる。

いつからだろうな、俺の手のひらの中にあつた甘さを忘れてしまったのは……健康診断で引っかけたからだわ。

「時間」

「うわやば」

「口元、シヤム」

「嘘、シヤムってる!?!」

「お前の口は自動小銃なの？マシンガントークぶちかますけどさ」

「はあ？ちよつと、何言ってるか分かんない」

それは凄く冷たい目だった。

いや、そうだな今のは俺が悪い。

そんな我が妹はパジャマを脱ぎ捨て、脱ぎ捨てたパジャマで口を拭う。

男前すぎるだろ、お前ってばよ。

「てかさ、お兄ちゃんときどき何言ってるか分かんないよね」

「年の差だろ、俺もお前がときどき何言ってるか分かんない」

「私達、考えることは一緒だね！あは、今の小町的にポイントたかーい！」

「ちよつと、何言ってるか分かんない」

「えー」

ほらほら、女子中学生のパンツだよ！パーンツ！と朝からハイテンションな妹。

やめなさい、女の子なんだから恥じらいを持ちなさい。

もうお兄ちゃん妹のパンツ見すぎとか言うお前は、アニメの見過ぎだから。

「フツ」

「は、鼻で笑うだど!？」

「先に外で待ってるぞ」

「あー、待って！四十秒でしたくするから！」

「早くしろよ、空から女の子降ってきちやうでしょ」

まあ、この平穏な日常の世界で空から女の子が落ちるなんて絶対ありえないのだが、とはいえ登校である。

他愛ない会話をしながらの登校、まあ由比ヶ浜の事に対する恐ろしいカミングアウトもあったが二回目なので知ってた。

俺宛のお菓子美味しかったか、俺は食べてないぞっ！

「ちなみにお前の言うお菓子の人は由比ヶ浜って言うんだぜ、小町ちゃん」

「すごい、お兄ちゃんはなんでも知ってるんだね」

「なんでもは知らないよ、妹の事だけ」

「なにそれこわい、まーいいや！じゃね、小町学校だから！」

「いや、俺も学校だから」

やめてよね、貴方とは違うんですって扱い。

まあ、そんな妹は颯爽と降りて、ありがとー車に気を付けるんだよと手を振ってくる。

そんな妹を俺は鼻で笑い、籠に入っていたカバンを投げつけた。

「わわっ!？」

「お前は忘れ物に気を付けろよ」

「えへへ……お兄ちゃん、大好き」

「……お前、俺が兄貴であることを感謝しろよな！」

じゃなかつたら、速攻告ってフラレてたわ。

フラれちやうのかよ！

月が変われば授業も変わる。

その授業のカリキュラムに頭を悩ませている先生側の事情も知らず、文句を垂れる学生の多いこのご時世。

あと数年したら、ブラック部活問題とかあるのだから部活で飽きたとか言つてあげるなサッカー部。

そんなチャラ男代表の教師泣かせなサッカー部と絡む気の無い俺はテニスを希望した。

「ふう、八幡。私の魔球を披露してやれないのが残念だわー、お前がいけないと我は一体誰とパス練習すれば良いのだ？」

「安心しろ、パスを貰わないから練習する必要はない」

「授業なのーそれはもはや、見学！見学だぞ、ハーチーマーン！」

「うるせえ、はよ行け」

最後の方は涙を浮かべて懇願していた材木座、だから言ったじゃんサッカーとか地獄だぞって。

モテたいからと安易にサッカーを選んだお前が悪い。

二人一組になってと言われて、俺は何も言わず佇む。

良く言えばレベルが違いすぎてペアになれない孤高な俺。

悪く言えばレベルが違いすぎてペアになれない孤独な俺。
どっちも独りだったわ。

「えー、マジかよ。気楽にやろうぜ、えつと名前なんだっけ」
「よろしくな、コート行こうぜ」

最終的に余り物同士でやることになる。

人数偶数にしてるから、壁打ちしたら彼が独りぼっちか先生とやる
ことになっていたわ。

まあ、俺も名前知らないモブAみたいな紹介のされそうな茶髪の男
である。

あれだろ、幻の六人目とかそんなんだろ、ミスディレクション使い
そう。

「ほい」

「オーラー！やべーつしよ、ナイスショット！」

「そだな、ほい」

「喰らえ、うりやああー！」

「すごい、君はテニスの才能があるフレンズなんだね」

人の体力を奪うような左右への揺さぶり、俺はそれを追いかけて足
元に打ち返す。

いや、ホントいい運動になるわ。腹筋とかバキバキになっちゃう
わ。

「あはは、弱すぎでしょ！必死すぎなんですけど」

「ああ、そうだな。おっと、手が滑った」

「えつ、ギャ!?!」

「悪い、下手くそ過ぎて顔面にボール行っちゃった。授業だし、許して
くれよ」

ホント、学生って馬鹿。

魔法少女が闇落ち不可避なくらい言葉の暴力がすぎるぜ。

所でテニスというのは当たると当たて方に得点が入る。

当たて俺は悪いが、当たった方がテニ斯的には悪い。

つまり人として負けたが勝負には勝った。

「やれやれ、また勝てなかったぜ」

昼休み、ゲームで言えば彩ちゃんイベントである。

彩ちゃんイベントとは、大天使戸塚エルと俺が邂逅を果たす約束されし勝利のステル回収イベントだ。

「あれ、ヒッキーじゃん」

「おう」

「なんでここに居るの？」

「静かだからな、ここは」

お前こそなんているんだよ、俺は静寂を求めているんだよ。

無限の龍神ムーブだつての、なお八幡は幼女じゃないので需要はない。

「お前はどうせ、罰ゲームでジュースでも買いに来たんだろ。雪ノ下とよくやってるもんな」

「えっ、なんで分かったし！あれ、でもゆきのんとは今日がはじめてだよー」

「本当にそうか？自分が忘れていたら、誰が証明できる」

「えっ、言われてみれば……どうしよ、私忘れてるのかな」

「由比ヶ浜はほんとアホだなあ……」

俺は優しい目を向けた。

昼空の下、泥だらけで舌を出すゴールデンレトリバーに向けるような目だ。

アホってなんだし、と拳を作って上下に振る由比ヶ浜は色々揺れていたとだけコメントしておく。

やめろよ、その揺れは男子の心を揺さぶる。

うおおおお、大天使戸塚エルよ！悪魔由比ヶ浜の誘惑に揺れる信仰を許してくれ！

俺は揺れる信仰を取り戻すべく、地上に降臨なされた大天使戸塚エルと視線を移す。

戸塚たそく、なお戸塚エルが見えるのは学生だけだ。

将来はモデルになっちゃうんだから、イケメンになっちゃうんだからな。

「何見て、おーい！さいちやーん！」

「条件反射で言葉を吐いてないか？」

戸塚はコテンと首を傾げ、とてとてと駆けてくる。

由比ヶ浜がアホな犬だとしたら、戸塚はハムスターだった。

うは、超かわいい。なお、俺は気持ち悪い。

「よつす、練習？」

「うん、ウチの部弱いから……お願いしてたらやつと最近OK出たん
だ」

戸塚、お願い、もしかして通報案件では？

俺の中のグーグル先生が囁くんだよ、テニス部顧問を問い詰めろと
な。

まあ、そんな汚れきった妄想は異端なので切り上げる。

戸塚かわいいよ、略して戸塚わいい。

お前がアナスタシアのコスプレしてくれた時の事を、俺は生まれ変
わっても忘れてないぜ。

「由比ヶ浜さんと比企谷くんはここで何してるの？」

「勘違いするな、由比ヶ浜とは喋ってただけで何も無かったからな」

「やー、ホント何も……勘違いするなって何！されると困るの!？」

「困るだろ、お互い」

「えっ、あっ、うん」

なに頬染めてんの、やめろよ戸塚の前だぞ。

変に誤解させるだろ、そういうのは少女漫画の世界だけにしてくれ
よね。

「フフフ、二人は仲良しだね」

「戸塚は無垢だなあ」

そっかー戸塚に恋愛は早かったな。

大人になるって汚れるって事だっつて分かんだね。

知らなかったか、ボツチからは逃げられない

俺は久しぶりだが、戸塚は初めましてだった。

クラスでチラチラ話したそうに見てた俺は、まるでスライムのような
だっただろう。

仲間になりたそうに見ている感じだ、共通点は殴ったら死ぬくらい
弱いことか。

「そういえば比企谷くん、テニス上手いよね」

「まあ、フォームが綺麗だってよく言われる」

「もしかして経験者？」

「いや、ゲームしかやったことない」

「あ、アレねみんなで作るやつ！」

「俺は独りでしかやったことないから、多分違うゲームだな」

ゲームキューブは独り用のゲームしか無いから、いいね。

任天堂はパーティーゲームなんて作ってないから、いいね。

昼休み終了のチャイムがなり、お互いに顔を見合わせて戻ろつかと
言葉を交わした。

「うおおおおお！波動球！」

「漫画の見すぎな、ほい」

「ま、曲がる魔球!？」

「ただのスライスな、ほい」

「唸れ、俺の右手！」

「テニスは走って追いつかないと返球出来ないぞ」

ルールを覚えているか、ちゃんとゲームとしてプレイ出来るか。

そういう知識と運動面の採点をするためにテストとして試合が組
まれた。

試合なので、容赦なくやらせてもらう。

悪いな、これもテストなんだわ。

「わっ、やったー！すごいよ、比企谷くん！」

「ああ、ありがとな。後、俺のことは八幡でいい」

「えっ……じゃ、じゃあ僕の話は彩加で、いいよ」

「待って、なんで最後に間をあけた。いいよだけ、躊躇いがちになんて言ったの」

「なんか、恥ずかしくて……えへへ」

いや、熱いわ。

もう、夏が到来してるかもしれないなかった。

その後、授業の片付けを戸塚と行う。

俺くらいのレベルになると周囲に無視される能力を環境にまで適応できる。

ステージが違うんだよ能力のな。

この能力を使って、無視したいものは無視することで戸塚とふたりきりだと思ひ込める。

終わることが分かっているけど、俺もつとテニスしてたかったよ。

安西先生、テニスが……テニスがしたいです！えっ、私に言われても、って困らないですよ。

「ねえねえ、八幡」

「何だい戸塚、何か欲しいものでもあるのかい？」

「えっ、ないけど。あのさ、八幡さえ良ければテニス部に入ってくれない？」

「悪い、もう俺は部活入ってるんだわ。力が、欲しいんだろ」

「すごい！何で分かったの、少年マンガみたいなこと言ってるけど」

「強くなりたいもんだろ、男の子って奴はさ」

俺の発言に戸塚が大喜びしてた。

八幡知ってる、戸塚って男の子っぽいものが好きだよな。

そういう所が逆に女子っぽい気がするけど、性別の壁なんて些細なものだ。

性別すら戸塚は超越してるからな、もしやアルティミットシィング戸塚なのでは？

俺は、考えることをやめた。

放課後、俺は部活をしながらテニス部を見る。

今日は、戸塚が休みなのかいなかった。

はあ、休みだろうか。

「ねえ、窓の外を見ながら溜息なんて吐かないでくれる？ 煩わしいわ」
「その煩わしき、恋煩いとかいうオチだったりする？」

「私は戦場ヶ原ひたぎではないのだけど、怖気が走るわ」

「なに、お前遂に読んだ感じ？」

「し、仕方ないから読んであげたわよ。ええ、貴方の趣味に合わせてあげないと、友達のいない比企谷くんは話すことが無くて言葉に詰まってしまうものね。良かったわね、私が寛大な心で部員のケアをしてくれる人格者であって」

「そうだな、お前照れ隠しで長文言う癖は直した方がいいぞ。今時の安直なキャラ設定のヒロインみたいだから」

「なっ……!?!」

固まる雪ノ下、昔も指摘した時に早く言つてよと怒つてたな。

あとその後、照れ隠しじゃないわつて言うから、じゃあ何で怒つたんだつて言つて撃沈してたっけ。

墓穴を掘つて撃沈した雪ノ下が懐かしい。

「べ、別に私は」

「ちよつと待つてろ」

俺は何か言う雪ノ下を放置して、部室のドアを開けた。

そして、廊下を覗き込むと後ろ向きで歩く由比ヶ浜と戸塚が案の定いた。

「でね、でね、あれどしたのさいちちゃん？」

「あつ、八幡」

「えっ? わつ」

ボフツと、俺にぶつかってくる由比ヶ浜。

おいおい、後ろ向きで歩くと俺にぶつかって危ないでしょ。

「うえ?! ヒツキー、ヒツキーなんで!?!」

「悪かったよ、ぶつかりたくないくらい気持ち悪くてな」

「やや、違くて! 別に触れるのが嫌つて、違うよ! 触りたいつて意味でもないからね!」

あたふたする由比ヶ浜。年頃だもんな。

異性と手と手が触れてあたふたする年頃だもんな。

俺なんか平塚先生が勿体ねえとか言っつてよこした飲みかけの酒とか普通に飲んでたわ。

間接キスに恥じらいを感じてた純粋な八幡は死んだのかもな。

「どうしたんだ」

「今日は依頼人を連れてきたんだよ、ふっふーん！」

「お前には聞いてない」

「塩対応!？」

戸塚の口から俺は聞きたかつたんだよ。

まあ、いいから教室に入れて由比ヶ浜の頭を軽く叩きながら言う。

あつ、どした？

「何してるんだ、早く入れよ」

「う、うん……そだね、うん」

「あつ、お前入部届書いとけよ、じゃないと雪ノ下は部員と認めないぞ」

「えっ、無駄にルールに厳しくない！ゆきのん！」

「無駄じゃないわ、ルールは守るべきですもの」

「書くよ！超書くよー！仲間にいれてよっ！」

慌てて入部届を書く由比ヶ浜、俺はそれを横目に紅茶を入れる。

雪ノ下が、ガタつと中腰になって私の仕事とか言ってるけど、声が小さすぎて囁くようで怖かった。

「それで依頼内容はテニス部を強くしてくれってことだろ、いいぜ引き受けよう。それしか選択肢はないからな」

「奉仕部は便利屋ではないわ、あと部長は私よ」

「そうだな、自信がないなら雪ノ下は見てるだけでいいぞ」

「大きく出たわね比企谷くん」

あー、変なスイツチ入っちゃったよ。

何だお前、頭来て令呪使っちゃうくらい負けず嫌いなもの。

知ってた、お前みたいなのチョロインって言うの知ってた。

「良いでしょう、戸塚くん。貴方の依頼を受けるわ！テニスの技術を向上させればいいのよね？」

「は、はい、そうです！ぼ、僕がうまくなれば……みんな一緒に頑張ってくれると、思う」

戸塚が俺の後ろでプルプルしながら応えた。

「そうだよな、氷の女王みたいなやつがそんなこと言ったら怖いよな。」

強くする代わりに命を貰おうとか言いそうだよな、魔女かよ。

「あっ、いい香り。得も言われぬような女子高生の香り、シャンプー何使ってるの可愛いのは作れる的なの？」

「ちなみに具体案は」

「死ぬまで走らせてから死ぬまで素振り、死ぬまで練習、かな」

ふふ、つとちよつと微笑み混じりの雪ノ下。

「いや微笑ましさとかより恐ろしさが際立つからな。」

「ぼく、死んじやうのかな……」

「お前は死なない、だって俺が守るもの」

戸塚あああ！とか言いながら走り出しそうである。

「あっ、待ってやっぱ無理そう。」

クソ、奴のATフィールドには勝てなさそう。

ちなみにATはオートマではなく、貴方戦う気なのかしらという言葉の略だ。

「放課後は練習があるのよね、昼休みに特訓しましょう」

「りょーかいー！」

最後は入部届を書いた由比ヶ浜の元気な返事で締めくくった。

昼休み、地獄の特訓が今始まる。

やたら目立つ淡いブルーのジャージに着替えてコートに向かう。

制服の中、ジャージ姿は目立った。

「ハーハッハッハッ八幡」

「忙しいから、またな」

面倒くさい相手にそのせいで絡まれる事もあったが、比企谷八幡はクールに去るぜ。

しかし、回り込まれてしまった。

「こんな所であうとは奇遇だな」

「待ち伏せしていてよく言う、お前の腹は隠しきれてないぞ。あと忙しいんで」

「……悲しい嘘をつくな、お前に予定などある訳がないだろ」

「失礼な、俺はこれから信仰を試される所なんだ」

ほんと、マジどいて。

体積大きすぎ、邪魔だから。

具体的に言おうと、入り口にジャストフィットするのやめて。

「八幡っ！一緒に行く」

「は、八幡……その御仁は……嘘だろ、嘘だと言ってよハーチー！」

「戸塚は可愛いだろ、だが男だ！」

「こんな可愛い子が男の子なはずがない！」

「我が信仰を愚弄するか、この匹夫めが！こんな可愛い子が女の子なはずがないだろ！」

それ言ったら戦争だぞ！お前と道を違える事になろうとは、全然寂しくないわ。

「えっと、八幡の友達？僕、戸塚彩加です。男子の友達あんまり多くないから、よかつたら仲良くしてね」

「……おい、八幡。ひよつとして、これ我のこと好きなんじゃないか？モテ期？モテ期というやつか？」

「痩せたら来るぞ、多分。だから、今は勘違いだ。勘違いすんな、いやマジで」

「マジでか！よっしやあ、運動するわ！」

すごい、コイツ自分の聞きたいことしか聞いてない。

「雪ノ下キレルから、じゃあな」

「あの御仁……ほんと怖いからなあ」

俺達は恐怖の前に心一つになつた気がした。

失いかけた友情が治った気がした。

「と、戸塚殿おおお！友達になってやらんでも、いやむしろ恋人になつても良いですぞ」

「えっと、それは無理。友達ってことで」

「戸塚殿が微笑んでる、これが現実だと……八幡ドヤア！ドヤア！」
やっぱ、コイツ殺したほうが良い気がした。

俺、やつぱお前のこと嫌いだわ

死ぬ程筋トレさせられる昼休み、ふつ普段から鍛えている俺に死角はなかった。

「んっ……くっ、ふう、はあ」

戸塚が苦悶の表情を浮かべながら、薄く汗を掻く。

コチラに視線を向ければ、大丈夫だよと明らかな嘘を吐いて頬を上気させていた。

戸塚の細い体ではキツイのだろう。

俺と違って、体力ないから仕方ない。

「八幡、僕の事はいいから続けて」

「お、おう」

アレ、俺筋トレしてるんだよね？

クソ、去れマールラよ！我が信仰を妨げるのではない！

「うう、くっ……んあっ、はあはあ、んんっ！」

戸塚から視線を逸らせば、向かいには何故か由比ヶ浜がいた。

由比ヶ浜が腕を曲げると、体操服の襟元から肌色がちらつと覗く。

何でその位置にいんだよおおお！マールラ、お前がマールラだったのか！

あっ、ピンク色。

「ガフッ！」

「比企谷くん、続けなさい」

「あ、足を退けてくれないか雪ノ下」

スカートスカート、見えちゃう見えちゃう。

なお、見たら死ぬと思うので顔は上げなかった。

暫くそんな日常を過ごし、第二ステージ。

ボールとラケットを使つての練習、人類は遂に道具を手に入れた。

鬼教官雪ノ下の指導を受けながら壁打ちである。

その後、雪ノ下の指示に従う由比ヶ浜が籠からボールを投げて打つ練習だ。

「もつとあの辺とかその辺の厳しいコースに投げなさい」
「うわあ」

雪ノ下、ライン側とかネット際とか諦めて走るのやめる場所ばかり狙って性格悪いな。

じゃなくて本気で鍛えていた。

だから、こつちみんなよ。なに、俺の心悟られてるの？

戸塚は食らいつくが二十球目に差し掛かりそのあたりで転倒した。
痛い痛い、見てられない。

「うわ、さいちやんだいじょーぶ!？」

「だ、大丈夫」

「まだやるつもりかしら?」

「うん、もう少し頑張ってみよう」

「……後は頼むわね、由比ヶ浜さん」

そう言つて、雪ノ下は髪をフアサつと翻しながら踵を返す。

その髪を触る動作いるの? いや、様になってるけどさ。

そんな様子を戸塚は不安そうに眺めていた。

「だ、大丈夫かな? 何か、怒らせること言つたかな」

「いや、救急箱でも持つてくるつもりだろう。あの子は誤解されがちだが、心根の優しいしっかりした子だ」

「なんかヒツキー平塚せんせいみたい」

由比ヶ浜が舌足らずな餓鬼みたいな喋り方でそんなこと言つてきやがった。

おいおい、俺は学生だぞ……いや、先生だったか。

「でも、もしかしたらいつまでも上手くならないし呆れられちゃったかな」

「それはないよ、ゆきのん頼ってくる人を見捨てたりしないもん」

「そうだ、由比ヶ浜の料理に付き合うくらいだぞ」

「どういう意味だツ!」

由比ヶ浜が弄んでいたテニスボールを俺目掛けて放り投げた。

避け……無理、死……痛い。

ゴレイヌさんみたいに材木座とチェンジできれば良かったのにな。

つうか、コントロール良すぎだろ。

「みつともなくても良い、努力は実るまでに時間が掛かるかもしれないけど無駄じゃない。だから、戸塚は少しずつ頑張れば良いんだ、少なくとも俺はお前が諦めるまで付き合っただけさ。」

「うんっ！」

戸塚は元氣よく応えて練習に戻る、弱音も吐かずよく頑張った。

泣き言だっけ口にしなかった。

「おりやあああ」

「えいつ」

「よ、よいしょ〜」

「やあっ！」

「えーい」

「たあ！」

「……………」

「あれ？」

しかし、先に由比ヶ浜の方が根を上げた。

戸塚よりは動いてないのに、疲れていた。

「もう疲れた〜ヒツキー交代してよ」

「まあ、ボール拾い大変だよな」

さて、ラリーでもするか。

厳しいコースに様子を見ながらボールを送れば実戦に近い練習になるだろう。

とか、思ってる頃がありました。

忘れてた、そうだよこんな事もあったな。

「あ、テニスしてんじゃんテニス！」

きやびきやびした声、振り返ると葉山のグループがコチラに向かってくる。

材木座の横を通り過ぎた辺で、向こうも俺達の存在に気付いたらしい。

「あ…………ユイたちだったんだ…………」

空気の読める事に定評がある海老名がそんな事を漏らす。

まあ、読めるのは腐臭だったりもするんだけどな。

三浦はこないだのこともあつてか、俺達を無視して戸塚に話し掛ける。

「ね、戸塚。あーしらもここで遊んでいい？」

「三浦さん、ぼくは別に遊んでる訳じゃ……なくて、練習」

「え？何？聞こえないんだけど」

戸塚の返事は小さすぎるためか、聞き届けられない。

三浦の言葉に、戸塚は自分のズボンを握りしめ俯いてしまう。

やめたげてよ、虐められてる女子みたいな反応してんじゃん。

「練習……だから……」

「はあ？」

だが、そのまま黙ると思っていた戸塚が強い意志を瞳に滾らせながら前を向いた。

その光景に、俺と材木座が中腰に立ち上がって外国人四コマみたいな反応をする。

やった、これで勝つる。

「ふーん、でもさあ、部外者いるじゃん。つてことは別に男テニだけで訳じゃないでしょ？」

「それは……」

「じゃあ、別にあたしら使ってもよくない？ねえ、どうなの？聞いているんだけど」

「……だけど」

そこまで言つて戸塚が俺を見る。

おお、戸塚よ、大天使戸塚エルよ、我が信仰を試されるのですね。

まあ、材木座は戦力に数えられてないし、由比ヶ浜はどっちかっていうとあっち側、明らかに敵対の雪ノ下はいないから、残ったら俺だよね。

「悪いが、ここは戸塚が許可を貰ってるから他の人は無理だ」

「は？だから？アンタ達は使ってんじゃん」

「戸塚の許可が出ないんだから、お呼びじゃないんだよ三浦」

「そーだぞー！三浦ア！」

「ああ!？」

「……って八幡が言っていました、すいません」

材木座ア! 何しに出てきやがった! 外野は引っ込んでろ。

三浦にビビるなら最初から鳴くんじゃねえよ。

鳴かなければ撃たれることもないって言うだろ。

「まあまあ、喧嘩腰になんたってみんなでやった方が楽しいしき。そういうことで良いんじゃないの?」

「みんなってのは誰だよ葉山。それを決めるのはお前だろ、楽しいって決めるのもお前だろ」

「何が言いたい?」

「みんなの意見は正しい、みんなの意見に従わないのは問題になるから我慢させる。そして表面上は仲良しで、問題が起きたならみんなが悪かったって言うんだろ。だから一人ひとりが悪くて、個人的に誰がどうのじゃない。責任を分散させ、なあなあで問題を解決する。誰も恨まれない、誰も恨めない方法を取る、お前はそういう奴だよな」

大多数の幸福のために少数の犠牲を容認する。

何だお前、ブリテンの王様かよ。

「何だらだらしてんの、あーしテニスしたいんですけど」

「お前、少し黙れ」

「はあ?」

「おいおい、やめろって! じゃあこうしよう、部外者同士で勝負して勝ったほうが戸塚の練習に付き合う、強い奴と練習したほうが戸塚のためになるだろ」

ああ、そうだった。

お前はそんなことを言ってたな。

それで表面上は解決だろうよ、で仲良くもない三浦とやって戸塚は練習に身が入るのか。

三浦が飽きずにつつと付き合ってくれるのか、約束だからって言われて不満を覚えないとも言うのか。

それは一時的な解決であって、問題の先送りだ。

自分達の都合はいいだろう、少しでもテニスコートが使えたら

満足だろうな。

でも、そこに戸塚の都合はないのだろうか。表面上は仲良しでも戸塚が迷惑に思うとは微塵も思っていないのだろう。

「俺、お前のこと嫌いだよ」

「えっ?」

「我もー! イケメン反対! 死すべし!」

俺の言葉は、材木座によって冗談めかして聞こえた。

どこで聞きつけたのか、一年生から三年生まで観客が集まっていた。

なんなの、お前ら暇なの? 馬鹿なの?

その人集りに戸塚はプルプル震えて庇護欲を誘う、あつ可愛い。

そんな様子に戸塚ファンからさいちやーんという声援が送られ、さらにプルプルする。

きやあああ、そしてプルプル震える戸塚。

まさに可愛いのが出来ていた。

部外者同士の勝負、つまり戸塚は出られなかった。

「あれ、優美子やんの?」

「たり前だし! あーしやりたいて言っただけ」

「いやー、不利でしょ、ヒキタニ君だっけ、不利じゃねー」

「俺の名前は比企谷だ。人の名前を間違えるとか殺すぞ」

「あー、ごめん」

戸部、次はないと俺は睨みつける。

材木座と由比ヶ浜がフルフルしてたが、今は機嫌が悪いのだ。

こんな子供っぽい感情が俺にもあったのか、いやもしかしたら身体に影響を受けてるのかもな。

「じゃあ、男女混合ダブルスにすればいいじゃん! でも、ヒキタニ君と組んでくれる子いんの? マジウケる」

「ひ、卑怯だぞ! だ、大丈夫か八幡」

ギャラリイもドツと笑いが巻き起こる。

うるせえよ、そのとおりだから言い返せないじゃないか。

「ごめん、八幡」

「気にすんな、あと由比ヶ浜お前もな」

「この程度、一人で充分だ。」

「それに、別に一人で倒してしまっても構わんのだろうか？」

「最高にドヤ顔で俺は言っちゃった。」

「ハーチー、それは死亡フラグ！」

「うるせー材木座」

ぼつちとは孤高なるや否や……孤高っていうか孤
独だよ

俺がコートに立つ、さながら大英雄に挑む守護者ムーブ。

今の俺、最高にカッコイイわ。

「あー、もうやる！」

「由比ヶ浜、落ち着けよ。お前のグループ、ガン見してんから」

「えっ、うそマジ？」

ギギギとでも聞こえそうな程ゆっくりと由比ヶ浜は三浦を見た。

見た、聞いた、ならば後は恐怖するのみ。

そこには笑顔の三浦がいた。

「ユイー、あんたさあ、そっち側につくってことはあーしらとやるって
ことなんだけど」

「なあなあ八幡、アイツ第四位とかじゃないよなビーム撃たないよな」

「お前、現実と妄想を一緒にするな」

笑顔が怖いつてすげーよな、才能だわ。

ギャラリーも流石にビビったのか、ざわつく。

ざわざわ……なんかみんな鼻の形とか角ばって見えてきた。

気のせいですか、そうですか。

「でも、あたし、部活も大事だからやるよ！」

「着替え、女テニの借りるからアンタもくれば？」

ちよやバイんじゃないの、可哀想。

そんな声が聞こえてきそうな感じだった。

絶対、腹パンでしょ部室の裏でさ。

まあ、そんなことはないだろうがご愁傷様。

「あのさーヒキタ……比企谷くん」

「おい……おい」

「ごめん、あとテニスのルール良くわかんないし適当でも良いかな」

「なんで把握してないんだよ。それであんなこと言うとか、戸塚の練習に付き合う気マジでないだろ」

「悪かったて、でもあの場を乗り切るのはアレしかなかったからさ」
「はあ、単純に打ち合って点を取りあうでいいだろ」

そうこうしてるうちに、由比ヶ浜が一生懸命裾を引っ張りながら歩いてくる。

まあ、動きやすさ重視で見せパンとかズボンのタイプもあるしな。
なおウチのタイプは見せパン、でもってあのパンツは見せないパンツ。
ツ。

つまり、見られて恥ずかしいパンツだ。

むしろ、堂々としすぎだろ三浦。

「なんか恥ずつ……短すぎない？」

「お前、普段からそんなくらいだろ」

「なにそれ！いつも見てるってこと、キモい！マジでキモイ！」

「……ハッ」

小娘が、色気づきやがって何言ってやがる。

そんな物生活指導で見飽きたわ。

「鼻で笑われるだと……なんかムカつくー！」

「それで八幡どうする、女子の方を狙うか？」

「中二知らないの、優美子県選抜選ばれてるかんねー」

「ふつ、縦ロールは伊達ではないか……マジで大丈夫なのか、八幡！」

「材木座、あれはゆるふわウェーブだ」

「聞いてないわ！」

えー、だって小町の読んでた雑誌に書いてあったし。

まあ、県選抜ってのは骨が折れそうだ。

ギヤラリーはそれはもう偉く盛り上がっていた。

そりゃ、葉山と三浦のペアは強そうだもんな。

こっちは、俺とかダメそうだし由比ヶ浜も元気だけで上手そうではない。
ない。

何名か、男子の声援が違う意味で盛り上がってるが下心があるとモテないぞお前ら。

「葉山、先に言っておく」

「何かな、比企谷くん」

「本気で来い、そうすればあるいは届くかもしれないぞ」

「何を言ってる……ッ!？」

俺は高く放り投げた球を、本気でブチ抜いた。

球は高い打点から一直線にコートのエリア真ん中に落ち、勢い良く後方へ跳ねる。

俺と会話していたせいで態勢の整っていない葉山の横をすり抜け後ろのフェンスにぶつかって地面へと転がった。

「悪い、最近練習して昔の勘が戻ってるんだわ」

「ハハハ、マジか」

マジだよ葉山、お前の相手している俺は身体は高校生でも中身は十年以上の経験者だよ。

「フオオオオ、八幡すごいぞー!」

部活の顧問をする時、俺は最初に戸塚のような奴らを強くしたいと思っただけ。

初めから感謝をして欲しかったわけじゃない、顧問などと持て囃される気もない。

ただ、誰もが強くなるという結果だけが欲しかった。

しかし昼休みや放課後に付き合っただけで、残業して仕事して、休日も学校で練習に付き合っただけで、次いでに残業。

休日手当も出るが微々たるもの、もはやボランティア、それでもテニスには楽しかった。

だが面倒を見ていた生徒に熱すぎると言われ、先生はずっとやってるんだから上手いよと言われ、数え切れないほど練習を続けた末に、俺の最初の決意も遂に磨耗した。

一番堪えたのは、厳しすぎるとやめた生徒達のせいで人数不足から本気で頑張った奴らが団体試合に出れなかったことだ。

そういう年が何度かあった。

そこからは惰性で顧問を続けたっけな。

「皮肉なもんだ、あんなに適当にやろうと思っただけなのに、しっかり身体は覚えてるんだからな」

県選抜、そうかお前は短期間で人の数倍努力したんだろうな。

だがな、俺はその倍の時間を普通の努力で過ごしていた。

ズルいだろうな、そうだろう。

だが、これで実力は同じだ。

「わわっ！ボールが縦ロール！」

「しまった、由比ヶ浜は普通の実力だった」

最初のサーブ、それは適当なルールだとしても受ける人間は決まっている。

俺なら返せる球も、由比ヶ浜は返せない。

必然、二回やるので二回ともサーブミスだ。

俺が常にサーブミスエースを取り、三浦がサーブミスエースを取る。

試合運びは、お互いに同じくらい。

実力は拮抗、だが女子と男子の差が出る。

由比ヶ浜の体力の低下が目立ち、下手にボールに触ろうとして自滅することが多くなってきた。

形成は逆転、不利気味だ。

「ごめん、ヒッキー。私のせいで、負けそうに」

「気にすんな。やったことないのに、前に出て努力するお前を馬鹿になんかしたりしない。それに、アイツらお前ばっか狙ってるからな」

俺が意外とやるからか、集中狙い。

ドッジボールでもよく見る光景だ。

弱い者イジメと変わんないだろ、それ。

由比ヶ浜がコートの中真ん中でウロウロする。

球に手を出そうとして、躊躇してるのだ。

俺は左右に揺さぶられるようにコートを رفتり来たりしながら打ち返す。

偶に球を打つ、なんてしようもないダジャレが浮かんだり正月の特番でテニスとかあるなど変な事を考えながらやる。

俺の球は全部葉山狙いだ。

ルールは無視して、ただ葉山に当てようとしている。

だが、奴も持ち前の反射神経で避けながらボレーばかりしてきやが

る。

浅い球をチャンスだと必死に由比ヶ浜が取るが、ボフツと浮いた球は三浦によってスマツシュユされた。

そして、頬を掠めて通りすぎる球。

由比ヶ浜がぺたりと座り込んだ。

「大丈夫か？アイツ、性格悪いな」

「超怖かった、いったあつ……」

俺は知っていた。

だが、それと同じことは起きないだろうと思った。

前回より、負担は少ないはずだったが由比ヶ浜は足を痛めてしまった。

「ごめん、あーやばいなー、さいちゃん困るよね、やだな……勝ちたいよ」

由比ヶ浜が悔しそうに唇を噛んでいた。

やめろよ、そういうの弱いんだから。

「由比ヶ浜、お前コートから出る」

「えっ、なんでダメだよ」

「テニスも大事だが、怪我が悪化したら不味いだよ。俺は平気だ、一人は慣れてる」

それに、雪ノ下が来ることも俺は知ってる。

「だから、平気だよ由比ヶ浜」

「……やー、ほんとヒツキー諦め悪すぎ、あんどきも馬鹿みたいに全力出してキモイくらい必死でさ……私、覚えてるよ……ごめん、私じや付き合いきれないかな」

そう言っ立ち去る由比ヶ浜、まわりから喧嘩とか喧嘩が聞こえる。

喧嘩するほど仲がいいと言うなら、つまり仲良く無いと喧嘩は起きない。

なら、仲のいい友達など今はいない俺が喧嘩するわけがない。

「この馬鹿騒ぎは何？」

白熱した戦いを黙らせるように熱狂が冷めた。

その一言を発したのは修学旅行で見回りをしている先生、ではなく部長の雪ノ下だ。

不機嫌そうにただけで黙らせられるってすごいな。

お前の周りだけモーセが海を割ったみたいに人が避けてるじゃん。

「お前、テニスすんの？」

「由比ヶ浜さんが来てくれって、なんで私がと思うけど」

「だってこのまま負けんのやだし、頼めるのは友達のゆきのんだけだもん」

「とも……だち……」

何その反応、知らない単語を聞いたロボットみたいだな。

「都合の良いときだけ利用してない」

「大事なことは友達じゃないと頼めないでしょ」

「比企谷くん、分かってないわね。私に優しくする時点で利用するよ
うな悪い人じゃないわ」

「ああ、そうだな。理由が悲しい」

その後、小さい声で友達と呼ばれるのもかまわないわとか言う雪ノ下に由比ヶ浜が抱きついたりする一悶着があつたが俺は思ったことはただ一つ。

ラブコメの神様って馬鹿なの、女の子同士のラブコメやるなら俺と戸塚のラブコメください、オナシヤス！

男と男の勝負に女子供は引っ込んで……えっ？

テニスコートに立つ雪ノ下、それに対して三浦がまず牽制する。

「雪ノ下さんだっけ？悪いけどあーし、手加減とか出来ないから。お嬢様なんですよ、ヤダこわーいとか言う前に怪我するからやめとけば？」

「随分と自信はあるようだけど手加減出来ないとか必死ね。安心して、私は手加減できる技量もあるし、安いプライドも粉々にしてあげるわ」

「あんさあ、雪ノ下さん知ってるかしんないけど、あーしテニス超得意だから顔に傷とかできちゃったらごめんね」

「貴方こそ覚悟はできてるかしら、知ってるか知らないけど私ってばこう見えて結構根に持つタイプよ？」

予告危険球もさることながら、お互いの笑顔が怖かった。

誰だよ、笑顔連呼するプロデューサー。

お前の理論だと笑顔って可愛いんだろ、俺は怖さを覚えるぞ。

ヒュツと鋭い風切り音、ボールの軽快な音がした。

高速で飛来する球は、雪ノ下の左側、右利きの雪ノ下にバックを強いるというサーブだ。

利き手と反対、バックハンド、それは苦手とする選手は多い。

「甘い」

囁くような声の後、迎撃態勢に入る雪ノ下

左足を踏み込ませ、クルリと踊るように回転する。

ワルツだ、まるで踊りましょう私の奏でるワルツでとか言いそう
だ。

そのままリーチの外にあった球は打ち返される。

居合抜きのような一閃、三浦の足元で弾けるように跳ねる。

「ひっ」

「あら、可愛く鳴くのね」

三浦の小さい悲鳴、目の覚めるような超高速のリターンエースが決まった瞬間だった。

「私、自慢じゃないけどテニスが得意なの」

自慢げに言う雪ノ下にでしようねとみんな思ったことだろう。

その氷の女王のような冷たい視線は、流石の三浦をビビらせて一歩後退りさせる。

あの炎の女王と名高い、まあ俺が勝手に言ってるのだがそんな奴を怯えさせるとは女王対決は雪ノ下の方に軍配が上がるようだ。

「お前、良く返せたな」

「だって彼女、私に嫌がらせする同級生と同じ顔していたわ。あの手の人間の考えくらいお見通しよ」

「そうか、何か悩みがあったら相談しろよ。お前溜め込むタイプだから、俺じゃ嫌かもだけど心配だわ」

「急にどうしたの気持ち悪い、別に貴方に心配されるほどの悩みとかあるわけじゃないじゃない。それにもしあったとしても、由比ヶ浜さんに相談するわ。だって、ともだ……女子の部員ですもの」

「だから、照れ隠しで長文になるのやめとけて」

「う、うるさい」

とはいえ、得意なテニスが炸裂する。

なんなの、私の美技に酔いなっただけなの？

「比企谷君」

「うっす」

雪ノ下を避けるように撃たれた返球を、俺が走ってカバーする。

打たれるサーブは確実に相手のコートに沈め、戻ってくる球は押し返す。

「フハハハ、圧倒的じゃないか我が軍は！」

勝利の匂いを嗅ぎつけた材木座がうるさい。

まあ、いるってことは逆転したってことだろうな。

空いた僅かな点差は、由比ヶ浜が与えた失点は、見る見る間に雪ノ下によって埋められた。

どころか、縦横無尽に動き回り踊るような足暴きに、点数は逆転している。

「あっ」

それは誰の声だったか。

雪ノ下の球が空高く投げられる。

ミスにしか見えない、明らかに上げ過ぎな球。

だが、違った。

スカートを翻しながら、雪ノ下が飛ぶ。

身体をしならせ、両足を揃え、ターンと高い音を奏でながらサーブを繰り出す。

「じゃ、ジャンピングサーブ!？」

材木座の解説が轟く、漫画を読んでいたと言うだけあつて基本は知ってるようだ。

「すごい、スカートの中也スケスケだぜ」

「中二、ちよつと」

「えっ、あつ、すいません」

なお、アホなのは偶に傷であつた。

「雪ノ下、行けるか」

「できればそうしたいけど、無理な相談ね」

「やはり、体力に限界が来たか」

今までのサーブで点を取らなくなった。

逆に言えば、ジャンプサーブでないとサーブエースを取れないということだ。

選手の様子を長年見てきた俺には、プレイから繊細さがなくなつてくのが見えていた。

雪ノ下の体力は、もう限界だ。

「悔しいけど、そのとおりよ」

俺達のリードは、葉山のサーブで埋められた。

そして、同点になりデュースとなる。

デュースとは二点差が着くまで続く状態。

アドバンテージが一点差、そしてそこから更に点を取らないと再びデュースになる。

そういう行ったり来たりな点の状態だ。

「お互いよく頑張つたつてことで、マジになんないでさ。楽しかった

てことで引き分けにしようぜ」

「ちよ隼人何いってんの、ここでトドメを刺さなければ禍根が残るし！」

どうした三浦、お前だけ戦国時代に生きてるのか？

「少し、黙ってくれるかしら。この男が試合を決めるから大人しく敗北を認めなさい」

「はあ？」

「私が勝てと言っている、なら勝つのは決定事項よ。私、虚言だけは吐いたこと無いから」

風が止んだコートでクリアにその声は響いた。

了解した、部長。地獄に落ちろ。

雪ノ下がああいった手前、俺はなりふりかまわってられなかった。

俺は身体を捻り、ボールを持って腰を低くする。

「な、なんだあの構えは」

「あの構えはまさか、封印されし禁じ手」

材木座がなんか言ってるがスルーである。

禁じ手、そんな技をとか周りは受け入れんな。

ソイツ、調子乗るからな。

「葉山、お前小さい頃野球やった？」

「よくやったけどそれがどうした」

「俺はいつも一人でやってたぜ」

昔、アホみたいな勝ち方をしたのを覚えてる。

幼少期、アホみたいに一人で打ち上げを一人で捕るといふ経験から生み出されたサーブだ。

取ればアウト、ミスってワンバンならヒット、遠くにウチすぎればホームラン。

ワンサイドゲームとはまさにこのことだった。

お前はみんなといただろ、だが俺はいつだって一人だったぜ。

「オラー！」

「馬鹿な」

俺は自分の頭上に打ち上げた。

その光景に、三浦も雪ノ下も、そして観客すら呆けていた。だが一人だけ、俺の戦いを見てる奴がいた。

「メテオストライク、空駆けし破壊神、隕鉄滅殺！」

それは頭が可笑しい中二だった。

やめて、いたたたたメンタルに来るから。

「何がしたいし」

呆れられる程のロブは、そのままゆつくりと落ちていく。

明らかに場外、見なくても暴投だと分かっていた。

まったく、早く次の展開に移ろうと三浦は動くが俺はそんな様子に勝利を確信した。

「三浦、お前の敗因は慢心したことだ。テニプリ、知らんのか」

「罷落とし、そうか八幡！そういうことか！」

俺の球はそのまま落ち、ベースラインに当たって跳ねる。

ベースライン上のボールは得点、つまり点数が入った。

「はあああああ!?!」

「はは、まさに魔球だな」

一回きりの技だが、たしかに決めてやった。

負けられない、戦いがそこにはあった。

俺はトントんと地面にボールを叩きつけてタイミングを計る。

これで終わり、後一点取ればいい。

「さあ、体力は十分か葉山！」

「来るか、比企谷」

俺のサーブがコートに突き刺さる。

悪いが、意地があるんだよ男の子にはな！

「くっ、うおおお」

葉山が俺のサーブに食らいつく、今までサービスエースだったのだ。
だ。

その光景にギャラリーが驚く、食らいついてきやがったか。

「葉山ああああ！」

「信じていた、君が俺にまっすぐ撃ってくるってね」

返球、それに対し葉山は不敵な笑みを浮かべる。

アレは、あの構えは、ボレー!? しまった、奴はボレーを狙っていた。俺の球はそのまま、葉山のラケットに打つかる。

だが、俺の球は弱くない! もつとだ、もつと行け! 行けええええ!

「くっ、やはりキツイ!」

ボフツと上に跳ね上がる球、俺の球が押し勝った。

だが、まだ試合は続いている。

「オラァ!」

スマツシュが葉山に炸裂する。

しかし、それに食らいつき再びボレー、くそ俺のスマツシュが弾かれて頭上に行きやがった。

雪ノ下が返球、そこに三浦、俺が三浦なら俺に向けて打つ。

それが最善、体勢が整ってないからミスるもんな。

取れるか、急がないと、取らないと負ける。

このまま、俺達の戦いは終わらせない。

届け、俺の思い!

「えいっ!」

「あっ?」

「あっ?」

男の熱い勝負は、雪ノ下の可愛い声の下に撃たれたスマツシュで終わりを告げた。

えー、それマジ?

「むふー」

「やった、やったよゆきのん!」

なんだこれ?

ラブコメの神様働きすぎだろ、今日は休め

勝負には勝った。

しかし、現実是非情である。

周囲ではうわあという声と、男同士の戦いじゃなかったのか卑怯だぞという声が聞こえる。

待って、それは俺が悪いということか！俺は悪くねえ！

何故か負けた方の葉山が慰められながらよくやった的な流れで帰っていく。

ふう、所詮顔か。

「まあ、こんなもんだろ」

いつものことだと思いながら、俺はラケットを肩に担いで後ろに首を向ける。

そこには可愛らしい笑顔の女子三人組がいた。

あつ、二人と一人だった戸塚は男だもんな。

「あつ、八幡！八幡！」

俺の視線に気付いた戸塚が走り寄ってくる。

そして、そのまま俺に向かって軽く飛ぶ。

軽く飛ぶ？ちよ、危ない！

「うおっと」

「やったよ、八幡！ありがとう！」

「おい戸塚、急に抱きつくな。死ぬかと思った」

「あつ、ごめん危ないよね」

「ああ、危うくダークサイドに落ちるところだったぜ」

お、俺に力があれば同性婚を認めさせられるのにクソッ！

腐腐腐、力が欲しいか……八幡よ。

その声は海老名さん！的な展開が一瞬脳内を駆け巡った。

ダメでしょ、その先は悲しみしか無いぞ。

クズの本懐で学んだから間違いない。

「俺だけの力じゃないさ……ダブルスだし」

「八幡……」

気づけば俺の周りには男しか居なかった。

と、戸塚とのラブコメ……だと!?

すごい、ラブコメの神様が願いを叶えてくれた。

チツ、でも材木座邪魔だなあ。

「舌打ち、舌打ちしたのでござるか!ハーチャー!」

「材木座よ、聞こえますか。貴方は部室の方へ行きなさい。そこにラブコメの波動を感じる」

「何を馬鹿な……えつ、我いたらダメなん」

「もう帰るから雪ノ下達を呼んできてくれよ、ほら頼りにしてるぜ相棒」

「相棒……分かった、呼んでくる」

「チヨロい」

材木座は意気揚々と部室の方へ行つた。

さあ、戸塚これでようやく二人きりだ。

「ねえねえ、八幡」

「おう、抱きつきながらのそれは反則だろ」

当ててんのよ、なお当てるものは存在しない。

悲しいけど、戸塚は離れた。

待つて待つて、顔を赤くしないで俺も恥ずかしくなるから。

俺達、友達だろ!なおこの言葉は最後の防波堤である。

「それでなんだ戸塚」

「雪ノ下さんたちって、着替えてなかったけ?」

「あつ」

フラッシュバックする、緑とピンクの下着姿。

そうか、俺がラブコメの波動を感じたのは忘れていながらどこかで覚えていたのだ。

早まるな材木座、その先は地獄だぞ。

「いぎやああああ!?!」

「材木座!?!」

「あつ、待つてよ八幡!」

ラブコメの神様よ、気を効かせすぎ。

暫くボーっとしながらも、ふおおおと叫んだ材木座。

資料が、捗る、俺のリビドーなどと謎の供述をしており女子からの冷たい視線が刺さる。

一応謝ったよ、忘れていたとはいえ行けと言ったのは俺だからな。

部室。

そこには紙が軽く擦れる音と揺れるカーテンの音だけがある。

時折、切なげに聞こえる溜息にドキツとしてしまうのは男子高校生の特有の現象だ。

静かな部室、そこに男女が二人、それだけでドキドキするほど俺も子供ではないはずだ。

だから、このドキドキは今だけの気のせいだ。

「ねえ、タブレットで何をしているの」

「ネットの小説を読んでいるんだ。今のうちに読まないと書籍化して無料で読めなくなるからな」

「紙の本にしなさい、じゃないと味気ないわ」

「……お前って躊躇いもなく人の喉笛とか切り裂きそうだな」

「どうしてそういう結論になったか話し合いますよか、ええ」
むうと雪ノ下が膨れていた。

お前、そういうキャラじゃないだろ。

そんな雪ノ下は俺が貸した文学少女シリーズを読んでいた。
騙されたと思って読ませた瞬間、無言で泣いた時は焦った。

お前、ちよつと鬱入ってるのとか好きだもんな。

半月とか君の臍臓が食べたいとか。

「そーいや、アイツは？」

「三浦さんたちと遊びに行くそうよ」

「馬鹿なの？死ぬの？」

「元々友達なのだし、貴方の想像するようなことは起きないわ
いや、ネタだからマジレスされても困る。

俺の言葉に、暫く沈黙する雪ノ下。

そんな彼女は耐えきれなくなった沈黙を打破するように似たよう

な事を聞く。

「そつちは？」

「んっ、戸塚は部活。材木座は創作活動中」

「そう」

再び沈黙、お互いに距離感が分からない感じがもどかしい。

でも、それも最初だけの事でいい経験になるだろう。

初々しいな、なんて思うのは俺がオツサンだからだろうか。

「邪魔するぞ」

「邪魔するなら帰ってー」

「あいよー……おい比企谷、先生を追い出そうとするな」

「あれ、平塚先生の声が……どこですか、先生」

「ここや、というか私はそんなに小さくない」

やれやれと言った感じで腕組みしながら睨む平塚先生がそこにいた。

もう、ダメなんだぞっ！と可愛いボイスで脳内再生余裕でした。

大丈夫、もう怖くない。むしろ、年下にしか見えなくてそこはかたなく余裕が出てきた。

「フツ」

「何故笑った、言え！」

「先生って時々子供っぽいですよ、背伸びした」

「どういうことだ、というか君のほうが子供だろ!？」

彼女が何をしにきたのか、まあそれは分かっている。

どうせ勝負の中間発表とかそんな理由を付けて様子を見に来たんだろう。

暫く来れなかったのは、今の時期は忙しかったからだろう。

まだ忙しいはずだが、暇を見つけて見に来るところに頭が上がりな
い。

本当、教師としては優秀なんだよな……誰か貰ってやれよ。

「んんっ、中間発表だ。勝負は引き分けの接戦って所だな。個人的には比企谷の死を

乗り越えて雪ノ下が覚醒という流れを期待していた」

「聖帝十字陵を作る未来しか見えない」

「雪ノ下が……恐ろしい子」

「その二人、意味がわからないけど褒められてないのは分かりました。どこでそういう結論になったか話し合いましたよか、ええ」

落ち着け、俺は悪くねえ！

その後、無駄な話を無駄に丁寧に話すことで、雪ノ下に北斗の拳つて何と言わせた。

先生と俺の熱い布教は、人が指先一つで爆発するわけがないという正論で叩き潰された。

ファンタジーに正論とか求められても困る。

「まあ、仲良くやってるように安心した」

「安心したって、先生死ぬんですか」

「安心しろ比企谷、私は呪われてない」

「そうか、安心した」

「やめろお、安心したら死ぬぞ」

「また二人しか分からない話して……まるで意味が分からないわ意味不明な会話が雪ノ下を襲う。」

いつか、君も運命に出会うのだ。

自分でも何言ってるかわかんねー。

そう思ってたなら、雪ノ下が慌てて反論した。

「先生、撤回を求めます。この男と仲良くなることはありません」

「比企谷そう落ち込むな、これからいい出会いがあるさ」

「先生はあつたんですか？」

「グハツ!? 貴様、それを言ったら戦争だぞ」

「そうか、答えは得たよ平塚先生。いい出会いは無いんですね」

「やろう、ぶっ殺してやる」

「教諭が言っつていいセリフじゃない、やーめーてー」

先生のチョークスリーパーが決まる。

やめて、暴力と暴力だよ。

前者は肉体的、後者は性的な意味で俺にダメージが入る。

「まあ冗談はこれくらいにして」

「冗談で死ぬかと思った」

「貴方、自分がすでに死んでいると気付いてないの？」

「それは俺の目が死んでると言いたいってことか」

「言えないわ、だって真実はときに人を傷付けるもの」

「言ってるじゃん」

死んでも動くとか神掛かってんな。

救世主八幡、救世の旅はボツチである。

そうか、俺は死んでも一人かよ、悲しい。

別に、ぼっちになっても構わんのだろう。

あつ、やっぱり死にそうだわ俺。

「所で比企谷、作文の再提出はどうした？」

「あつ」

「あつ？」

「雪ノ下、俺は急用を思い出した。サラダバー！」

「待て比企谷、あとさらばだの間違いだろ！」

べ、別に忘れてた訳じゃないんだからね。

まだ書いてないだけだつてばよ。

ボッチが強いのは当然に決まっている、そのメンタルは鋼鉄のガラスハートの塊で出来ている。

学生時代、友達と仲良くすることは良いことだろう。

それは掛け替えの無い思い出となって将来、糧となることだろう。

勘違いしないで欲しいのだが、ボッチの経験は将来の糧にならない訳ではない。

それはそれで、いい経験となるのだ。

悪いかどうかなんて、後世の自分が判断すればいい。

嫌な思い出も、自分がいい思い出として処理すれば問題ない。

「さて、そんな訳で世間とか教師とか一般論とか、そういう基準で仲良くすることを推奨するのは時代遅れの考えでF A。時代遅れの考え、時代錯誤の思想、グローバルな時代は自由を重んじるべき、そうすべき。別に一人でも良いじゃない、友達がいるとか人間強度が下がる。一匹狼という言葉を知らんのかよ、お前らは馬鹿すぎる。」

ボッチが強いのは当然に決まっている、そのメンタルは鋼鉄のガラスハートの塊で出来ている。ボッチがリア充の幸福度に後れをとるはずは無い。確実にボッチは社会で孤独な仕事をさせたら高確率で一番最強になる。俺がどうやってボッチだつて証拠だよ」

「ハーシー、なんなの？ボッチとかナイトなの？」

「嫌いぞ材木座、俺の怒りが有頂天でお前をバラバラに引き裂くぞ」「ひえっ」

最近、別のクラスなのに俺の元に来るようになった材木座を撒きながら静かになれる場所を俺は探していた。

ええい、こんな所にいられるか一人で食事をさせてもらう。

まず最初に死にそうな奴が言うセリフですね、現在進行系で社会的に死にそうです。

なんなの、三浦達と敵対すると死ぬのかよ。もうマジ無理、クラスの空気キツすぎ。

本当、私って馬鹿。思わずソウルジェムが濁るレベルの絶望だわ。

「そう言えば、屋上って閉鎖されるんだっけか」

学生の危険がどうのこうの、抗議によつて屋上への立ち入りは禁止される未来がある。

というか、よく考えたら現在も立ち入り出来ないはずだわ。

もつとも、未来の屋上のようにガチガチのロックが掛かってたとは思わんがな。

屋上に向かうと、案の定ロックは南京錠程度のチャチな物だった。

ご丁寧にぶち壊されたそれは若気の至りによる器物破損、若者の行動力は時に驚くべきものがある。

「おお、町並みが全然違うな。ちよつと、ノスタルジックだわ。奥華子のガーネット流れそう」

屋上から見た景色は、走馬灯のように俺に過去を幻視させる。

そう言えば、あの時は職場見学の紙を風に飛ばして黒いレース見たんだっけ。

「黒いレースか、誰のだったか」

「……馬鹿じゃないの？」

「誰だ、貴様見ているな！」

思わず聞こえた声に振り向くと、風が俺の前を通り過ぎた。

まるでアニメの第一話のように、何だったらメガネの委員長のスカートが翻った時のように時間が遅くなる。

時よ止まれ、そしたらもつと女子のパンティが見えるから。

眼の前で漫画並みのトラブルが起きていた、ひらひら舞うスカート、黒いレースがバツチリ見えていた。

「見てるのはアンタでしょ……アンタ、比企谷八幡だね」

「そういう君は、川崎沙希」

「私の事、知ってたんだ」

「あつ……ああ、ウチの妹がお前のとこの弟と仲が良いから、その流れで」

思わず答えてしまったが、そう言えば初対面だと言うことを思い出した俺は取り繕う。

つぶねーわ、ベーわ、マジヒツキー迂闊っしょー！

おっと、思わず戸部になってしまった。

これは戸部るといふ造語を作ってしまったても良いかもしれない。

「ふーん、あつそ」

「所で、何で俺の事を……って早くね、ナチュラルにスルーしていなくなりやがった」

帰り際見えた耳が赤かったのはパンツを見てしまったせいだろうか、ありがとうございます！

『古人曰く、人という字は人と人が支え合っている。』

人とはお互いを助け合い、助けられる存在である。

しかし、現実には搾取する側と搾取される側が存在する歪な社会が形成されている。

社会の縮図である学校ですら、その影響からは逃れられない。

個人の影響が複数の人間に対して、良し悪しに関係なく作用するのだ。

人という字は威張る人間とそれを支える人間という字である。

だが、人は無知ゆえにそれが当然だと考える。

ならば、無知を啓発し導く行為こそが尊いと言える。

従って、人を導く尊い仕事として私は教師の職場である学校を希望する。

そして、俺がリア充共を駆逐する』

職員室の一角、革張りの黒いソファがパーティーションに区切られていた。

開け放たれた窓からは風が入ってきて、目の前の彼女の髪を揺らす。

顔は憤怒に満ちており、幽鬼のような姿、金剛力士像のモデルだと言われても納得する自信がある。

「比企谷、私が何を言いたいか分かるか？」

「ありがとうございます」

「違わい！どうして、途中まで良い感じなのに最後が駆逐するなんだ！なんだ、リア充に親でも食われたのか！」

「食われてないですけど、でもあの腐ったミカン共が」

「おいおいおい、仮にも教師を目指してるなら言っちゃいかんでしょうが、このバカちゃんがあゝ」

「あつ、似てます。でも、どっちかって言うとな先生はヤンク——」

ミ、と続く前に顔に拳が飛んできた。

ふつ、残念だったな右手の拳が来ることを読んでいた俺は簡単に掴めるぜ。

しかし、ごすつと地味な音がボディイーから聞こえる。

馬鹿な、右手は確かに封じたはず一体何が……なんだと。

「ひ、左手!」

「ああん?」

「すいまえん、GTOでしたね。ひでぶ!」

追撃のボディブローがやってきた。

どうして誰も助けてくれないんだ、区切られて見えないからだ。見えない所するのは痛いことではなくエロいことが良かったです。

その後、メチャクチャ先生の仕事を手伝う羽目になった。

高校生では職場見学なる物がある。

教師が各種問い合わせや調整を行い、それから問題になった際に困らないように予め考えられる要因を洗い出し、生徒にウザいと思われるながらも注意喚起する。

おつと、最後に關しては俺だけで可愛い新米教師には男子学生はにつこりだったね、なお女子はお察し。

しかし、中間試験の雑事と重なるのは如何なものか。

教師時代は、このカリキュラム組んだの誰だよ試験やりながら仕事するとかマジブラックとか言つてた。

そう考えると、試験勉強するだけで後は職場見学に行ける事の楽しさよ、先生ありがとう(ござ)います。

「意味、あるんすかね」

「こんな時期だからこそだろ、HRで言っただろコース選択の話」

「ああ、言われた覚えはないですけど知ってますよ。基本アウエーなんで全然聞いてないんですよ」

「ごめんなさい、こんなときどうすればいいか。笑えば良いのかな?」「俺が忍者だったら慰めるためにラーメン奢りますかね。激辛ラーメンとか」

「ああ、最近コンビニで見ただけであれって美味しいのかな」

「これからどんどん増えていきますよ。食べてないなんて、勿体無い」「近場だと何処だろ」

「亀戸とかですかね」

二人で黙々と携帯で検索する姿がそこにはあった。

ラーメンしか、もはや興味がない。

そんな俺を呼ぶ声がある、そんなことよりラーメンだ。

俺はラーメンスレイヤー、ラーメンは一品残らず食べ尽くす。

「あー、こんな所にいた」

「ラーメンか?」

「や、違うから。てか、何の話? んんー?」

「ラーメンではないのか」

どうやら、由比ヶ浜は俺を呼びに来たらしい。

悪いな、拘束されているんだ。

俺はここで改造されて社畜になるんだ、ゆくゆくは社畜教師として働かされるのだ。

「なんか用か?」

「貴方が来ないから探しに来たのよ、由比ヶ浜さんが」

「倒置法いらなくね、知ってたけどさ」

「わざわざ聞いて歩いたんだから、みんな比企谷って何? 人名? とか聞いてたけど」

「だからいらなくね、追加情報いらなくね?」

誰にも知られないとか、俺ってばバスケの才能があったわ。

俺、死ぬのか……

何でこいつはピンポイントで人の心を抉ってくるのか、ビューティーホーとかいうレベルのスナイプ技術だわ。

しかも、何故か俺が怒られるという、人に知られて無くてすいませんね。

由比ヶ浜はその豊満な胸を寄せては離し寄せては離し、俺の視線は寄せられては離れられなかった。

抗えない、スタンド攻撃かもしれない。

「け、携帯教えて？ほ、ほら！探すたびに、どんな関係とか聞かれるの恥ずかしいし」

「思春期かよ……思春期だったな」

俺はスマホを投げ渡す。

俺のスマホにはアマゾンと妹とマックしか登録されてないからな。

もつとも、メールした女子は妹だ。

中学生の事は、思い出したくもないね。

今よりもろ覚えだけど、メールした女子に晒されて死にたくなつたことだけは覚えている。

人間は危機回避の為に嫌なことを覚えていると言うが、忘れたい過去だわ。

「ヒツキー、遠い顔してる。キモい」

「お前、さらつと酷いこと言ってる自覚ないよな。気づいて、ねえ気づいて、気づけ」

「いや、なんか、あー、うん……」

「待って、いつもと違う！俺の携帯見ながら態度変えるのやめろや、いや女子とメアド交換とか嬉しいけどさ！」

「比企谷……じゃあ、私ともアドレス交換するか？私はちゃんとメール返すぞ」

「あつ、そういうのいいんで」

平塚先生がさつと出した携帯を仕舞おうか仕舞わないか、手を彷徨わせていた。

断られると思ってなかったのか、どうしようって顔していた。

「いや、でも」

「間に合ってます」

「ぎよ、業務連絡とかほら、あるだろ何か」

「そもそも、学生と教師がメアド交換というのは風紀を気にする立場として如何なものかと思うんですが」

「君ほどの立場で喋ってるんだ、まるで教頭だぞ意味が分からんぞ」

「先生、送つといたよ！」

「そ、そうか！間接的になら、生徒のメアドを手に入れても……天才か、由比ヶ浜！」

「いや、アウトだよ。立場逆に考えてみる、凄まじいアウトだよ」

男性教諭が男子生徒經由で女子生徒のメアドを交換する。

字面の時点で事案だった。

「えっ、なにこの出会い系の迷惑メールみたいな☆★ゆい★☆ってやつなんて読むの？」

「えー、なんで可愛いじゃん。あー、ガハマさんって何！なんで登録変えるの」

「ガハマさん、なんだかしっくりくる響きだわ。比企谷君ったら、もしかして内心でそう呼んでるの」

「ちよ、ちよー！あ、あだ名とか、かかか彼女じゃ、やあ、てか、付き合う前に、ええ!？」

「何こいつ、なんでバグってんの？お前の友達だろ、早くなんとかしろよ」

「知らなかったの比企谷君、これは彼女の仕様よ」

「生まれたときからバグ仕様じゃないよ！もーもー、二人ともひどーい！」

和気藹々としている空間が出来上がっていた。

惜しいのは、それを人を殺せそうな目で見てくる先生の存在か。

怖い、貞子がテレビから出ないでじっと見てる感じだわ。

来るなら来いよ、じゃないと無言の視線は怖いから。

「比企谷君、伝え忘れてましたが今度の職場見学は三人一組です。好

きな人と組んでください、もつとも君にその心配はいらないでしょうけどね。ふふ」

「えっ、先生なんか調子悪くない?」

「ああ、俺のこと君付けた。死ぬほど疲れてるんだ、そつとしいてやれ」

「私生活で、なにか嫌なことがあったのかしら」

うん、まあ、そのへんはね。

君達も独身期間が長くなると分かるよ。

彼女彼氏がいるのが当たり前前の世代の独身と、学生の時の独身はレベルが違うからね。

悟りを開かないと心が死ぬレベルだからね、誰かもらってやれよ俺が貰うぞ。

特別棟の四階、東側。

各部活動の活動音を聞きながら、この我らが奉仕部は活動してなかった。

部室から奏でられる音を上げるとするなら、雪ノ下の小説をめくる音か、俺が筆記する際に出てくる音か、由比ヶ浜の携帯の音だけだ。

「私、すごいこと気付いたんだよね」

「すごい、君は何でも知ってるフレンズなんだね。どの方程式を使えば良いんだこれ」

「そこは複素平面上のある領域において正則な関数の複素積分についての定理を使うのよ」

「ねっ、聞いている?聞いているよね、あとゆきのん日本語でおいけーだよ」

「コーシーの定理か?これだから自称進学校はいらんレベル求めすぎ、で由比ヶ浜はなんだっけ?」

「私の言葉は日本語だと思っただけけれど、それで由比ヶ浜さんは何に気付いたの?」

俺と雪ノ下の視線が由比ヶ浜に注がれる。

由比ヶ浜はその豊満な胸を張り、むふーと自慢げにしていた。

なお、雪ノ下が胸を押さえてくつと自信なさげにしていた。

これが格差社会か、がんばれ雪ノ下。

「何？」

「別に」

「今、何を思ったか言いなさい。言わなくても言っても殺すわ」

「俺、死ぬのか……」

俺が後退り、雪ノ下が距離を詰める。

恐ろしい光景を打破するかのようには、由比ヶ浜がパンパンと手を叩いた。

「良いですか。由比ヶ浜、雪ノ下、戸塚、三浦、平塚、海老名、全部地名であるんだよ。すごい？」

「そうか、苗字って地名由来って知ってたか？」

「むしろ知り合いの名前が地名って今更気付いたのと言いたいのだけど、いえ私が悪かったから泣きそうにならないで」

「今のは雪ノ下が悪だろう、だから俺は悪くねえ！悪くねえけど、由比ヶ浜ごめん！」

そうやって、全力で保身に走る。

そんな雑談をして、それぞれの作業に戻ると由比ヶ浜が小さくため息を吐いた。

もうしようがないな、生徒の悩みを聞き逃がせない俺が聞いてやろうじゃないか。

「どうかしたの？」

「あ、うん……何でもなし。ちよつと、変なメールが」

「おい雪ノ下、どうして俺を見た！言え！」

「やだ、怖い。もしかして、なにか心当たりがあるんですか？」

「心当たりは……」

あれ、そう言えばと過去を思い出す。

戸部と葉山の取り巻きの、やべえ戸部しか思い出せねえ。

取り敢えず、葉山の取り巻きでチェーンメールあった気がする。

「やつぱり、いつかはやると思ってたわ。卑猥なメールを送るのは今後やめなさい」

「異議あり！検事側の主張は不当に被疑者を貶しめています」

「やつ、ヒツキーは関係ないよ。内容がウチのクラスだから無関係っていうか」

「異議あり!!俺も同じクラスなんですけど」

「異議を却下します。おめでとう、貴方の無罪は実証されたわ」

「ええ、証拠能力認められちゃったよ。これが試合に勝って、勝負に負けるという気持ちか」

由比ヶ浜は時々あるから気にするなよ、とそんな感じの事を言った。

俺と雪ノ下はお互いの顔を見合わせ、えっマジでと首を傾げる。

問題です、俺と雪ノ下に無くて由比ヶ浜にあるのは何でしょうか。

答えは胸か友達である、たぶん胸は関係ないな。

「携帯触らなくなったら暇になったー」

「そうか、じゃあ黙ってる」

「ひどーい、もっとゆきのんもヒツキーも構って、勉強なんてしてないでよ」

「由比ヶ浜さん、貴方も勉強したら？中間試験まで時間はないわよ」

「やー、勉強とか意味なくない？社会出たら使わないし」

「あー、確かに物理学とか数学とかいらないだろ、微分積分使わねえよ」

「だよね。ほらヒツキーは味方だよ、勉強以外に時間掛けなきゃ人生一度きりだし」

「だから失敗できないんだけどな。リスクヘッジは大事だろ」

「超マイナス思考、どっちの味方だし！」

「高校生活失敗してる人は言うことが違うわね」

「最終的に勝てば良からうなのだという言葉を知らんのか？」

「それは最終的に考えることをやめるのだから、ただの思考放棄よ」

コ、コイツ……一体、どこでジョジョネタを仕入れたんだ。

コイツには俺の知識についてこれるスゴみがあるぜ。

あつ、よく考えたらこないだジョジョ貸したわ。

携帯電話とかボツチを加速させるツールだわ

ぐでーと由比ヶ浜が空いていた机に項垂れた。

すごい、何がすごいとは言わないが机の上に乗ると変形して色々すごい。

あつ、これは一部限定なので乗せても君のは、そもそも乗るの雪ノ下さん？

「貴方、見ているわね」

「見てねえよ、なんなの悪のカリスマなの？」

「盗撮って犯罪なのよ、知ってたかしら」

「してねえわ」

由比ヶ浜の恨めしそうな視線が雪ノ下に注がれる。

おいおい、そういうのやめとけて。

「何か言いたそうね由比ヶ浜さん」

「ゆきのんは頭が良いから良いよね、あたしは勉強できないけど」

「出来ないではなくしないだろ、したら成績上がるぞ。俺なんて国語なんか学年一位だぞ」

「え、ヒツキー頭良くない？」

「良くないわ。だって、四捨五入したら0点ですもの」

「ねえ、それって十の位？百の位？」

「うーうー、アタシだけバカキャラだあ」

うーうー言うのやめなさいって、でも勉強が全てじゃないのは一理ある。

学歴が良くても問題起こして、迷惑かける教育実習生とか本当ね。

むしろ頭がいいと、女っ気がなかったりエリート思考で頭おかしかったりするからね。

頭が良いやつは一周回って馬鹿な説、あると思います。

本当、何で俺のせいになんだよ。何でも言えと言ったが、虚言を言えとは言っていない。

「そんな事ないわ由比ヶ浜さん」

「ゆきのん……女子高生の姿した神……」

「貴方は真正のバカよ、キャラじゃないわ」

「神は死んだ！うわーん」

おう、よく難しい言葉知ってたな。

多分、元ネタとか知らないんだろうな。

「成績は良くても人の価値は測れないから馬鹿だと言ってるのよ。試験の成績が良くても人として著しく劣る人もいるわ」

「自虐ネタですか、反応に困るんだが」

「自覚がないって恐ろしいわね、否定はしないけど」

「否定しようよ！むぎゅー」

雪ノ下は平然としていたが、なんだったらブーメランって知ってるかと言わんばかりに自爆していた。

それに対して、由比ヶ浜は感情移入したのかガバッと偉い勢いで抱きついた。

ただね、その位置だと顔が胸で隠れて息が出来なさそう。

それはやめてあげなよ、精神的に追い打ちだよお。

「……柔らかい……苦しい……やわ……くる……」

「雪ノ下ああ！しつかりしろ」

「やー、ゆきのん大丈夫!?なんで、なんかごめん!」

危うく窒息する所だった雪ノ下。俺は思った、胸って凶器だったな。

由比ヶ浜はぐったりした雪ノ下を慮ってか、絶対そんなことはなさそうだが後ろからハグした。

ちようど、頭の上に胸を乗せるという羨ましい状態のハグだ。

なお、雪ノ下さんは頭上の感触に何とも言えない顔をしていた、憎悪は伝わった。

頭上でナデナデして満面の笑みの由比ヶ浜よ、その下には憎々しげに悔しそうな雪ノ下の顔があるぞ。

やめたげてよ、雪ノ下のライフはもうゼロだよお。

「でも、ヒツキーが勉強してるのは意外だったな。進路かあ」

「なにかしら?」

「あ、ううん、何でもない。こともないかなあ、二人共頭いいから卒業

しても会わなさそうって」

「そうでもない。雪ノ下は金はあるが超忙しくて、部下を指導するたびに泣かせてしまうことを愚痴るために呼び出したり、保育士になった由比ヶ浜が出会いと金がないと愚痴るために呼び出したりする。因みに俺は、土日が部活で潰れて公務員って何だろうってお前らに愚痴ってる」

「やけに具体的でなんかやなんですけど」

「まるで見てきたかのように言うのね」

ああ、うん、まあね。

そう考えると、将来の俺達って今の平塚先生状態だな。

ちやんと、結婚相手探さなきゃな。

まずは、彼女とか彼女作らないとダメだけどさ。

「あつ、でも携帯あるしいつでも連絡できるね」

「だからといって、毎日ほちよつと」

「ええっ!?や、やなの!」

「時々面倒くさいわ」

「ゆきのんの……馬鹿じゃないから、正直者!」

「仲いいな、お前らメールでやりとりすることあんのかよ」

まったく想像つかない。

いや、ベッドで返信待ちする由比ヶ浜と腕組みして悩む雪ノ下が見える。

あつ、わりとありそうだわ。

「今日は、シユークリーム食べたよ!とか」

「そう、とか」

「ゆきのん、シユークリーム作れる?今度他のお菓子も食べたい、とか」

「了解とか」

「ラインかよ、いやまだ無かったな」

携帯電話とかボツチを加速させるツールだわ。

既読スルーとか俺だけいけない集合写真の乗ったインスタとか、なんだったら休んでるやつがTwitter更新してるし、本当バカしか

いないのかと思うわ。

「不安定なコミュニケーション手段だよな携帯って」

「そうね、受け手側に一任されてるし嫌なメールは無視してしまうもの」

「んんっ？じゃあ、あたしのメールは嫌じゃないってこと」

「……面倒なだけで、嫌じゃないわ」

「くはあ、尊い！尊いよゆきのん、えへへ」

そう言っつて抱きつく由比ヶ浜に、俺は百合の花を幻視した。

そうだな、尊いと俺も思うよ。

不機嫌そうに顔を背けてるが、顔が真っ赤なのは照れてる証拠だろ。

「よし、ちゃんと勉強しよう。そして、同じ学校に行くんだ」

「いや、お前短大入るから国公立ほど勉強しないで、多分」

「どうして、私が国公立を受けることを知ってるのかしら」

「進学校は大体そういう進路だろ、俺は違うけど」

「ふ、ふーん。参考に、聞いておこうかな？ヒ、ヒツキーは？」

「俺は私立文系で遊びまくりながら教員免許を取る」

「私立文系が遊びまくれる環境だと間違った情報を与えないでくれるかしら、由比ヶ浜さんが信じてしまうわ。彼女、単純だから」

「ほえ、違うの？でもいいよね女子大生、サークルとか合コンとか文化祭」

「すげえや、学業にカスリもしねえ」

「単位とか就職先とか他に考えることはないのかしら」

俺と雪ノ下が抱く将来の展望と、由比ヶ浜の描く展望は微妙に違っていた。

まあ、そうだよな。学生ってこんな感じでふわふわしてるわな。

「というわけで、テスト一週間前って部活休止になるし午後は暇だよね。あつ、今週でも火曜日は市教研で部活ないからそこもいいかも」

「市教研……市の教育研究会……新しい課題……短縮授業のための準備……他校の教師……うっ、頭が」

「どうして苦しんでるのかしら、なんのトラウマが」

「よくわかんないけどヒツキードンマイだねー」

良くわからないなら語ってやろうか。

就職するまで分からない、インターンじゃ見れない教師の内側とかな。

まあいいさ、俺には関係ないからな。

勉強は普段からしてるから、休日ぐらいはそこそこでいいだろう。

むしろ、部活がないだけゲームしたいくらいだぜ。

取り敢えず、レトロゲーRTAやるしかないな。

「じゃあ、サイズでいい？」

「私は別に構わないけれど」

「みんなでお出かけて初めてだねー」

「そうかしら、そうね」

「うん、みんな？」

「ヒツキー、何か言った？」

可笑しい、俺ってば疲れてるのかもしれない。

「じゃあ、ちゃんと遅刻しないようにするんだよ」

「誰に言ってるのかしら、綿密な計画を練って事前に報告するわ」

「や、デートじゃないのにガチ過ぎだよ。校門前現着ね」

「げ、げん、何？どういう意味？」

困惑する雪ノ下を他所に俺は帰ろうとしている由比ヶ浜を呼び止めた。

問わねばなるまい、今みたいな状況で使うのが正しいと思う。

「そこに俺も行くのか」

「えっ、予定があるの!?嘘でしょ」

「いや、ねえけど断定するなよ」

「だよねー、ヒツキー遊ぶ友達いないもんねー」

「おい、否定はしないがやめろ、悲しくなっちゃうでしょう」

どうやら、本当に俺も行くみたいだった。

おかしい、過去を思い返すと戸塚も誘ってサイズにいたわ。

あれ、誘われた記憶が無いのにどうしてファミレスにいるんだ。

俺の記憶違いか、それともこれがバタフライエフェクトってやつな

のか。

「女子と勉強できる感動に打ち震えてる所悪いけど下校時間よ」

「感動してねえわ、待て鍵を閉めるな」

「ふふっ、四十秒で帰り支度しなさい」

「さてはお前、金曜ロードショー見ただろ」

玄人は悩まない、俺はブラックコーヒーを召喚するぜ。

サイゼに到着した俺達は、まずドリンクバーを頼んだ。

ドリンクバーだけで何時間いるつもりなのか、そう言えば大学生の頃は漫画喫茶で勉強してたっけ。

そう考えると漫画やネット、ゲームという誘惑がないファミレスは優秀かもしれない。

「やー、ドリンクバー良いよね。でも、採算って取れるのかなあ？よし、元取るぞー」

「由比ヶ浜さん、本来の目的忘れてるわよ。貴方、何しに来たのかしら」

「いやー、つい、分かってるよ。よし、勉強するぞー！」

テーブルに座るや否やアホな事を抜かす由比ヶ浜が窘められていた。

コイツは知らないんだろうな、ドリンクバーって原価3円くらいだから、コーラで言ったら240円の場合80杯飲まないと元は取れないってことをな。

取り敢えず、コーヒーでも飲むかとドリンクバーまで移動する。

「……………」

何やらドリンクバーのサーバーを凝視する雪ノ下がいた。

ああ、色々あると悩むよな。

玄人は悩まない、俺はブラックコーヒーを召喚するぜ。

内心で一人遊戯王ごっこをしていたら、クイクイと裾を引かれる。

誰だよ、まあ一人しかいないけどさ。

「何？」

「あの、その……何処に小銭入れるのかしら？」

「ドリンクバーはボタンを押すだけで小銭は入れない。何飲みたい？」

「……アイステイー」

眼の前で実演するように、コップを取り出して氷を入れてボタンを押す。

その様子をジツと真剣な眼差しで見つめた後、なるほどと小声で漏らした。

「あつ」

「何してる、行くぞ」

「自分で持てるわ」

「そうか」

飲み物を渡して、そのまま二人で席に向かう。

由比ヶ浜は、何が楽しいのか身体を前後に揺らして待っていた。

「何だお前、先に進めろよ。」

「よし、やるよ」

由比ヶ浜の合図に雪ノ下がヘッドホンを取り出すと、すちやつと装着する。

俺はそれを横目に見ながら、教科書を開いた。

本来ならイヤホンで雑音を遮断する所だが、すぐに分からないところを聞かれたときに対応する為には聞こえる状態にしていけないのでイヤホンは今回着けない。

「はあ!?!なんで、音楽聴くの!」

「何かおかしいかしら?」

「勉強会ってこうじゃないよ」

バンバンとテーブルを叩いて抗議する由比ヶ浜、絵文字で見たことがあるわ。

その様子に、顎に手をやり考え込む雪ノ下、擬音にしたらほむうつて感じだろうか。

おい、なんだその助けを求める目は?

「どんなのが勉強会なのかしら」

「たぶん、喋りながらやろうとしてるんだと思うぞ」

「勉強って一人用に出来てるのだけど」

心底困ったという顔をする雪ノ下に、うぐつと何やら勝手にダメージを受ける由比ヶ浜。

成績の良い雪ノ下に反論が出来ないのだろう。

進研ゼミだつていつも一人でやってるだろ、つまりそういう事だ。

なお、アレは男女で漫画の内容が違うそうさ。

テスト範囲を見比べ、出題者として問題を作るならどこが重要か予想し、基礎的な問題をひたすらノートに書いていく。

公式、キーワード、単語の意味、若返つて思うのは意外とすぐに覚えられるということだ。

やはり、若い身体は記憶力が良いらしい、こればかりは若返らないと実感が湧かないな。

「由比ヶ浜、急に手が止まったが何か分からない所があるのか？」

「えっ、ああ、うん。ここの問題が……」

「古文は基本パターンを覚えれば読めるようになる。何処がわからないか、書き出して確認した方が良い」

由比ヶ浜の隣に移り、何処が分からないか聞きながら教科書に線を引いていく。

引き終わつたら、ここはどういう意味なのか、ノートを交えながら説明してやった。

その様子に、ほえー、ほえー、と聞いているのか聞いてないのか分からん感嘆の声を上げながらも由比ヶ浜は頷いていた。

「お前地頭は良いんだから……何だよ」

「あつ、いやあ……」

「おい、そう言いながら何で距離を取る」

「と、取つてないし！な、何言ってるのヒツキー意味わかんない！」

いや、移動したの見てたんですけど、言い訳不可避なんですけど。

これは触れないほうがいいのか、そつとしておいたほうが良いのか。

「な、何？」

「別に」

「じゃ、じゃあ見んなし！っていうか、顔近いから！セクハラだし！」

「セクハラ……嘘、だろ……」

「なんで思いの外ダメージ喰らってるの？」

セクハラには気を付けている事に一家言を持つている俺としては、その言葉は不覚だった。

馬鹿な、コンプライアンス意識がまだ甘かったというのか。細心の注意でもって接していたのに、マジか。

「やあ、なんか頭使いすぎて熱いつていうか喉乾いたなー、あつ」

「今度は何だよ」

由比ヶ浜の視線の先に何があるのかと、見てみれば美少女がいた。野暮つたいセーラー服にめちやくちや可愛い快活な笑顔、なんだ小町か。

小町が可愛いのは当たり前なので、美少女過ぎて声を上げてしまうのも無理はない。

しょうがないやつだな、由比ヶ浜。

「待って、その仕方ないなって顔は何?」

「由比ヶ浜、上ばかり見えていても虚しくなるだけだ」

「何の話?! 唐突に何の話!」

「上とか下とか意識するなよ、お前はお前のままで良いんだ」

「だから、何の! 何の話なの! 小町ちゃんの話!」

由比ヶ浜は混乱している。

ほつといて勉強するか。

どうせ、横にいた川崎大志を見てデートかなとか思ってるんだろう。

でも、八幡知ってるよ。告白して、フラれるのな。

そう言えばアイツの名前を覚えたのは彼氏と勘違いして問い質した時だったか。

あれ、何か忘れてる気がする。

「思い……出した!」

「ヘッドホン越しにも聞こえたけど、何を思い出したのかしら」

「悪い、用事を思い出しただけだ。夜からだから問題ない」

「ああ、あるある。ドラマとか毎週何曜日か忘れちゃうよね」
違うのだが、そういう事にしておこう。

しかし、俺も前世の事とは言え忘れていたとはな。思わず、救世主みたいなことを言ってしまったぜ。

しかし、迷える羊ならぬ生徒を指導するのも教師の仕事だ。あつ、指導ってワードなんかちよつとエロい。

テスト勉強が終わった後、なぜか持っていた平塚先生の連絡先にメールを入れる。

一瞬、業務関係の通知かと焦ったと言われたが何でだよ。若い高校生とのメールだぞ、もつと喜べよ。

後日、俺は職員室で書類関係一式を貰っていた。

「驚いたな、比企谷でも積極的に行動って出来るんだな」

「新しい動物の生態を知ったみたいなの対応やめてもらえますか、そういうところですよ平塚先生」

「何が!? そういうとこって何!」

「それが分からないうちは……おっと、俺はこれで失礼」

「結婚か! 婚期の事なのか! 待て、まだ話はああああ!」

職員室で、婚期がどうのと叫んでいる、そういうところで平塚先生。黙ってれば普通に美人で可愛いのに、喋ると残念だもんな。

「取り敢えず、タバコやめましょうか」

「タバコと結婚は関係ないだろ!」

「タバコ吸わないほうがモテますよ」

平塚先生は俺の一言に固まって、そそくさとタバコの火を消してエチケット灰皿に収納した。

やめろ、そのこれでいいんでしょって顔、比企谷八幡はスルーして去るぜ。

「えっ、何もなし」

「お疲れ様でした、お先に失礼します」

「いや、そこは先生さようならだろ」

思わず癖で思ってもいないことを口走ってしまった。

まあいい、目的のブツは手に入ったからな。

放課後になり、俺は駐輪場でMAXコーヒーを飲んでた。

飲まないと決めていたが、一日くらい良いだろうと暇を持て余した

俺は飲んだのだ。

しかし、やっぱり美味しいなコレ。

「よお」

「……待ち伏せ？」

「開口一番にストーカー扱いはやめろ」

「だって、アンタに待つ人なんていないでしょ」

川崎の言葉のナイフが俺を斬り裂く。

何なの、コイツ俺のこと嫌いなのか？

「お前、これからバイトだろ？バイト先には流石に行きたくないからな」

「アンタ、バイト先知ってるってやっぱりストーカー」

「それだけ眠そうなら夜のバイトだつてのは分かる、夜間勤務は単価が高いから漏れなく出費が嵩む。俺から言えるのはバレずにやれよって事だ」

「あつそ、お気遣いども」

俺が葉山ならスツ渡せるんだろうが、中々渡すタイミングつてのは掴めない。

今か、今なのか、どうする俺、ライフカードくれ。

「それで、さつきから出したり引つ込めたり、その封筒は何？」

「お前に届ける為に持ってきた……あれだ、先生に頼まれたんだよ」

嘘は言っていない、平塚先生じゃなくて比企谷先生だけだな。

自分で言つて、恥ずかしくなってきた。

川崎は胡乱げな目で俺を見た後、封筒を受け取った。

「スカラシップつて言つて、勉強できりや金を貰える制度だ。他にも奨学金とか、借金する形になるが前借り出来る物、分納とか延納つていう分割払いや支払い先延ばしが出来る大学一覧とか、入ってる」

「詳しいね、アンタ見たのか？」

「見てねえよ。でも、金が必要ならそういうのもあるつてことだ。じゃあ俺は渡したからな、貰ってないとか言うなよ」

見るも何も学校で手に入る資料以外、俺が調べてエクセルで作ったんだから内容くらい把握してる。

これで問題は解決、大志は小町に話し掛ける機会を失う、ざまあみろウチの可愛い妹を口説こうとするからだ。

「ねえ、アンタ」

「な、なんだよ」

「あたしのこと好きなの？」

「フツ、すぐそうやって恋愛に絡めるなんて子供っぽい所があるんだな、俺達に接点とかないだろ」

「接点が無いのにこういう事するからだよ。この大学一覧とか紙質が学校のじゃないからアンタが作ったんでしょ」

「……ち、違ええから！生徒が、あついや、友達に上げるって言ったら貰ったとかそんなんだから」

もう帰る、このままだとボロが出かねないからな。

ああもう、ラブコメみたいな事はやっぱり俺には似合わねえんだよ。

「友人、ね。ねえ、アンタ名前は？」

「俺の名前は比企谷だ、人の名前くらい覚えとけよ」

「悪かったよ。気を付けて帰んなよ……比企谷」

「お、おう。おつかれ、川崎」

大なり小なりがゆるされるのは、まんがタイムきららのキャラだけだから

この社会において、孤独な人間などいないという誰の言葉か。

人はそれぞれのグループを形成し、その中で身を寄せ合う事で心の安寧を得ている。

ならば、グループに属さず独立している存在は安寧な日々を得ていないということなのか。

否である、プロのぼっちは独立していながら心の安寧を得ているのだ。

つまり、グループを形成できなかったのではなくする必要がないのである。

別にもうコミュ障じゃないよ、仕事だと思えば話せるしな。

「おはよ」

「笑顔です、私とアイドルをやりませんか」

「えっ、えっ、ごめんね？」

「すまん、アニメと現実を混同していた」

それってヤバイんじゃないかと誰かの声が聞こえたが気のせいだ。

戸塚は将来芸能人、だったら別におかしくない、いいね。

「八幡は職場見学、もう決めた？」

「学校」

こてっ、と首を傾げる戸塚。

はあ、戸塚わいい、尊い、素敵、抱かして！

「そうなんだ」

「そういう戸塚も決めてるんだろ」

「あれ、言ったっけ？」

「いや、何となく」

「何となくかー」

そこだけ二人の中で通じてる気がした。

おっと、もう休み時間が終わるだって、学校とか崩壊しないかな。

放課後、やはり学生というのは同じイベントを行うためか話題も似たり寄ったりになる。

「ねね、みんなはもう決めたの」

「ふむん、我は」

「あつ、中二には聞いてない」

「はうっ!」

由比ヶ浜の心ない一言が材木座を苦しめる。

大丈夫だ、本当に辛い時は声にもならないからな。

意外と喋る余裕があるじゃないかお前。

「ねえ、ヒツキーは?」

「学校」

「うわ、省エネだね」

「そういうお前は?」

由比ヶ浜はむーんと唸り、少し考えてから言う。

「一番近いところかなあ?」

「比企谷君レベルの発言ね」

「一緒にするな。俺は崇高な理念の二元、教師志望として選んだ場所が近かっただけだ。お前は何だ、弁護士? 検察? それとも刑事?」

「はずれ、貴方がどういう目で私を見てるか分かったわ。そんなドラマの主人公になりそうな職業には就きません」

知ってる、お前は確かゼネコン関係だ。

もう昔過ぎて大分忘れちゃったけどな。

「まあ、由比ヶ浜は幼稚園の先生として、お前は本当に何するんだ」

「えっ、何でわかったの!?!」

「私はシンクタンク関連かしらね」

「へえ、キッチンとか受水槽って奴だよね!」

「シンクとタンク、ああ、そう取っっちゃったかー」

「違うの!?! ええ、ゆきのんく」

おい、なんだそのへみたいな顔は絵文字で見るとよ。

大なり小なりがゆるされるのは、まんがタイムきららのキャラだけ

だから。

「話変わるんだけどさ。私、見ちゃった」

唐突に由比ヶ浜が俺に向かって言った、第一声がそれだった。

何を、と怪訝そうな表情の雪ノ下にシリアス顔で由比ヶ浜が言った。

「ヒツキーが先生の車に乗ってお出かけしてたあー！」

「ああ、この間な。浅草にラーメン食べ行ったぞ」

「ラーメエエエエ、浅草ア！ラーメンなんでエエエエ！」

「なんだその忍者見つけたみたいな反応は」

そう、アレは川崎の一件のせいか。

一度メールしてしまつたら、なんか抵抗とかそういうのが無くなつてしまった俺は欲望の赴くまま、学生の足では厳しいラーメン屋に足を運んだのだ。

そう、静ちゃんというタクシーを使つてな。

「中華そばが食べたかつたんだよ。昔ながらの」

「デート、それ、絶対デートだよ！」

「フツ」

「鼻で笑われた!？」

所詮は恋愛事を絡めたくなるお年頃よ、俺達の間にあるのは友情だ。

「そんなに美味しいの？ヒツキーのオススメのらーめんって何？その、私も行ってみたいな……な、なんちゃって！いや、別にそういうのじゃないから！」

「おすすめのラーメン？そんな厄介な問いには答えたくないな。店のラーメンか、それとも市販？いつ、どこで、誰と、なにを目的に？俺はお前の味の好みすら知らん。出汗、タレ、香味油、具材などの、味の系統、味の濃さ。油の量。麺の形状、太さ、全体的な量。それに、独りで行くのか、複数で行くのか。地区や路線など、店の場所、店内の雰囲気、その他備考。好きな食材、嫌いな食材、サイドメニュー。つけ麺や油そば、ご当地食材の使用などなど。まだ、これでもほんの一部だが、最低限、これぐらいの情報開示がなければ、無責任に勧める

なんて出来ねえ」

「……ええ、怖っ」

いるんだよな、人の話しを聞いて影響受けるやつって。

ゆるキャンは良いぞと言ったら、キャンプしたがつて、したらしたで虫がとか焚き火がと文句を言いやがる。

そうだよ、非常勤の女、お前の事だよ！

「急にどうしたの、なんで机叩いてるの」

「昔を思い出して、殺意が湧いた」

「殺意が湧く、過去の記憶って何!?!」

ギヤースカ騒いでいたら、ノックをする音が聞こえた。

誰だよ、これから忙しくなるつてのにと忌々しく教室のドアを見る。

それは、俺の平成におけるラーメン革命つけ麺の歴史に匹敵するくらい重要な案件なんだろうな。

ソイツは、人というにはあまりにもイケていた。

高身長、爽やか、誰にでも優しい、そして顔が整い過ぎた。

それは正にイケメンだった。

「悪い、こんな時間に」

「悪いと思うなら、時間に配慮して帰れ。卒業生だか何だか知らないが深夜の学校に来る奴ら並に迷惑だ」

「うわ、すっごい、なんか具体的」

そのあと、警備の方とか来ちやうんだからね。

説明で、先生寝不足になったりするんだからね。

警備会社の人も、気を付けてくださいよとか苦情言ってくるんだからな。

「……、いいかなあ。いやー、なかなか部活抜け出せなくて、テスト期間中は休みになるじゃないか。今のうちにメニューをこなしておきたかったばい、ごめん」

「許可もなく座るな、それとお前の都合は聞いてないし、遅れてきた理由は自分の都合なので考慮されない」

「そうね、貴方が相手に配慮してない事実が変わりはないし、私達が

貴方の都合を聞いて残ってあげる理由もないわ」

「や、やー！ほら、隼人くんは部長だし、仕方ないしね。ねっ、ねー！」
「はあ？」

俺達の機嫌にフォローしようとした由比ヶ浜が後退る。

俺はな、社会に出た時に恥を搔かないように言っただけだ。

決して、イケメンだからとかが理由じゃない。

「材木座くんもごめん」

「い、いや、わ、ぼ、僕帰りますしおすし」

「そっか。それとヒキタニ君もごめん」

「俺の名前は比企谷だ。名前も間違えるとか、お前の事が嫌いだ」

「ご、ごめん」

何で、何で材木座を覚えていて俺を覚えてねえんだよ。

「はあ、能書きはいいわ。それで、用件は？」

「早くしろよ、ネットでゆるキャン見たいんだよ」

「それなんだけどさ」

俺の発言はスルーしてか、葉山はガラケーを取り出してポチポチし始めた。

フツ、スマホだぜ勝ったな。何をマウント取っているのか。

『戸部は稲毛のカラーギャングの仲間です西高狩りをしていました』

『大和は三股かけている最低のクズ野郎』

『大岡は相手を潰すためにラフプレーをしていた』

「なんだ、全部事実じゃんか」

「デマだよ！」

「池袋とかでやってたのかな、矢部くん」

「戸部だよ！やべえ、とか言ってるけど戸部くんだよヒツキー！」

「三股かけてるのは嘘だな、モテるわけがない」

「ああ、うん、確かに……いや、それはそれで酷いよ！」

「大岡って誰？スリザリンの選手か何か？」

「あつ、それは知ってる。って、そういうことじゃないよ！」

由比ヶ浜のツッコミが冴え渡る。

「すげえな、あと息切れしてるけど大丈夫か？」

「これが出回ってからクラスの雰囲気が悪くてさ。あつ、犯人探しがしたいって訳じゃないんだ、丸く収める方法を知りたい、頼めるかな？」

吐き気を催す邪悪とは何も知らぬ無知なる者を利用する事よ、自分の利益だけのために利用するっていうね！

椅子に深く座り込み、どうするか思案する。

学生の身分でなければ、俺はここで胸元からタバコを取り出し火を点けて、深く紫煙を吸い込んだことだろう。

そして、思い切り咳き込んでしまうのだ。咳き込むのかよ、様にならねえなあ。

「まず、前提条件なんだがそれは奉仕部の仕事だろうか？」

「……どういう意味か、聞かせてくれるかなヒキ……ガヤ君」

おい、お前、おい。

今、間違えそうになったよな。

「生徒自身が気付くほどクラスの雰囲気が悪いならそれは生徒だけの問題じゃない。自分一人で解決しようとせず他人に頼ろうとするとは評価するが、相談する相手を間違っていると俺は思うよ」

「先生に言えってことかい？でも、こんなこと」

「その先の言葉は何だ？先生に言うほどのことじゃないか、それとも教師は頼りにならないか。まあ、それも一つの考えだろう。お前が羞恥心や告げ口のように感じて口にしない訳ではないのなら、ただだな」

俺の発言に、何やら咎めるような鋭い視線が雪ノ下から注がれる。

うむ、今回ばかりは厳しすぎたかと思っただが、少なくともそれほど間違ったことも言っていないと思う。

というか、問題だと思っているようだが問題でもなんでも無い。

担任だって馬鹿じゃないんだから、クラスのグループなんて見たら分かるし、それぞれの関係性を見える範囲でなら把握できる。

そして、班分けなんて問題はよくあることに過ぎない。

お前は、体育の時間で何を学んだのか。

いつだってペアは先生だったじゃないか、えっ俺だけ？

「一理あるとしても、それは奉仕部として仕事を受けないという話にはならないのよ。だって、なんだか力不足を認めるようじゃない。」

「力のない正義は反対されるんだ、俺みたいな悪いやつにな」

「あら、でも正義のない力はただの圧政なのよ？それに、私は誰かがパスカルを引用したら用心するべきと学んでいるのよ」

「その先にあるのは、暴力を唯一の理性と教義にした世界だとしても俺は驚かないだろう」

「……なんか、難しいこと知ってるよね、ゆきのんとヒツキーってすごいねー」

俺と雪ノ下の茶番をポカンとしながら由比ヶ浜が褒め称えた。

自然と俺と雪ノ下の視線がお互いの顔を見て、すぐに視線を反らした。

俺も赤くなっているだろうが、お前も赤くなってるじゃないか。

ええい、やめろ、その無邪気な尊敬の顔を俺達に向けるんじゃないやないぜえ。

さて、ここで俺は頑なに教師への相談を選択肢として出すべきだろうか。

葉山の性格なのか、あまり事を大きくしたくないという考えが滲み出ている。

分かるけどね、でもそういうのって大きくなってから報告される方が困るからね。

クラスの雰囲気が悪くなっているのは知ってたけれど、何か起きたわけじゃなかったのに急に不登校やイジメがあっただんじやないかって困りますとかいう奴ね。

担任なのに当事者意識がなくて、よくよく聞いてたら細かいサインを出してたけどそれを取り合ってたなかったみたいな。

まあ、人の悪意を知らない純真なタイプかやる気のない日和見なタイプだと思うけどね。

「つまり、事態の收拾を図ればいいのね」

「まあ、そういうことだね」

「では犯人を捜すしかないわね」

「うん、よろし、えっ!?あれ、何でそうなるの?」

雪ノ下の言葉に葉山が一瞬驚いた顔を見せるが、次の瞬間には微笑む雪ノ下に意図を問う。

雪ノ下は微笑を浮かべながら、有り難い啓示を述べるかのように話し始めた

「問題の原因などどうでもいいのよ。大切なのは解決策とこれからどうしたいか」

「そ、それは丸く収めて前みたいにしたいき」

「悪意をバラ撒く加害者を擁護して、そして被害者も救いたい。自分は矢面に立たず綺麗なまままでいたい。貴方が決断できないのは欲望が大きすぎるからじゃないかしら?」

ハッ、と鼻で笑う雪ノ下。

どうした、お前そういうキャラじゃないだろ。

「やけに噛み付くじゃないか。お前、葉山のこと嫌いなのか?」

「いいえ、チエーンメールという人の尊厳を踏みにじる最低の行為に憤りを感じているのよ。あれは誹謗中傷の限りを尽くす。悪意を拡散させるのが悪意ではなく好奇心や善意を利用して、吐き気を催す邪悪とは何も知らぬ無知なる者を利用する事よ、自分の利益だけのためを利用するっていうね!ソースは私よ!」

お前の話かよ。

あと、お前たぶんだけど、最近ジョジョ見たよね。

何が言いたいか理由はもちろんお分かりですよ。

今までの態度は八つ当たりめいた所業であった、あからさまに八つ当たりだった。

八幡は訝しんだ。

「とにかくそんな人間は確実に滅ぼすべきだわ。例えトイレに逃げ込んでも追い詰めて殺すわ」

「怖いよ、あと怖い、八幡耐えられない」

「あつ、テレビでみた。ロシアだよ」

「由比ヶ浜、空気読んで。もうあの女ツンデレじゃないよ、ツンドラだ」

よ、視線が絶対零度だよ」

俺はこおりタイプじゃないから、普通に死ぬ。

なんだろう、悪・ゴーストタイプかな。

道連れとか覚えそう、あと悪巧み。

「私は犯人を捜すわ。そして一言言うだけでぱたりと止むと思う。その後どうするかは貴方の裁量、構わないかしら？」

「……ああ、それでいいよ」

葉山は観念したように苦笑いで承諾した。

実際、匿名でメールを用いているのは正体が露見するのを恐れているからだ。

メールとか今は使ってなくて、ほとんどラインだもんな。

メアドを変えたところで……ああ、いや、今はガラケーやメールがまだ主流なのか。

まあ、何にせよ犯人を見つければ万々歳だ。

「ところで、比企谷君はどうやらこの事件の原因がお分かりのようですよけど。もしかして犯人？」

「刑事さん、なかなか面白い推理ですね。ですがその推理には欠陥があります」

「ほお、欠陥とは？」

「俺はクラスで男子の連絡先は材木座しか知らないんだ！」

「あれ、さいちゃんは？」

「お前、戸塚は戸塚だろ何いってんだよ」

「そっか、うん？でも、あれー？」

「そうよ由比ヶ浜さん、さいちゃん、つまりちやんと言うことは男性ではないのよ」

「なるほ、うーん？あれー？」

知恵熱を出しそうなほど、お目目グルグルな由比ヶ浜は置いといて俺の完璧なアリバイは雪ノ下の追求を躲すことに成功していた。

まったく、もし疑われたままならこのまま俺が犯人を捜すというシャーロック・ホームズ展開になっていた。

頭脳はオツサン、身体は高校生、その名もボツチ探偵八幡のスター

トである、誰も見なさそう。

「葉山には縁がないことだろうし、他人に興味がない雪ノ下には分からないだろうが、人の顔を伺ったりする人間は一定数いて群れずには生きていけないんだ。まあ、俺は違うからな。むしろ噛み殺すよ、群れとかね」

「群れ……群れたくても群れられない、友達がいらないだけでは？」

「馬鹿、お前アレだよ、友達とか作ると人間強度が下がるから」

「フツ、つまり職場見学のグループ分けね」

雪ノ下が勝ち誇ったような顔をした。

そして、チラツと由比ヶ浜を見て、少しだけ笑みを深めた。

何だお前、その勝ち誇ったような顔は、馬鹿野郎お前勝つぞ俺は！
材木座とか……アレを友達とは認めたくはないな、まあ友達かな？

「あー、こういうイベントごとのグループ分けはその後の関係性に関わるからね。ナイーブになる人もいるかも」

「どうせ卒業しても関わるやつなんていないからな、ソースは俺だ」

「ああ、小学校や中学の友人って高校生になったら会わないものね」

「えっ？」

「えっ？」

何言ってるのと言う声が、葉山と由比ヶ浜から漏れた。

俺と雪ノ下からも、漏れた。

やめよう、この話は誰も幸せにはならない。

「は、犯人分かっちゃったかもー！」

「ほう、ラブ探偵由比ヶ浜の出番かな。IQ3で任せられるかな」

「はあ、IQ300くらいあるし！」

「知能指数が低めな会話に頭痛がしてきそうだわ」

それから由比ヶ浜は犯人は被害者の三人の中にいると言った。

まあ、動機から考えるとしたらそうだよな。

結局、犯人は分からなかったけどな。

前回は三人組を作らせたんだっけ、思い出してきた。

「とりあえず、三人の中に犯人がいると見てまず間違いないわね」

「ちよ、ちよつと待ってくれ俺はアイツらの中に犯人がいると思いた

くない。それにそれぞれを悪く言うメールだし、違うんじゃないか」
「じゃあアレだ、全員犯人だ」

「一人ずつ呼び出して、犯人として脅してみる？それで終わったら、その人が犯人だわ」

「怖いよ、やり方がマフィアじゃん。ドン・雪ノ下じゃん」

「も、もうちよつと穏便にさ」

「もう、文句ばかり。困った人ね」

雪ノ下は可愛らしく怒ったような仕草をした、まあ言ってることは怖いけどね。

しかし、全員を脅すというのは良い案だ。

「俺にいい案がある」

「失敗しそう」

「ねえ、どうしてやる気を削ぐようなこと言うの、ねえ」

「良いでしょう、許可します」

「独裁政権かよ、言われなくてもやるけどさ」

由比ヶ浜の疑いの目線と失敗したら分かるよなという雪ノ下の視線の下、俺はスマホを取り出してメールを作成した。

後日談、チェーンメールという悪意は最も大きな悪意によって無残にも消え去った。

それは新しいチェーンメールである。

『あなたを名誉毀損と脅迫罪で訴えます！理由はもちろんお分かりです。あなたが皆をこんなチェーンメールで騙し、人の尊厳を破壊したからです！覚悟の準備をしておいて下さい。IPアドレスから特定することは携帯会社を通せば可能です。つまり、警察が動けば誰が犯人か特定できます。これ以上問題が悪化するようなら教師にも訴えます。裁判も起こします。裁判所にも問答無用できてもらいます。慰謝料の準備もしておいて下さい！貴方は犯罪者です！刑務所にぶち込まれる楽しみにしておいて下さい！いいですね！あと捜査に協力しないと貴方もブチ込みます。少なくとも二人以上は転送して下さい！いいですね！』

なんともふざけた、俺なら笑ってしまうような内容だが社会も出たこと無い高校生には効果覲面だった。

エロサイトの架空請求かよと無視すればいいのに、小心者なのかその日からチェーンメールはなくなった。

というか、こつちのチェーンメールのほうが面白かったのか広まった。

葉山は結局、有耶無耶になった末にじゃんけんでメンバーの中から選んだ戸部と組んだ。

そして、戸部以外の二人と同じ職場を見学するという事をした。

教師の三人までのグループで見学というルールを利用して、二人ずつで同じ場所に行くという方法を生み出したのだ。

そして、他の生徒は黒板の名前から同じ職場を希望して、なんだかんだで集団で職場見学という事になっていた。

うん、最初から班分けの意味なくね？

まあ、何にせよ解決であった。

「ねえ、犯人も分からないのにどうやって訴えるのかしら？」

「……………」

「フツ、お可愛いこと」

「貴様、見ているな！俺の単行本、見ているな！」

やめてよね、本気で殴ったら僕が敵うはずないだろ」

中間試験が目前となっていた。

教師の話というのは黒板よりもテストに対するヒントが多く、俺なりにまとめたノートを見て復習するだけだ。

授業の準備で何度も見たような文章と忘れてしまった基礎からやらなきゃいけない教科の勉強時間は時間配分は違った。

一から数学って意外と難しい、定理とか覚えなきゃな。

なお、それでも勉強の仕方を分かっているから頭が若いのか意外と簡単に覚えられる。

電話した側から忘れて折返し掛けていた前世が懐かしい、懐かしいよな。

前世の俺は病院で寝ていて夢でも見ているのか、捻くれ教師は学生時代の夢でも見るかって一本小説を作れそうだな。

そういえば、十数年前のことだからか高校生活の記憶は何個か虫食い状態だった。

よく転生したら原作知識ノートとか作る奴らいるけど、この世界はラノベでも漫画でもないから原作とかなかった。

俺が主人公ならいいのに、いや、俺が主人公の小説って誰が読むんだよ捻くれた高校生が独身拗らせたまま死にそうじゃん。

「コーヒーでも飲むか」

MAXコーヒーを、特別な日以外は飲まないと決めてから俺の身体はマッチョになってきたと思う。

体育教師のプロテインとアミノ酸の話を聞いておいてよかった、ネットじゃ知ってるやつもないし、ある意味で未来知識チートである。

買ってきている豆が入ってるガラス瓶から目分量で何個か取り出し、ミルを動かす。

豆が粉に挽き終わったところで専用の準備を黙々と済ませ、ティファールをセットした。

どうでもいいけど、MAXコーヒーのエロ同人だれか書いてくれな

いかな、擬人化したらそれはもうエロいだろうな。間違いなく巨乳だ。今夜は寝かせないぞとか言ってくれそう甘々だけどカフエイン決めてるから寝かせないのだ、ヤバイ。

そんなどうでもいいことを考えていると、小町がソファでぐーすか寝ていた。

湯が湧くまで手持ち無沙汰なので、ダルダルに伸びた俺のTシャツを着ている小町を見て呆れる。

一応ブラはしてるのは覗き見えるからいいけど、下はパンツ一枚つてお兄ちゃんは羞恥心を持ってほしい。

お兄ちゃん、妹のパンツ見すぎくらいの羞恥心を持ってほしい、パジャマ履けよ。

仕方ないので肩と膝に腕を差し込んで、そのまま持ち上げた。

部屋まで運ぶか……意外と軽いけどちゃんと食べてるのか？

「うえ!?!」

「おお、起きたか」

「……………ああ、夢か」

「二度寝するな妹よ、あとズボン履けよ」

部屋の前まで来て、ドアノブをゴソゴソと肘で開けようとしていたら小町が起きた。

キョトンとした顔が最高に可愛いが、これは兄貴の特権だな。

「今何時？」

「九時くらいだな」

「しまった一時間寝ようとして、五時間寝てた」

「寝過ぎだろう」

「そういうお兄ちゃんは、勉強しすぎ」

「試験勉強だよ。普段勉強してないから、最後の足掻きだよ」

「うへー、そう言っただけ毎日部屋で教科書開いているのを小町は知っているのです。無理してない？」

「してねーよ、あっそれ小町的にポイント高い」

「うう、人に言われると恥ずかしいじゃんかー！あと、いつまでお姫様抱っこしてんだコラー!」

「暴れんな、暴れんなよ、危ないでしょーに」

「そう言っつてびくともしない八幡であった」

この兄があつての妹か、小町は落ち着いた調子で廊下に降り立った。

いや、俺が降ろしただけだけどね。

俺がリビングに戻って、ミルで挽いた焙煎した豆の香りを楽しんでいるとズボンを履いた小町が入ってきた。

しかし、今回の比率は酸味が強すぎたか。次はもう少し調整してみよう。

「お兄ちゃん、コーヒーガチ勢になってたよね」

「小町も飲むか？」

「ミルクマシマシ、砂糖チヨモランマ、シナモンスティック入りでね」

「もはやMAXコーヒーじゃん、いや作るけどさ」

小町専用で別で作ったコーヒー、通称小町スペシャルを作ってる。

ラーメン屋の注文みたいだよな、とか思うけど言わない。

「お兄ちゃんさ、変わったよね」

「ハッ、俺はいつだつてお前の味方だし、これから先もそれ以外の何物でもないが」

「いや、そういうことではない。うーん、目が死んでる」

「おい、それ変わってねえぞ」

「綺麗に死んでる？」

「死んでんじゃん」

「生きて」

「いや、生きるよ。まだ殺さないでくれよ、生きてるから」

何が可笑しいのか、テーブルに肘ついて両手に頭を乗せて我が妹はあざといポーズでニコニコしていた。

ハッ、可愛いじゃねえーか俺を殺す気だな。

「変わったと言えば、友達のおねーさんが不良化したんだって。夜とか帰ってこないらしい」

「そりゃあれだ、彼氏が出来たとかだ。大体の夜更しは異性関連、補導

してたら分かんかね」

「される側じゃん」

「そうだったわ」

まあ、年頃の女の子は難しいからな。

大学生とか人によっては出会い系で知り合った社会人とか、地元の不良とかね。

でも、真面目な子は元からそういうのに関わらないから、心配するほどでもないんだ。

真面目じゃない子はそれなりに付き合い方を分かってるし、心配するしか出来ないからね。

「お姉さん、総武高って超真面目さんだったのに何があっただらうねー」

「学校が良くても不良はいるぞ。チャラ男の戸部とかホストみたいな葉山とか、挙動不審な材木座とか魔性の戸塚とか」

「お兄ちゃん、類は友を呼ぶって知ってる?」

「なら安心だ、全員友達じゃない」

材木座は腐れ縁みたいなものだし、戸塚は信仰の対象だから友達とか恐れ多い。

あれ、なんか聞いたことあるような話だな

「お家のことだから言えないけどさ、最近仲良くなって相談されてるんだよねー。あ、その子、川崎大志君って言ってね。塾で知り合ったんだ」

「ああ、ソイツお前のこと好きだぞ。付き合い気がないなら、あまり優しくするな」

「やだな、そんな訳無いじゃん。すぐ、恋愛関係にすると恋愛脳って言われるんだよ」

「俺の後輩に恋愛脳のスィーツ染みた皮を被った諸葛孔明ばりに頭の回転がすごい奴がいるが、俺は恋愛脳ではない」

「ちよつと、何言ってるか分からないです」

「まあ、何かあったら相談しろ。やれることはやってやるから」

「もう、お兄ちゃんってばほんと小町のこと好きすぎ」

当たり前じゃん、何言ってるの。

朝、いわゆる朝チユンであった。

時刻は8時、うん遅刻だね。

俺はシャワーを浴び、コーヒーを入れて妹が作った朝ごはんを食べる。

一限は国語の授業、だから別に問題はない。

成績には問題ないが、準備した教師に対して自責の念を禁じえない。

俺はスマホを片手に電話し、職員室の先生を経由して担任に変わってもらった。

「はい、平塚です」

「おはようございます平塚先生」

「どうした比企谷。何か、あったか？病気とか？」

「心配していただいてありがとうございます。その、言い辛いのですが諸事情で今から登校します」

「ほお、つまり寝坊か」

「まあ、そういう言い方もありますよね」

「ハア、自己管理も大事なことで。小言は覚悟するように」

平塚先生に電話を終えた俺は戸締まりして家を出る。

まったくだ、家族の誰もが起こさなかったのは寝かしておこうという優しさだと思っておこう。

一人暮らし、長かったのに気が緩んでたかな。

授業が終わる五分前、ギリギリに調整して教室に向かう。

学生ときは死ぬか生きるかの必死さだったのに、どうして遅刻しても連絡すればいいやって擦れてしまったのか。

大人になったからかな、遅刻しすぎて落ち着くの癖になってんだよねみたいな感じだろうか、俺はこのキルアだ。

教室に入って、授業が終わると同時に平塚先生のところに行く。

先生だって怒りたくて怒ってるのではなく、こういうことしたら怒られるよってポーズだろう。

いや、平塚先生の場合は真面目だからガチかもしれない、準備とかあるのに申し訳ない。

「さて、殴る前に一応理由を聞いてやろう」

「暴力は良くないです」

「残念だ、だが君の学生らしいところを知れてよかったよ」

「それ、これから死ぬやつに向かっていうやつじゃん。やめてよね、本気で殴ったら僕が敵うはずないだろ」

「そこは親父にも殴られたこと無いのにだろ、無断でストライクに乗りそうだな」

「シードを知ってるだ?!」

平塚先生の拳がコツンと頭殴った。

なんだろう、学生時代のガチパンチと違う優しい対応に、物足りなさを……物足りなさ、この俺がどうして、これで良いはずだろ、俺はドMじゃない!

「まったくこのクラスは問題児が多くて堪らん……川崎沙希。君も遅刻かね」

「あつ」

「……おう」

「うん?なんだ、君等は知り合いか?」

知り合い、知り合いなんだろうか。

っていうか、遅刻ってまだバイト続けてるのかコイツ。

「おい、まさかラブコメ的なあれなのか。何処かでなんかフラグとか建ってるのか、ねえどこで出会って買えるの、ねえ、比企谷……聞いているでしょ?」

「怖い」

「……バツカじゃないの」

川崎はそう言って話しかけんなオーラを出して席に座った。

おい、俺を見捨てるな。ちょ、離せ!授業始まっちゃうから!

「この件について少し話しておこう。チツ、放課後に職員室に来たまえよ!理由は、あれだ遅刻だ!」

「絶対ウソだぞ、職権乱用はよくない」

「約束だからな！」

シルバーのアクセサリーとかさ、いや、そのセンスはねえよもう一人の俺。

先生、運命が始まりました。

それは、俺の一言から始まった。

俺の言葉に、何の話か分からない先生に無言でスマホを見せる。

スマホを凝視し、先生の瞳が俺を射抜く。

その瞳は揺れていて、動揺を隠しきれていない。

スマホと俺を交互に見ていた。

「これは、最近やってるやつじゃないか」

「来ましたよ、コラボ。しかも、ベースは本店と同じです」

職員室、静かな空間でガタツと一際大きな音がした。

それは驚く先生が立ち上がった椅子の音だ。

平塚先生が震える手で俺の両肩に手を置く。

「そんな、嘘だろ。本店に行かなくても、味わえると」

「喜べ先生、先生の望みはようやく叶う」

「悪いが付き合ってもらうぞ、私の身体が尽きるまで」

他の教師の静止を振り切る先生の背中を見て、俺は校門まで移動した。

そして校門前にやってくる外車、恐らくアストンマーティン。

推定で五百万以上、謎だ。

「行くぞ比企谷、財布の中身は十分か」

颯爽と乗り込み、目的地へと移動する。

生徒と先生、うるせえ！そんな細かいコンプライアンスはな、限定という言葉の前では不要なのだ。

パーキングに車を停めると、店の前には人の列があった。

「馬鹿な、よもやよもやこれほどとは」

「なんじゃ」

速い、余りにも速い、仕方ないが並ぶ。

遂に俺達の番が来て、店内に入ると目元と鼻を刺激する強烈な香

り。

渡された食券に淀みない動きでそれはやってくる。

マグマを思わせる赤、そこに浮かぶ白く柔らかい塊。

粘性のそれは冒流的な香りを放っており、こちらの正気度を奪う刺激がある。

麻婆だ、それも激辛麻婆豆腐だ。

輪切りにされたゆで卵、細かく切り揃えられたネギ、赤いタレを纏った豚肉、野菜はクタクタになるくらい柔らかくなっている。

スープは赤とは対象的な醤油ベース、出汁のように透き通る黒みを帯びた澄んだ液体だ。

麺は太く、食べごたえはありそうだ。

「比企谷、これが」

「ええ、プリズマ☆麻婆ラーメン」

まずはスープを飲む。

オイスター、オイスターが入ってる！ほのかな甘味、いや辛い！

「ゲホツ、うう、ゴフツ、んぐつ、うえ」

「は、速い！泣きながら、食べているだど！」

「ひ、比企谷。ロットを乱すな」

「せ、先生……その食べ方は」

先生の器を見る、そこには麺と麻婆豆腐が逆転した状態があった。

天地返し、ある流派に伝わる麺が伸びるのを防ぐ食べ方。

まさか、いやあの発言、先生はあの流派の人間に違いない。

だが、それは蒙古タンメンに対しては邪道。

麻婆豆腐とスープが混ざり、辛さが激減する、中和してしまう禁忌手。

「私も、食べたかったさ。だが、私はレベルが足りない」

「そうか、先生の舌はその星を食べられるレベルではない」

「そう、私はまだ五日程度しか食べないのだ。そして、これが大人の力だ」

それはチーズ、辛さをマイルドにするチーズ。

先生は入れるのを躊躇しながら苦渋の末にチーズを入れた。

トッピング！学生じゃ出来ない、大人の力、課金！

俺がクーポンで大盛りになっているのに、ずるい！

チーズで辛さをダークチューニング、俺の大盛りというシンクロとは別のムーブだと。

人の事を見ている場合ではないので、俺も食べる。

辛い、辛い、甘い、辛い。

辛さの中に、甘さを感じる。

だが徐々に甘さが際立つ。

そう、辛さに慣れると出てくるスープの甘み。

味噌にはない、スツキリとした醤油ベース特有の甘み。

だが、それは偶にでいい。

「水、飲まずにはいられない」

「ふ、震えが止まらない。胃が爛れるように痛い、でも箸が、箸が止まらない」

「先生、飲み物は飲まないほうが良いですよ。舌が、リセットされる」「な、なんだって……」

喉を潤す水、ヒリつく喉。

戻ってくる痛み、激痛、激痛の中に甘みが戻ってくる。

辛さの向こう側、これぞ愉悦！

愉悦はあるかないかではない、知るか知らないかなのだ。

「ふう……」

この後、メチャクチャ胃がずんがずんがした。

先生とラーメンの後、商業施設マリンピアの書店に寄った。

勉強用に新しい参考書を買ったのだ。

家に帰宅して勉強していると、少し遅めの時間ながら塾から帰ったのか小町が帰ってきた。

「ただいまー」

「帰ってきた、戦士達が」

「ダメ、お兄ちゃんこのままじゃ崇り神になってしまう。負けないでお兄ちゃん、次回お兄ちゃん死す」

「殺すな。流石に言葉を話せなくなるほど弱体化しないよ。飯は？」
「食べてきたー、サイゼのドリアめっちゃ美味かったよ地中海風つてやつ？」

「ミラノ風では？」

「なんだ食べてきたのか……うん？」

「小町ちゃん小町ちゃん」

「はいはいお兄ちゃん」

「ボツチ耐性皆無であろう小町ちゃん、一人でサイゼ行つたの？」

「小町がボツチ耐性ないのはお兄ちゃんと違ってぼっちになったことがないからなんだよ」

「ぐはあ……ば、馬鹿な。同じ血を分けてどうしてこんなに差が……つていうかやつぱり誰かで行つたのか」

「あー、うん、アレ。昨日話したでしょ、川崎大志君」

俺は淹れてあつたコーヒーを一気飲みする。

ちよつと、急用を思い出した。

「少し出かけて来なければいけないようだ」

「えー、今から？」

落ち着け俺、クールに行こう。

俺と大志はまだ知り合つていない、つまり何があつても警察に接点があると思われぬのだ。

思われるとしたら妹の小町、うん、今日はやめておこう。

小町が友達と遊んでいるアリバイがあるときがいい、それがいい。

「あー、お兄ちゃんやらしーこと考えてるでしょ」

「そうだな、どうやって人を陥れられるか考えていた」

「やらしいのベクトルが違う!？」

というか、そういうえば川崎の相談を受けたような受けてないようなな。

あーそうだ、メイド喫茶行つたの思い出した。

そうか、俺がラーメン食べてた今日だったか。

そう言えばあの時は参考書を買つて、ファミレスで勉強しようとしたんだっけ。

あれ、川崎まだバイトしてんの？

「相談乗って欲しいってき、タダとは言わないからってご馳走してもらっちゃったよ。いやー、小町も払いたかったんだけどね、次の時について言われちゃったんだよねー」

「おい、さり気なく二回目の誘いしてんじゃねえよ。ダメだこの妹、早く相手をどうにかしなきゃ……」

「もう、そんなんじゃないってば。大志君はタダの友達？」

疑問形、疑問形だど!?

馬鹿な、速すぎるフラグが建ってたんだ。

大志のアプローチをどうにかしなきゃ、幸い奴はまだ中学生。

口実もなく女を口説くことは出来るレベルではないはず、ならば川崎の件を解決すればデートに誘えないのでは？

「勝ったな、風呂入ってくる」

翌日、ユニクロで黒シャツとジャケット、スキニーパンツを買って、髪をセットした。

オールバックにして、アクセでもつけようか。

シルバーのアクセサリーとかさ、いや、そのセンスはねえよもう一人の俺。

メイド喫茶を検索して、ああエンジェルなんたらだったなと思い出した。

検索すればすぐに川崎のバイト先が分かる、そうスマホならね。

一応、親父の名刺を財布に入れておいてホテル・ロイヤルオークラに向かう。

そういえば、ここのランチ美味いけど高いんだよな。

この体じゃ来たことなかったかと、ふと思った。

重そうな木製のドアをくぐり、脇に控えたギャルソン。つまりは男性店員に軽く手を立てて静止する。

「人と待ち合わせなんだ。カウンターで構わない」

男性店員はスツと頭を下げて、また仕事に戻る。

第一関門は突破した。

グラスを磨くスラリと背が高い泣きぼくろのお姉さんがいた。

薄く化粧をしていて、年齢はパツと見じゃ分からない。

「よお、バイト続けてたんだな」

「……どちら様でしたでしょうか？」

「教室であつただろ、比企谷だ」

「……ああ、で、誰？」

「おい、笑いながら言い直すなよ」

コイツ、分かってて知らないフリしてんな。

川崎は肩を竦めながら、俺の前にMAXコーヒを置いた。

「おい、まだ頼んでないが」

「前に、駐車場で飲んでなかったけ？」

「まあ、頼むつもりだったけど」

「この仕事はお客さんを見るから……それで、用件は？」

「別に様子見だ。と言つても、調子はどうだとかそんな程度」

「わざわざ、そのために服買ったの？タグ付いてるけど」

えっ、ちゃんと外した筈だけど。

首元を確認するが、値札はない。

そんな俺の様子にクスクスと含み笑いが聞こえた。

この野郎、騙したな。

「やっぱり、買ったんだ」

「うるせえ……それより、なんでバイトしてんだ」

「もう辞めるよ。まだお金が足りないって理由もあるけど、やめま

すって言つて辞められるものじゃないから。今月一杯まではいな

きや、店にも迷惑だから」

「なんだそんな事情か。まあ、家族に心配かけんなよ。お前のとこの

弟、お前を口実にウチの妹口説いてるんだわ」

「口説……大志、後で話さなきや」

なんてことはなかった。

普通のバイトと一緒に、急に辞められると困ると店側に言われたかららしい。

バックレればいいのに、給料は月末締めだから貰うまではそれも出来んらしい。

「そういえば、お前って貯金ある?」

「急に何の話、あとお前って言うのやめて。沙希って名前があるんだから」

「えっ、じゃあ沙希さん?」

「……やっぱお前で……は恥ずいから川崎で、それより貯金ならあるけど何なの」

「お、おう。なんか怒ってないか?」

「……別に」

「投資信託興味ないか? 来年から絶対上がる奴があんだわ、俺はもう全財産ブチ込んでるんだが」

俺が教師だった頃、世間じゃ投資ブームだった。

国がバツクアップしてたのもあるし、日経平均株価が上がったのもあった。

まあ、俺はその時に特集をやった投資信託会社を知っている。

今は無名だが上がると知っているのだから、未来知識チート万歳である。

「お前の全部を俺にくれよ、悪いようにしない」

「……ねえ、私口説かれてんの?」

「口説いてねえーよ」

「はあ……まあ、考えとくよ。大志のことありがとね、ウチでもコソコソしてたからさ」

「おう、じゃあ俺はこれで」

そう言っただけはグラスの中身を飲み干して立ち上がった。

そんな俺を川崎が呼び止める。

「ねえ、比企谷」

「……お、おう」

振り返ったら、川崎が俺をジッと見ていた。

まるで何かを急かすような、そんな視線だ。

「私の言いたいこと、分かってる?」

「……待て、どういうことだ」

えっ、これ、あれ。

もしかして、俺、今なんかモテ期とかそういうアレ？

えっ、おじさんに女子高生が……いや、俺ってば高校生だった。

そういうえば、なんか照れてたような随分と前の事を覚えていたようなな。

アレ、勘違いじゃないんじゃないか。待て、俺には雪ノ下が、いや雪ノ下は友達だしな。

あと由比ヶ浜もいるが、いやいや二人共、前世じゃ友達だったし、今も友達だしな。

っていうか、俺、凄い色々考えてないか。

これアレじゃね、死ぬ前の、ハンターハンターのナツクルみたいな奴じゃ……

「お会計」

「すみませんでした」

勘違いでした、どうもすみません。

ハムの人みたいなの覚え方してんじやねえよ。あつてるけど、それだとお歳暮にクッキー送ってきそうじやん

試験期間の全日程を終了して、仕事してる気分以自己採点した。

自分の問題用紙は持ち帰れるので答えを書き写していたのだ。

うん、まあ、高得点じゃないですかね。

さて職場見学である。

希望を出したのは学校だったが、何故か平塚先生の手伝いになった。

教師の仕事を体験しようということらしいのだが、先生がサボりたいただけだと思う。

そして来た場所は、葉山が選んだ電気機器メーカー、近隣に開放されたミュージアムがあり、スクリーンシアターや展示物があって子供が好きそうな場所だ。

別のグループのはずなのに、クラスの大半が葉山の周りにいるので、もはや遠足である。

先生と一緒にウオンウオン言う、機械を見る。

「日本の技術力はすごいなあ……私が生きている間にガンダムは作られるのかなあ」

「お台場とかで見れますけど、本物はどうですかねえ」

「ああ、そうだ比企谷。例の勝負の話なんだが」

「勝負とかしてましたっけ。不戦敗で良いですよ、別に」

「張り合いがないな」

「いや、先生がGMなんで全部任せますよ。それより学年末は書類が溜まりますけど処理できてますか？進捗状況はどうなってます？テストの採点とか」

「なんで君は内情に詳しいんだよ。インターンでもそこまでは知らないよ、教えてないからね！やめろ、私はメカメカロードで現実逃避するんだあ！」

メカメカロードってなんだよ。

見覚えのある団子頭が縁石に座って携帯を弄っていた。
由比ヶ浜だ。

「お前、何してんの」

「あつ、ヒツキー！先生も！何でいんの」

「こら、居るんですかだろ」

「うう、やあ、違って、今のはヒツキーに言ったんだし」

「俺は今職場体験も兼ねていて、先生役である。つまり、今は先生みたいなもんだからお前は不服だろうと従わなければいけないんだ」

「酷い！社会の闇を感じる！」

そう言えば、この場所で俺は由比ヶ浜と気不味くなった。

どこまでも優しい由比ヶ浜に、俺は期待して、期待することの虚しさに、距離を見誤った。

俺に優しい人間は他の人にも優しくして、そのことをいついっいつ忘れてしまいたいようになる。

そうして、特別だと思って、それが勘違いなんだと自分を戒めて、敏感に過敏に反応していた。

アレルギー反応だ、ぼっちが偽のラブレターや罰ゲーム告白に警戒するようなんだ。

あの頃の俺は、面倒くさくて仕方ない。

そこがいいとか小町は言うけど、いや小町が言うなら良いことなんだろう、そう考えておこう。

優しい女の子は嫌いだ、そう思っていた頃が俺にもあったが、俺は俺に優しい女の子が好きだ。

「ヒツキーもサイゼ行こうよ」

「いや、俺はいいよ。人混みって嫌いだし、また今度な」

「ええー、じゃあ、うん。また後で？後でね！」

「おう、気をつけるよ。歩きスマホは危険だぞ、ガラケーだけど」

狙ってんのかと思うような、口を膨らませる子供みたいな仕事をした由比ヶ浜が残念そうに立ち上がる。

いやなんだよ、入り口開けた時の誰が呼んだのみたいな空気、気ま

ずいからな。

由比ヶ浜は俺と別れてしばらく進んでから、振り向いて大きく手を降った。

アイツ、と呆れながらも小さく手を振り返す。

それに気づいて笑みを浮かべて走り去ってく姿を見て、今の関係は仲違いもしていない良好な関係だなと思う。

「おっ、なんだ青春かー！やるなー」

「先生、あんまり茶化さないで下さいよ。それより行きますよ」
「えっ？」

「当然、お昼はラーメンですよ。せつかくなんだし、どこか探しましょうよ」

「お、おう。よし、ラーメンデータベースで良さげなの探すか」

二人で昼食にご当地ラーメンを見つけ入った。

麺とスープは抜群にうまい、よく見つけたな。

「どうだ、美味いだろう」

「よく見つけましたね。美味いです」

「餃子食べてると、ビールが飲みたくなるな」

「ダメですよ」

「帰りは電車か……」

「……ダメですよ？」

「冗談だ」

そうやって先生は壁に貼られてるメニューの生ビールという場所を見つめていた。

冗談が、冗談に聞こえない！

学校に帰ってからは、先生が授業をする流れを説明してくれた。

終わった時のレポートを作る上で、先生の口頭による説明は助かる。

まあ、内容は知ってるんだがな。

それから、個人情報など俺が関わると不味いこと以外の雑用をやらされた。

ちよつと、仕事ため過ぎじゃないですかね。

早めにやれるというのが分かるだけに、あつこの人夏休みの宿題を最後にやるタイプだと思った。

一週間のうち、最強の曜日である土曜日。

休みなのに、次の日も休みという最強の曜日である。

日曜？てめえはダメだ、明日仕事つて憂鬱になるからな。

「お兄ちゃん、学校楽しい？」

「あん？急になんだよ……ハッ！た、楽しいぞ！全然、虐められてなんか無いぞ」

「あー……うん、お母さんが言う学校楽しいとは違う意味だから安心していいよ。部活とか楽しい？」

「おう、楽しいぞ。雪ノ下も由比ヶ浜も、キャラがラノベのヒロイン並に際立つてるから退屈はしない」

「うーん、女の子？えっ、お兄ちゃんが女の子と喋ってるの……」

「おい、その反応はなんだ。待て、お前会ったことなかったけ？由比ヶ浜は知ってるだろ、犬助けた」

「ああ、クツキーの人！」

「ハムの人みたいな覚え方してんじゃねえよ。あつてるけど、それだとお歳暮にクツキー送ってきそうじゃん」

ちなみにアイツのクツキーは、食べたものじゃない。

いや、きつと練習して美味しく作れるようになってくれることだろう。

だが、今は時期じゃないそういうことだ。

「ららいおーん、ららいーん、おつ、東京わんにゃんショーか」

「うっそー！やったあー！お兄ちゃん、よくぞ見つけ出した！」

「フハハハ、もつと褒め称えろ！」

「きゃー、素敵ー！お兄ちゃん、素敵ー！」

「……うるさい、バカ兄妹。くたばれ」

寝室から這い出るように、世間に呪いをぶちまけるような母親が現れた。

ボサボサの髪で、ズリ落ちたメガネ、その下には隈がある。

うう、とか、ああ、とか陽の光を嫌がりながら出てくる姿は泥人形
テイストだ。

人体錬成に失敗した母親みたいな姿のキャリアウーマンだ、お疲れ
さまです。

「アンタ達、出かけるなら車に気をつけなよ」

「分かってるよ、小町を危ない目に遭わせないよ」

「じゃなくてアンタの心配してんの」

「……………あー、小町に怪我させたら親父がうるさいからか」

一瞬、俺の心配をしているのかと思つたが、途中で気づいた。

ちなみに親父は惰眠を貪り夢の世界にいる、ドリームランドかな。
溺愛するあまり敵視する姿は分からなくもない。

ただ、美人局に気をつけろとか、逆ナンされたら絵を買わされると
か先物取引は詐欺だとか働いたら負けとか言ってくる、ソースは親父
というパターンでだ。

「お昼とバス代くれ」

「アンタの分、いるの？」

「お母さん、お昼とバス代ちょうだい！」

「しようがないな」

おい……………おい、対応違くない。

いや、もう高校生だからバイトしろよとかそういう判断なのかもだ
けど、働いたら負けだからバイトしたくないんだよ。

大人になったら働かなきゃいけないんだから、学生くらい働きたく
ないじゃないか。

まあいいや、俺もいつもの昼代五百円で飯食うから。

あれ、小町が頼むと二千元、俺の分も込みだと千円。

あれ、小町が申請すると倍になってない、お母さん。

「ありがとー、んじや行く。お兄ちゃん」

「……………スウー、そうだな」

「どしたのお兄ちゃん」

「世の中の妹が優遇される風潮に無情さを感じていたところだ」
「まあ、小町が可愛いのは今に始まった話じゃないんだよなー」

「小町ちゃん小町ちゃん、ナルシストな発言は外では控えなよ」

「大丈夫大丈夫！客観的に見た意見だし、いわゆる第三者委員会？」

「誰だよ、第三者。ほら行くぞ」

家から東京わんにゃんショーのある、幕張メッセに向かった。

俺は戸塚が猫系でも一向に構わない。むしろ猫耳とか最高の高だと思うんだが、いや待てよウサギも捨てがたい。それはそれでセンチティブだが、普段から妙に色気があるからな

会場にはそこそこの人がいた。それなりに盛況でペット連れもいる。

どちらからともなく手を握る、昔から子供二人で出かけていた名残だ。

小町は俺の手をブンブン振り回し、脱臼しそう、脱臼した。

肩、ないなった。

「どしたのお兄ちゃん」

「俺の肩はボロボロだあ！」

「う、うん。そうなんだ」

「と思ったけど気の所為だった、でも痛い」

さて、この東京ワンニャンショーだが、要するにペットの展示即売会だ。

ちよつとした珍しい動物もいるのだが、入場無料で来れるのだ。

恐るべきイベント、やっぱり千葉は最高だぜ！

「ペンギンだ！ペンギンだよ、これ！ペンギンいるよ！」

「ペンギンってラテン語で肥満って意味らしいぞ、そう考えると肥満のサラリーマンが営業で外回りしてるみたいだよな」

「うわあ、急に可愛くない。それだと課長とか同期、ライオンとかトカゲだよ」

「ハムスター、包丁持ってそうだな」

これは恋なのか、それとも食欲なのか、それは違うアニメか。

シロクマくん程度のほのぼの系で良いです。

鳥コーナーでは極彩色の世界が広がっていた。

黄色に赤に緑に、原色がこれでもかと塗りつけたような出で立ち、うーん何なのお前ら一瞬一秒が美しいの？永遠とか欲しくないとか

言っちやう系なの。

そんな色彩の豊かな世界に艶やかな黒髪が揺れる。

片手にパンフレットを持った彼女がキョロキョロすると、二つに分けて結わえた髪が揺れる。

何だお前、双頭の蛇かな？捕まったら電流とか流れる感じか？ブンブン振り回しすぎでしょ。

「おい、雪ノ——」

「ッ!？」

「——あ、痛ッー!？」

「あ、あら？珍しい動物がいたわね、どうして普通のホモサピエンスがここに」

「おいやめろ、俺は聖剣なんぞ抜かんぞ」

意外、それは髪の毛！ツインテは危険だわ、ポニテ派に転向するしかない。

というか聖剣抜くとかその先は地獄だぞ！

俺が雪ノ下と話していると、ひよいと俺の背中から小町が顔だけ出した。

どしたの、人見知りなの？あつ、でっかい猫が見える！ねこはいま

す。
「やー、はじめまして比企谷小町です。兄がいつもお世話になっております」

「挨拶出来てえらい」

「初めまして。雪ノ下雪乃です。比企谷君の……比企谷君の何かしら？クラスメイト？友達？微粒子レベルで知り合いかしら？」

「微レ存なのかよ」

「遺憾の意である」

「訂正するニダ。嘘だドンドコドーン」

「訂正するわ。誠に遺憾ながら上司の雪ノ下です」

「ああ、いえ、いままで大体分かったんで大丈夫です」

この人が部活の人？そうかも。

この時間、わずか二秒、アイコンタクトにより通じた。

「猫か、猫なんだろ、猫しか勝たん」

「何を言ってるのかまるで意味が分からないわ。それで比企谷くんはどうしてここに」

「毎年来てるんだよ、妹と」

「うちの猫と会ったのもここなんですよー」

うちのお猫様は生意気にも血統書付きである。

小町の飼いたいのに即決だった。

支払いの為だけに呼ばれて、支払い終わったらそのまま帰された親父を哀れに思ったものである。

キヤバ嬢に貢ぐおじたんかなあ。

「仲がいいのね。じゃあ」

「おう、じゃあな」

「ちよちよちよ、ちよと待てーい！せつかく会ったんだし、一緒に回りましょ！ねっ！ねっ！」

小町が距離を詰めるように一歩、二歩と近づく。

雪ノ下が距離を離すように一歩、二歩と離れる。

やめろ、そいつに光属性は効く、やはり闇の者だったか。

「いや、邪魔じゃないかしら……比企谷くんが」

「俺かよ」

「大丈夫です。兄は集団行動だとミステイレクション使えるから！邪魔じゃないですー！」

「そのボッチ、消えるよ……」

「違う意味で場に溶け込めるのね、才能の無駄遣いだわ。バスケしなさいよ」

「バスケが、バスケがしたくないですー！」

平塚先生にでも言えと、奉仕部じゃなくてバスケ部がいいって。

いやだよ、バスケって不良がやってそうじゃん。

俺はスラダンとアヒルの空で詳しいんだ、スポーツ系はだいたい不良が混じってるって分かんだけね。

何故か三人で見ることにになり、珍しい鳥コーナーから回ることになった。

ド派手な南国系から今度は金属の手すりですり区切られたスペース。仰々しいくちばし、研ぎ澄まされた爪、頑強な羽という雄姿がそこにある。

「鷲！鷹！隼！」

「お兄ちゃん、変身しそうな勢いで叫ばなくても、可愛くない」

「えーほんとにござるかあ？」

「うざっ！」

「貴方には分からんでしようねえ、可愛いと可愛いと思うて……」

「美しいと思うけど、どこかの謝罪会見みたいね、みたいじゃないかしら？」

所詮、おなごには分からぬ……。

次は小動物ゾーンに入る。

ハムスターだのウサギだのフェレットだのとペットをあつめた、所謂おさわりコーナーだ。

おさわりって聞くとなんかセンチティブだわ。

「小町、次行こうぜ」

「てしてし、お兄ちゃん先行ってもいいのだ」

「おい、口調、おい」

「とつとご行けお兄ちゃん。ヒヤッハ踏みそうで可愛い」

「そうか……」

お兄ちゃんは、悲しそうに去るぜ！

この比企谷八幡、ハム太郎に勝てはせん！

この日、ハム達は思い出すのだろう。人類に飼育される自分達の現実を。

駆逐されるなよ、妹よ。

「じゃあ次の次が猫ゾーンだ」

「そ、そう。ではせつかくだし、でも別に興味があるとかじゃないわ」

「分かってる分かってる」

「むう……本当に分かってるのかしら、この男」

雪ノ下は不満そうにしながら、すでに立ち上がりパンフレットを見ながら歩きだしていた。

行動と言動が一致してないんですが、分かっているのかしら、この女。が、犬ゾーンが見えた瞬間ピポットターンさながらの動きで俺の背後に回り込む。

馬鹿な、この俺が、背後を取られた！やられる！これから瞬きで返事をするように指示される命がけの尋問が始まるかもしれない。

と思ったが、そんなことはなかった。

癖になってんだよね、犬見ると隠れるの。

「どうかしたか」

「いえ」

「知ってるか雪ノ下、ここは子犬ばかりだぞ」

「むしろ子犬のほうが、ムムツ、ムムム……別に苦手じゃないわよ。得意じゃないだけ」

「世間じゃそれを苦手って言うんだぜ、雪ノ下よ」

「苦手……取り消しなさい、今の言葉、私は苦手じゃないわ」

「所詮、雪ノ下は敗北者じゃえ……」

いや、俺もその犬だったら怖くて逃げるよ。

だって、炎の上位互換らしいからね、死ぬる。

「比企谷くんは犬派？猫派？」

「派閥争いを外から見ると、お前は？」

「質問してるのは此方よ。二度はないわ」

怖いよ、背後取りながらその発言はマフィアだよ。

でも猫派ですよ、八幡知ってるんだわ。

「てつきり、貴方は犬派だと思っていたわ。必死だったから」

「あー、戸塚とのテニスか。確かに戸塚は子犬系だが、しかし俺は戸塚が猫系でも一向に構わない。むしろ猫耳とか最の高だと思っただが、いや待てよウサギも捨てがたい。それはそれでセンチティブだが、普段から妙に色気があるからな。しかし、戸塚と一口に言ってもどの動物と合うかマリアージュするかは試してみなければ分からない、いっそ原点に戻って今の戸塚の方が最高なのでは？無印の方が続編より良いというのは諸説あるからな」

「……そう。こんなときどうしたらいいか分からないわ」

「進めばいいと思うよ」

背中をチョンチョン押されてわんわんゾーンと書かれたチープなゲートを潜り抜ける。

おい、いつまで背後取ってるんだ。銃でも突きつけてんの？

雪ノ下は沈黙を保っていた、答えは沈黙、それがこの場の唯一の答えと言わんばかりだ。

「キヤーキヤー……こっち向いて、可愛い！可愛い！写真撮りますよー！目線くださいーい！」

周囲が盛況なだけに余計に気になる。

っていうか平塚先生だな、あれ。

何してんだよ先生！なんだよ、意外と楽しんでるじゃねえか。その先に結婚があるからよ、婚活止まるんじやねえぞ……。

「ねえ、あれ」

「猫はこの先だ」

「えっ、でもあれ」

「立ち止まる暇はない、いいな」

「だって、あそこの」

「俺達は何も見えていない、いいね」

「あっ、はい」

後生だから、可愛そうでしょ！プライベートで知り合いに会うのって！

そんな俺達の前に、ダックスフンドが走ってくる。

野生のダックスフンドが現れた。

「ひ、比企谷くん、い、ぬが……」

俺の後ろで反復横跳びするかのようにおろおろして視線を彷徨わせる雪ノ下がいた。

そして、何を思ったのか意を決して俺の背中を押した。

いや、背中を押してほしいタイミングは今じゃない。

「行きなさい比企谷くん」

「どうせ後でどうして行っただか責めるんだろ」

大人は理不尽だって思ったね。

モードビーストになった犬を取り押さえる。

フハハハ、うちの猫を無理矢理捕まえてる俺に勝てるわけ無いだろうが。

犬は悲しげな瞳でクウンと泣いてから、ハツとした。

まるで思い出したとでも言いたげだ、そしてクンカクンカしてからペロペロしてきた。

やめろ、俺はルイズじゃない。

びっくりして俺は犬を手放す。

「どうして離れた！言え！」

落ち着け、キヤラ崩壊してるぞ。

犬は逃げ出さず俺のまわりをグルグル走り回ったら、ごろーんと転がって腹を出す。

しばらくハツハツハツとしたら、また起き上がって再び掛けてごろーん。

走る、ごろーん、走る、ごろーん。

なんだこれ、撫でろという圧を感じる。

「あつ」

「あつ」

「あつ」

犬の飼い主らしき人が走ってきて、俺と雪ノ下は固まった。

飼い主らしき人も立ち止まり、此方を指差していた。

そこにいたのは、由比ヶ浜だった。

「ど、どうしてヒツキーと一緒になの？」

「……べ、別に理由なんてないわ」

「おいやめろ、誤解を生むからその反応はやめろ」

「あー、うん、そっかー、やー、そういうことかー」

「おいやめろ、その反応は誤解しているやめろ」

「ご、誤解しないで。たまたま、そうたまたま一緒にいただけだから」

「ねえ、やめろって言ったじゃん。やめろよお！」

「あはは、分かっているから。大丈夫、だよ？うん、安心して」

「だからやめろって言ってんだろお！安心できんわ！」

この後、誤解した由比ヶ浜に理解させるのに多大なる時間を弄した。
理解力ゼロかよ、この野郎。

何だお前、免罪体質か何かなの？確かに孤独な人間かもしれないけどこの社会に孤独じゃない人間はいないからって、それ言われてるから

ハムスター相手にはしゃぐ妹の姿を見せて、ようやく納得させられた俺は備え付けの椅子に座って休んでいた。

女子は女子で話があるらしく、何やら立ち話に興じている。

時折、此方を見ながら会話するのは心臓に悪いので辞めてほしいんですが、悪口じゃないよね？

そう言えば、と思って携帯を確認する。

未来じゃ使わなくなったが、メルアドを見るためだ。

あー、やっぱりそろそろだったか。

俺が携帯でポチポチ操作していると、スマホの画面に黒い影が差し込む。

顔を見上げれば不思議そうに見下ろす雪ノ下の顔があった。

「なんだよ」

「話が終わったら何かしていたようだから」

「スマホの画面とか見ようとするなよ、プライバシーの侵害だろ」

「ガラケーじゃないからどんなものか気になったのよ。でも、誤解させてしまったことは謝るわ。大丈夫、貴方のことなんか毛ほども興味はないから」

「やめろよ、まるで俺が自意識過剰みたいになるでしょ」

「違うの？」

「違うわ」

お前は何を言ってるんだという視線が俺に向けられていた。

べ、別にエッチなサイトとか見てた訳じゃないけど、人に見られるかなと思ったら焦るでしょうが！

とはいえ、気不味さを払拭するべく別の話題を振られれば。

「雪ノ下」

「何かしら」

「そ、その……っ、付き合ってくれないか？」

「……は？」

ふ、振り方間違えたー！

日曜日、鬱陶しいくらい晴天だった。

今日は雪ノ下と出かけることになっていた。

時刻は10時、待ち合わせ場所で書籍化するであろうネット小説を読む。

書籍化されたら無料で見れなくなるから今のうちにPDF保存しとこ、まあ買うんですけどね。

書籍化すると加筆修正されて面白くなったりするから、でもアニメはダメな場合もあるので注意が必要だ。

「お待たせ」

涼やかな風を引き連れて、雪ノ下が歩いてくる。

リボンの付いた麦わら帽子、ノースリーブの白いワンピース、そして何故か猫のトートバッグ。

うん、トートバッグの癖が強いんじゃない。

あと、言ったら怒られそうだけどエロゲヒロインみたいなファッションしてんなあ。

「今来たところだ」

「そう、10分も待ってたのにそういう事を言うのね」

「お前、どこかで見てたのかよ。まあ、常套句って奴だ。ほら」

「何かしら、切符？」

「まあ、付き合わせるんだし電車代くらい出すさ」

「そういうの困るわ……これを弱みに何かしてきそうじゃない」

「しねえーよー！」

コイツはもう、たまに人が優しくすると捻くれた対応しやがって。もう知らねとばかりに改札口へと向かう。

雪ノ下も慌てた様子で追いかけてきた。

今日の目的地は高校生がデートスポットとして使うみんな大好き東京BAYららぽーとである。

船橋の近くだし千葉じゃ、とか言っではいけない。

勘のいいガキは嫌いだよ、東京デイズリゾートだって千葉だろう、つまりそういうことだ。

そう、今日は俺と雪ノ下が付き合っって最初のデート……ではなく、買い物に付き合っってほしいというお願いの下、普通に由比ヶ浜の誕生日プレゼントを買いに来たのだ。

毎年買っってたから、誕生日覚えていたのだ。

アイツ、誕生日忘れると機嫌が悪くなるからな。

癖になっってたんだ、誕生日プレゼント渡すの……とまあ、そういう訳だ。

圧縮言語過ぎて、雪ノ下に怪訝そうな顔をされたが俺は嫌われていない。

シヨップピングモールまで来て、案内板を見ながら雪ノ下と何を買うか考える。

「驚いたわ……かなり広いのね」

「効率重視で回るべきだな、俺はこつちを回るから」

「ええ、では私は反対側を受け持つわ」

そう言えば、前回は小町もいたっけと思いつく。

まあ、小町がいなければ俺達の性格上こうなるよなど二手に分かれる。

確か此処らへんにと思い出しながら店を探すが、時間軸が違うからか店の種類が違った。

なので順繰りに回って由比ヶ浜の趣味に合う物を探すことにした。じつと商品を見つめていると、店員さんが寄ってくる。

だが、熟練のボッチである俺は気配察知A+なので、商品を置いてすつと離脱する。

八幡はクールに去るぜ、別に砂漠で油田を探したりはしない。

これは戦略的な撤退である、逃げるんだよお〜！

「チツ、これだから店員は……ボッチの話し掛けんなオーラを感じ取れよ」

奴らは生まれながらの陽キャであるので、人の気持が分からないの

である。

陽キヤは陰キヤの気持ちに分からないのだ。

何店舗か回って幾つか小物を買った。

こういうのは質より量だ、細々とした安い物を何点かあげれば取り敢えずヒットする。

由比ヶ浜の趣味は把握してるから、期待値は高いはずだ。

ぐるりと回っていると、いつの間にか俺は入り口に向かっていった。

おっと、どうやら折返してしまったようだ、このまま進むとどこかで雪ノ下と合流かもしれないな。

そう思っで見渡すと、いた。

真剣な目でぬいぐるみをぐにぐにしている姿が見える。

縫い目や目元、爪先などを凝視して、まるでなんでも鑑定団のようだ。

いい仕事してますねー、みたいな感じ。

俺が真後ろにいるのに、全く気づいていない。

おいおい、どんだけ真剣なんだよ。

「雪ノ下」

「……スウー、何?」

「買い物は終わったか?俺は終わったが、それ買うの?」

「……まだよ」

「まあ、これだけあると目移りするからな、それで買うの?」

「何なのかしら、この分かってると言いたげなこの男に対する感情は、買わないわよ」

「羞恥心では?あと、本当にいいのか、待っててやるぞ」

「いいえ、これは殺意だわ……すぐ戻るわ」

殺意の波動に目覚めんで下さい。

まあ、ニヤニヤしたのは確かなので煽りはしないでくださいね。

雪ノ下に付き添う形で買い物を継続することとなった。

「参考までに聞きたいのだけど、どういった物を買ったの?」

「まあ、小物を数点だな」

「この男、数打てば当たると質より量を取ったようね。いいわ、私は量

より質にするから」

「よくお見通しで。じゃあ俺は不審かられるから、あそこで座ってるわ」

「待ちなさい、私のセンスに任せるつもり？ 自慢じゃないけど、私は一般の女子高生とは異なる価値基準を持つてるのよ」

「何だお前、免罪体質か何かなの？ 確かに孤独な人間かもしれないけど、どこの社会に孤独じゃない人間はいないからって、それ言われてるから」

「貴方は何を言ってるの？」

つまり、俺は向いてない。

人には向き不向きがあるので、付き添う形で買い物をするつもりだったが女子とカップルしかいない店に関しては休ませて貰う。

そういう事を言ってるんだぞ。

「あつ、ちよつと」

そう思っただけを返したら、不意につんのめった。

雪ノ下が、シャツの裾を掴んでいたからだ。

振り向けば、サツと裾から手を離して視線を反らす。

いや、バレてるからねお前。

「その……より良い物を選ぶためには異なる視点から評価するべきだと思うの」

「ふむ、一理ある」

「あと……そう、相手に対して適さない物を渡した場合の責任を分散することでリスクヘッジを取ったほうがいいわ。うん、比企谷くんのプレゼントが全滅するかもだし」

「ふむ、それで」

「だから……一緒、あついや、手伝っ……じゃなくて、助言というか……えつと、どうしよう？」

「聞いちゃったよこの人、一緒に見れば良いんだろ。ほら、行くぞ」

流星に察しの悪い奴でも何が言いたいか気付けるような態度だった。

スカートの裾を握りしめてチラチラ見ながら聞いてくるのはズル

いと思うの。

俺の心情は何してんのだけど、周りからの視線は何でわかんないんだよ、鈍感系主人公かよみたいな圧があるからね。

これ、わざとやってるなら悪女だよ、逃げ場なくしてくるんだもん。

こういうの分かっててやるのが陽乃さんなんだが、コイツは素でやってんだろなあ……。。

「そ、そう……」

「お前、俺と一緒に嫌じゃないのかよ？」

「別に構わないわ、勘違いされても困らないもの」

「そうだな、周りに知り合いいないしな」

おいおい、口と行動が一致してないんだが身体は正直なようだな。

彼女の付き添いです、みたいな感じで側にいると世の中というのはチヨロいのか、店員達の警戒が解かれていた。

これ、多分雪ノ下から離れた瞬間から頭に！マークを付けた店員に警戒されるんだろうな。

レッドアラートになつて仲間と呼ばれるんだわ、間違いない。

雪ノ下は店員が話しかけても結構ですと言いながら、縦に横にと入った服屋で引つ張っていた。

いやセンス！服ってデザインであつて、耐久性で求めるものじゃないから！

「なあ、頑丈さはいらなと思うぞ。アイツ、防御力とか求めてないからな。どうする、スポーツ用品店で丈夫そうなのでも買うか？」

「仕方ないじゃない、材質や縫製ぐらいいしか判断出来ないのよ。私、由比ヶ浜さんの趣味とか知らなかったのね」

「アイツ、お菓子作りが趣味だから調理器具とか喜ぶぞ。あと抜け感とかフリルとかそういうのも好きだな」

「……えっ、なんでそんなに詳しいのかしら。あと、あれでお菓子作りが趣味なの？」

「あつ、あー……うん、まあ、メシマズだったな。いや、いつかは上手くなるんだよ、あと知ってるのは前に本人から聞いたからだ」

そうだった、まだメシマズ属性だった。

あと本人に聞いたのは本当だ、未来の由比ヶ浜だけどな。

なんだろう、シユタゲかな？俺だけタイムリープしてね？

「じゃあ、料理グッズを見に行きます……見に行け？」

「なんで命令形になんだよ、お前の日本語可笑しいかよ」

「何故かこの状況に適切かなと、適切よね？」

「知らねえよ、ほら行くぞ」

なんか似たような事をしたとデジャブを感じながら、キッチン雑

貨店に入る。

ほお、フツ素加工のフライパンかとか、たこ焼きセット！すごい、と
テンションを上げていると雪ノ下に呼ばれた。

「比企谷くん、こっち」

呼ばれて言ってみるとエプロン姿の雪ノ下がいた。

黒い生地に薄手のエプロン、胸元には猫の足跡があしらわれてお
り、猫が好きなんだと思う。

俺が来たのを確認すると、くるりと一回転する。

それから背中やらサイドやらを見せながら、どう？どう？と何度も
確認してきた。

「どうかしら？」

「んんー、あー、似合ってるよ」

「……そう、でも聞きたいのは由比ヶ浜さんについてことなのだけれど」
「由比ヶ浜なら、ふわふわぽわぽわゆるゆるもぐもぐゆびゆびみたい
なのが良いだろ」

「なんか後半おかしくないかしら？」

そう言ってエプロンを外しながら、どうしようかしらと呟く雪ノ
下。

前屈みになっているからか、白い首とうなじが見えて、なんか八幡
ドキドキする。

「この辺りかしら」

「ああ、良いんじゃないか？」

「買ってくるわ」

そう言って、自分がさっきまで試着していたエプロンと一緒にレジ
に向かっていく雪ノ下。

ちやつかり自分の買い物もしてるよな、あとやっぱ猫好きだな。

結構並んでいたのであっちにいると雪ノ下に伝えて暇潰しがたら
ゲームセンターに寄った。

うお、懐かしいとかこんな昔からあったのかとか感慨深いものが
あった。

あつ、パンさんあるじゃん。

あのさあ……ウチ、パンさんあるんだけどヤツてかない？と言わんばかりの挑戦的なクレイニングゲームである。

試しに100円入れてみてアームの強さ、可動域、開き幅を確認する。

ふむなるほど、アームは結構不自由だし、確率機ではなさそうだ。

あれ、こんなに簡単そうだったけど言わんばかりにパンさんぬいぐるみには引つ掛けられる箇所があった。

うーん、過去だからもしかして対策されてないとかだろうか？

そう言えば昔は箱型とか上部のサイドに差し込んだりとか出来たっけ、今じゃテープで防がれてるけどな。

パンさんの重心は首がやや重い感じか、タグのところに差し込んでもいいが、少し遠い。

コレは五回か六回は必要だな。

一回お得な五百円を入れてやるか。

取り敢えず店員の位置を確認して、正面と真横から確認しておくか。

「うーん、何回やっても出来ないな」

「……………」

取り敢えず、一回目のチャレンジでまずはぬいぐるみを少し近づけた。

これは、結構アーム強めだ。店員のサポートはいらんかもしれん。

さあ、五百円分入れようか。

「何してるの？」

「つと、雪ノ下か。脅かすんじゃないやねえよ、クレイニングゲームだ」

「くれーんげーむ？ふーん、そ、それっておもしろいのかしら？」

「やりたいのか？」

「結構よ、別にゲームがしたいわけじゃないの」

あつ、ぬいぐるみが欲しいということな。

副音が聞こえるかのようだ。

「まあ、やったところで取れないだろうけどな」

「はあ？比企谷くん、聞き捨てならないわ。私を見くびっているのかしら」

「ライン超え、はええよ。なんなの、沸点低くない？」

「いい、出来るかどうかじゃないのやるのよ」

「沸点低いどころか熱々だよ、熱血じゃん」

「こういうゲームは取れるまで課金すればいいのよ」

「遂には大人の力を使い始めた。財力しか勝たん」

そして雪ノ下の挑戦が始まった。

あー、聞こえてくるはプロジェクトXの音楽が聞こえてくるわ。

「あつ」

「なっ、嘘」

「くっ、また」

「よし……あうっ」

「いけ……ないっ」

「おかしいわ、なんで外れるの、不正があるとしたか」

齧りつくように雪ノ下がクレインゲームをしていた。

コイツ、絶対ギャンブルとか向いてないよ。

ざわざわしながら後ろで店員さんを見ていて思った。

「下手くそだな」

「なっ、そこまで言うなら相当上手いんでしようねえ」

「うん、まあ、上手いのかな？」

選手交代、俺はまず百円玉を十枚用意した。

行くぞ雪ノ下、百円玉の貯蔵は十分か！

「ちよつと位置調整しますねえ」

「あつ、えっ」

「ああ、ありがとうございます」

雪ノ下によって微妙に動いたパンさんは、店員のお姉さんによって出口ギリギリに寄せられた。

しかし、取りにくいように位置を変えらるとはあの店員難易度を優しくするフリをして普通レベルに調整していた。

簡単から普通レベルへの移行、俺じやなきや見逃しちゃうね。

まあ、首の位置を押し調整して、あとは重心を意識したら。

「店員さん、それってズルじゃない」

「開いた時に押す方法なんてあるのね」

「あつ、落ち、落ち、落ちないのね」

「首？そんなところ、あつ……」

ボトツと落ちるパンさん、今流れ変わったな。

ユニコーン流れたわ、勝ったなガハハ。

「ほら」

「貴方が取ったのだから貴方の物じゃない」

「俺はゲームがしたかっただけで景品は正直いらない、それに総額だとお前の方が使ってるだろ。いらなきや、捨てるだけだ」

「ぬいぐるみを捨てるなら神社に持ってかないとダメなのよ、そこまですうなら貰ってあげるわ」

仕方ねえなあ、みたいな感じの口調だったが雪ノ下は両手で抱きしめるようにギユツと持った。

腕を持つてちよこまかと動かしたり、顔をムニムニしたり、相当気に入ってる。

「おいおい、口と行動が一致してないんだが身体は正直なようだな。」

「まあ、お前パンさん好きだもんな。パンさんグッズ集めてたし」

「何で知ってるのかしら。まあ、気分が良いから気にしないわ。プライズ商品は自分で取るしかなくて困っていたのよ。ネットオークションも保存状態が気になって決心がつかなかったから、偶にはいい仕事をするわね。褒めてつかわすわ」

「お前何様だよ」

「部長様だけれども、貴方の上司よ」

「これが上司に手柄を取られる社会の縮図か。」

まあ、喜んでもらえたなら買い物に付き合ってもらったお礼になるから良かったわ。

「パンダのパンさん、原題は『ハロー、Mr. パンダ』改題前のタイトルは——」

「うん」

「もともとはアメリカの生物学者だったランド・マツキントツシュが――」

「……うん」

「西洋と東洋の文化双方のメタファーを込めながらもきちんと一つの物語に落とし込んで――」

「……うん」

「翻訳もなかなかの出来栄えだけれど、やっぱり原書で読むのお勧めね」

「……うん」

いつ終わるんだろ、時とか飛ばせないかな。

なに、終わらないんだろうか。

終わらない終わり、つまりこれはレクイエムということ？

もしかして、スタンド攻撃受けてんの俺？

「ねえ聞いているの比企谷くん」

「ああ、うん、愛着があるんだよな。知ってる知ってる」

「まあ、だからその、えっと……」

雪ノ下は恥ずかしそうに、ぼふつとぬいぐるみに顔をうずめた。

ちようど、俺の目の前にパンさんが掴まれた状態にいる。

そのパンさんの横からチラツと、赤くなつた雪ノ下が隠れるようにして此方を見ていた。

「あのね……取って貰えて……その……」

「あれれ〜おかしいな、どうしてこんなところで雪乃ちゃんに会うのかな？」

そんな雪ノ下との背後から、どこかで聞いたことのあるような声が聞こえた。

おっと、そのへんの高校生なら通用するかもしれないが、俺は指名客にはならないんでどうして勝てなかったか明日までに考えて下さい

聞き覚えのあるような声が聞こえた。

その声の主を見つけて俺は絶句する。

艶やかな黒髪、透き通るような白い肌、人懐っこい笑み、目の前にいるのはとんでもない美人だった。

それは人と言うにはあまりにも美しすぎた。大きく、柔らかく、重く、そして豊満すぎた。それは正に巨乳だった。

「……………」

「どうした雪ノ下、悔しそうにして」

「所詮、男というのは無駄な物に目を奪われる愚かな生き物なんだわ」「本当にどうした雪ノ下」

まあ、誰かと言えば雪ノ下雪乃のお姉ちゃんである、陽乃さんだ。

うわあ、俺、この人苦手なんだよね。

卒業生なのに、ちよいちよい学校来てき。

優等生は過去の栄光で、こんなのパリピだよ。

あーもうめちやくちやだよ、何度平塚先生と頭を悩ましたことか。

しかも手続きをして不審者扱い出来ない用意周到さである。

まあ、そうならないように未来を改変……出来る気しないわ。

「こんなところでどうしたの？あつ、デートか！デートだなっ！このこのっ！」

「……………」

雪ノ下が、からかわれ始める。

鬱陶しながらも仕方ないという雰囲気じゃなくて、マジで鬱陶しいという表情だ。

ああ、なるほど、この頃の雪ノ下はツンツンしてるから姉妹仲が冷え切ってるわけだ。

不味いですよ、嘘、姉の好感度低すぎっ。

「ねえねえ、あれ雪乃ちゃんの彼氏？彼氏？」

「違うわ、同級生よ」

「そうだぞ、彼氏だぞ」

「まったま……えっ？」

うお、雪ノ下が俺を睨みつけている。

姉の方も笑顔が固まって俺を凝視していた。

同時に此方に顔を向けるとか、穏やかじゃないですねえ。

普通にホラーで怖いんだけど。

「あれ、可笑しいな？聞き間違いかな？もう一回言っただけ、今、なんて言っただのかな？」

「何も言っただけじゃないけど」

「別に怒ってるとかじゃないの。初対面だし、失礼がないように聞き直したいの。貴方の言葉を聞き取れなかったのは私の落ち度だから、もう一度言ってもらえるかな？雪乃ちゃんとの関係について」

「何も言っただけじゃない」

嘘だ！とか言われない？言われそう！やだ、なんで詰め寄ってくるんだよ、小粋なジョークじゃない。

こわいこわい、耐えられない。雪乃さん、ヘルプ、ヘルプですよ！

「か、彼氏じゃ……」

「雪ノ下ア！」

おま、ちよ、待て待て待て、お前その反応やめろ！姉ちゃんの目、目が見開いたから！おま、ふざけんな、殺されんだろ！具体的に就職先に全部圧力かけて就職できなくするだろ、出来るんだからこの人の人脈と金と美貌さえあつたら、やめてよ！

「雪乃ちゃん。あ、パンダのパンさんじゃない」

「触らないで」

「……わ、わあびつくりした。そ、そっか彼氏さんからのプレゼントだったのかな」

「姉さん、もういいかしら。特に用がないなら私達はもう行くけれど」
えー、そうなのと自然な動きで陽乃さんが距離を詰める。

しかし、俺も一端なので格ゲーマー、距離を取った。
おいイ？気配で間合いを読むのは常識的基本ですよ。
粘着がいつまでたってもミスって粘着で挽回して返上しようとしてるが、回避は不可避。

カカロットと指差しで突き刺してくるが、連続直方でカカロットと回避する。

やっぱりブロントさんは、無敵って分かんたね。

えいえいと指で頬を突こうとしてくる陽乃さんからバックステツプで逃げる俺がいた。

おっと、頭の中にブロントさんがいた気がする。

不正なユニツトが接続しようとしてきたからバグったかな。

てかいい匂いするなおい、シャンプーとボディソープ高いの使ってるのか。

「ほれほれ言っちゃえよ。いつから付き合ってたんだよ」

揺れる、右左右左上上下下、くそ熟練の格ゲーマーである俺でなきや見逃しちゃうね。次の一瞬を見逃せない、それほどの――。

「比企谷くん」

「……はい」

「どこを見ているの、私の目を見なさい」

「……………」

やべえ、地を這うような低い声が聞こえる。

これホラーで振り向いちやいけないあれと一緒にだよ。

比企谷、上、上、って観客席から声が聞こえるやつだよ。

雪ノ下の顔が見れない、見たら死ぬってわかってるからな。

「姉さんもいい加減にしてちょうだい」

「あつ、ごめん、ちよつと調子に乗りすぎたかも」

そう言つて陽乃さんは腕を胸の下に入れて組んだ。

組んだ腕の上には胸がずっしりと乗っている。

姉妹仲が悪いのはこういう無意識なマウン트의せいではないでしょうか。

いや、どこのマウントとは言わないけどね。

俺、それ、ホライゾンでしか見たこと無いよ、やっぱり姉キャラはエロいのか。

「ねえねえ、私、今、嫌がられることしちゃったかな？」

「そうですね、不用意に近付かれると嫌ですね。プロの独身なんで、財産目当てか警戒します」

「プロなんだ」

「おっと、そのへんの高校生なら通用するかもしれませんが、俺は指名客にはならないんでどうして勝てなかったか明日までに考えて下さい」

「やだ、比企谷くん、おもしろーい」

ハハハと笑う陽乃、しかしその目はキャバ嬢の如く澄み切って俯瞰で見ている。

貼り付けられた笑顔、ヒューキャバクラ通いしていた俺じやなきや見逃しちゃうね。

そうなんだよ、完璧なこの人は雪ノ下と真逆の性格をしている。

外面は誰かの理想で、理想的すぎて憧憬を抱かせて、そして誰にも理解されないし、させない。

いつか天に立つとか言って親父の会社乗っ取ったりしそうだよなこの人。

でもね、と声音がガラリと変わって真剣な物になる。

「せっかくの青春だけど、ハメ外しちゃダメよ」

そのまま踵を返し、すれ違う際に雪ノ下に何やら囁く。

「……別に、姉さんには関係のないことよ」

「そっか、そうだね。お姉ちゃんには関係ないね」

声は聞き取れなかったが、あの母親のことなんだろうな。

一人暮らしのこととか、そんなんだろ。

高校生で一人暮らしとかラノベの世界の住人かよ。

陽乃さんは向き直って、ピースを作って目元に持ってきて、うわぐらビアとかにありそうみたいなポーズで快活な笑顔を向けてきた。

「比企谷くん、雪乃ちゃんの彼氏になったら改めてお茶、行こうね。じゃ、またね！」

「ああ、そいつは素敵だな。本当に素敵だ」

そして姉の頭を射殺する雪ノ下……そうなっても可笑しくなくらい睨みつけていた。

まあ、そんなこともなく最後にはあつと華やぐような笑顔を浮かべてばいばいと去っていった。

うん、相変わらずコミュ力つよつよである、何なのペルソナ使いなの？

「相変わらず、お前の姉ちゃんすげえな……」

「姉に会った人は……どこかで会ったことがあるの？」

「あつ、いや、あれだ。どこかで会ったことがあるような距離感だなと」

「ええ。容姿端麗、成績最高、文武両道、多芸多才、およそ人間として完璧な存在もいないでしょう」

「正直、あの外面は苦手だ」

「……驚いたわ。腐った目でも、いえ腐ってるからこそ見抜けるのかしら」

「ハハ、ワロス。DHA豊富そうだな」

知ってる知ってる。

お前の知らない姉ちゃんをお前の知らない俺が知ってるんだわ。

根深い家庭内の溝とかもな。

まあ、拗らせてるからなコイツ。

「あの人にとってお前は過去でも、お前にとっては未来なんだ。未来なら変えられるんだぞ」

「なんだか、含蓄のある言葉ね」

「因みに、今のはニチアサの仮面ライダーの台詞だ」

「私の感動を返してちょうだい」

それから俺達は一言も話すことなく家路へと着いた。

俺から話しかけることはないし、雪ノ下から話しかけることもなかった。

「私、こっちだから」

「ああ。じゃあ」

そう答えて、俺は駅を後にしようとした。

「今日は楽しかったわ、それじゃ」

思わず自分の耳を疑い、振り向いたが雪ノ下はもう歩きだしている。

結局、それは聞き間違いなのかどうか俺に確かめる術はなかった。

だが断る！この比企谷八幡が最も好きなことは助けてほしいという材木座にNOと言ってやることだ

サバンナ、それは弱肉強食の世界。

それは教室にもあり、一軍リア充とオタク集団は巨大二派閥でサバンナで言うところの動物の群れだ。

そんな彼らは早く来すぎた時、僕の仲間はまだかなとチラチラ教室を見る。

髪を掻き上げたり、携帯をイジったりしたフリして見るのだ。

自分の群れ以外とは話さず、単独行動はせず、排他的で差別的だ。つまり、逆説的にボッチは博愛主義者。

一人で会話し、単独行動が出来、全てを受け入れ差別しない。

誰かを愛さないと全てを愛しているに等しい、マザー比企谷と呼ばれるのも時間の問題だろ。

サバンナの言えば孤高の王、つまりはぐれライオンである。

ノマド的な存在、それがボッチだ。

ボッチは帝王、つまりキング・クリムゾンが使えるのだ。

そんなわけでいつの間にか授業が終わり、放課後だった。

俺はいつの間にか授業を終えていた、何を言ってるのか分からないと思う俺も分からない。

超スピードとか超能力とかじゃ、断じて無い。

最も恐ろしい物の片鱗を味わったぜ、ポルナレフ状態だわ。

奉仕部の部室に行くと、何やら由比ヶ浜が既にいた。

扉の前をいつたりきたり、爪先立ちをしたかと思えば着地、また爪先立ち。

急にしゃがんだと思えば頭を抱えて唸る、そして立ち上がってウロウロ、ループって怖くね。

何だお前、ループの悪魔かよ！

「何してんだ？」

「うひゃあー……あ、ヒ、ヒッキー！や、やーその、なに？空気が美味

「しいよね」

「はあ？」

「……………」

「……………」

二人して沈黙。

視線が合うと由比ヶ浜が目を逸し、俺も気不味くて目を逸す。

おい、やめろよ、なんか恥ずかしいだろ。

教室に入るのに何を躊躇ってと思い至り、あつあれかと休日の事を思い出した。

いや、ちゃんと説明したよな。

「ほら、行くぞ」

「あつ…………」

左手で教室のドアを開け、右手で引つ張って立ち往生している由比ヶ浜を無理矢理中に入れる。

全く、雪ノ下と関わるのが気不味かったと見える、そういうの分かるんだからな。

大きな音に反応して本を呼んでいた雪ノ下がパツと此方を見る。

「由比ヶ浜さん」

「や、やほー。ゆきのん…………」

「もう、いつまでもそんなところにいないで入りなさい。部活、始まつてるわ」

「あ、うん…………、ごめん」

おい、その言い方だと家出した子供が帰ってきた時の母ちゃんじゃん。

由比ヶ浜は弱々しく手をひらひら振って、俺の方をチラチラ見てきた。

なんだ、お前もサバンナ動物よろしく群れからはぐれた草食動物か？

「ひ、ヒツキーあのね…………」

「比企谷くん」

「なんだよ」

「うう……そろそろ、ねっ」

「なんだよ?」

「比企谷くん、いつまで彼女の腕に触ってるのかしら? 犯罪よ」

雪ノ下の視線は俺の右手、つまりは由比ヶ浜の腕に注がれていた。

……スウー、覚悟はできたか俺は出来てる。

「すみませんでした!」

「あつ、あつ、うん、大丈夫だよ。うん、気にしないで」

「比企谷くん……」

それ、すつごい気にするやつじゃーん。

その比企谷くんは何やってんだあみたいなニュアンスを孕んでいた。

いつもなら携帯を弄っている由比ヶ浜は挙動不審だった。

椅子に浅く座ったかと思えば少し立ち上がって、また座ろうとして。

何だお前、大物歌手かよ、座る座る詐欺かよとか思ってしまった。

雪ノ下は意識ないと逆に意識しようとし、無意識を意識するという意識で無意識になろうと意識のゲシユタルト崩壊が起きてきた。

簡単に言うとは領域展開してるとでも思えば良いんじゃないでしょうか、意識が無限になりすぎて静止してるんだわ、たぶん。

張り詰めた弓並みの緊張感のある沈黙があった。

カチカチと時計の秒針だけが耳に残る。

もう一時間はたっただろうか、そう思って時計を見ると3分しか経ってなかった。

どういうことだよ、この部室はいつから精神と時の部屋になったんだよ、こんなんじゃないや無駄にマッチョになっちゃうよ。

スピードが足りないゴリゴリマッチョメンの八幡になっちゃうわ。

「由比ヶ浜さん」

バンと雪ノ下が本を閉じながら口火を切った。

対する由比ヶ浜は腰に手を置き、何やら身構える。

深く呼吸する雪ノ下に身体の向きはそのままに視線を周囲に動か

しまくる由比ヶ浜。

なんだろ、ハンターハンターのヒソカ対クロロかな。

こういう感じの構図と緊張感、見たことあるわ。

「ゆ、ゆきのん。ヒツキーのことで話が、あるんだよね」

「ええ、私達のことについて」

雪ノ下が言い掛けた言葉をキャンセルするように食い気味に由比ヶ浜が割り込む。

まるで念能力の説明をすることで発動する念能力を阻止するかのムーブだ。

「や、やー、あたしのことなら全然気にしないでいいのに。や、そりや驚いたとかびっくりしたとかあるけどお祝いとか祝福とか」

「よくわかったわね。そのお祝いをきちんとしたかったの」

「……お、お祝い」

「なんでえ!?!」

由比ヶ浜はプルプルしながらポケットから財布を取り出し現金を握った。

おい、現金を出すのはやめろ。

「よ、よく分からないのだけど。私、由比ヶ浜さんには感謝しているのよ。だから、気持ちの形にしてくれて」

「や、やだなー!ぎや、逆に私の方が……ご祝儀……」

「だから、リアルマネーを出すのはやめろお!?!」

盛大に噛み合ってなかった。

お互いの空気を読み、読みすぎて意味不明な飛躍をしているレベルだ。

配管工がイヤツフウウウと空を飛ぶレベル、なんで空を飛んでんだよ馬鹿野郎、髭剃るぞ。

「あの……ゆき」

「だから、ゆい」

「……どうぞ」

「いえ、そちらから」

「いやいや、ゆきのんから」

「結構よ、先に由比ヶ浜さんから」

俺やるよ、俺やるよ、みたいに譲りあいが始まっていた。

じゃあ俺がって言えば良いのか、どうぞどうぞされても話すこと無いけど。

そんな微妙な空気を壊すように、ダンダン！とノックが響く。

どうということだ、観客が乱入したのか！たぶん、それは念能力で操られている。

まあ、ここは野蛮人の聖地ではないので普通に来客だと思う。

ふしゆるると荒い息遣い、開けたくないわー。

静かな部室に木霊する呼吸音、誰だよドアの前で全集中の呼吸してるの、霹靂一閃でもするのか？

教室のドアに手を掛けると、ぬつとドアが一人でに開け放たれた。

入ってくる太い手、俺は瞬時に護身術を習った前世の記憶が蘇る。

警察官に仕事の一環で受けた研修だ、テロ対策で習ったやつ。

腕を掴んで内側に捻り、ついでに体育の授業で習った足払いをしていた。

「ぬおおおおお!？」

「その声は!？」

「フツ、強くなったな。それでいい、ジャック！ボスは二人もいらな
い」

「いや、誰だよ」

そこにいたのは床に転がる材木座だった。

あと、お前は誰目線で話しているんだ。

「ハチエモン、聞いてくれよ！あいつら酷いんだよ！」

「悪いな材木座、この部室は三人用なんだ。なっ、ジャイアン」

「どうして私を見るの？」

「聞いて欲しいなり、聞いて欲しいなり！」

「コロ助、お前コロ助じゃないか!？」

「ごんぎつねを思い出した、どうしてゴンはすぐ死んでまうの。

いや、っっていうか帰れよ。

「はあ……本当に残念だが、おふぎけは終わりなんだよ材木座。おふ

「ぎげはここでお終いなんだ」

「ハハハ、何言ってるんだいハチエモン、そんなこと言つて」

「早く言えー!」

どうせまた厄介事なんだろうと、着席を促す。

いそいそと移動して、テーブルを挟んで俺達奉仕部と材木座が対面した。

「どこから話そうか、そうあれは今から」

「そういうの良いから簡潔に言いなさい」

「デュフ、我がゲームシナリオライターに転向したことは知つてると思ふんだが」

「知らんし!」

「ばふんばふん、まあ人知れずという奴だ。で、そんな我は実は嫉妬されてネットで書き込みして煽つたら、どうも同じ学校らしくて、遊戯部と闇のデュエルをすることになった」

「人知れずってどういうこと? どうしてネットに自分の個人情報に乗せるの? 闇のデュエルって何?」

怒涛の雪ノ下のツツコミに、ぬぬぬと言って材木座が黙る。

もうやめて、材木座のライフはもうゼロよ!

「つまり、ゲーム同好会ということか。げんしけんみたいなものだろ」

「だいたいあってる」

「俺達に手伝えってことか?」

「いったいいつから勝負すると錯覚した?」

「なん……だと……」

「いい方法を思いついた、カードを海に捨てることだ! くらい勝負をなかつたことにしてほしい。それか我が確実に勝てるように賭ケグルイかカイジばりのイカサマをして欲しい」

「たぶん、クズ選手権があったらお前がぶつちきりだとおもうよ。お前がナンバーワンだつて言えるわ」

「褒めるなよ、ふふふ、まあそれほどもある」

てへへと笑う材木座を椅子で殴りたくなる衝動に目覚めそうになる。

殺意の波動に目覚めそう、何いってんだお前。

「話は聞かせてもらった」

「ということとはハチエモン」

「だが断る！この比企谷八幡が最も好きなことは助けてほしいという材木座にNOと言ってやることだ」

「随分限定的だわ」

「むむむ、あれ？さっきの褒めてないよね？ねえ？」

そこに気づくとは天才か、でも由比ヶ浜だけなんかラグがありますね。

誰だよ、攘夷戦争ってなんだよ、参加してねえよ。いや、確かに目は腐ってるかも知れないけどね、そこしか共通点無いよね

材木座は暫く黙っていた。

自分の行動に反省したのかも知れない。

「八幡はさあ……」

思いつめたような、そんな声が俺を呼ぶ。

おい、ちよつとナイーブなヒロイン面するなよ。

お前、いつから負けヒロインになったんだよ。

「昔の、あの頃の貴様はもつと滾っていた。その強靱さと単身奇襲を仕掛ける勇猛さ、かつて敵味方からその夜叉の如き姿を恐れられていた。あの頃の、刀一本で攘夷戦争に参加していたお前はどこに行ったんだ！」

「誰だよ、攘夷戦争ってなんだよ、参加してねえよ。いや、確かに目は腐ってるかも知れないけどね、そこしか共通点無いよね」

「フツ、そうやってお前は女子供ときゃうふふしてればよい。所詮貴様もまやかしの日常で微睡む戦うことを忘れた戦士。俺がこの後どうするかだって？俺は、ただ壊すだけだ……この腐った世界を」

「急に何いってんの、ねえ、何いってんの？きゃうふふ出来るよ。うなハーレムは現実にはないんだよ、ジャンプの世界だけなんだよ。というか彼女とかいないししてねえぞ」

「……彼女？えっ、あ、あれー？」

誰もきゃうふふしてないわ。

いや、たしかに傍から見たら男女比は偏ってるけど、それ吹奏楽部の男子に言えんの？

響いちやってユーフォニアしてるアイツらに言えんの？肩身狭そうだけ。

「はむん、奉仕部など片腹痛いわ！目の前の人間一人救えず何が奉仕

か！」

「あつ……」

「誰も救えぬのだろう。綺麗事を並べるだけで、行動で我に示してみろ！」

「おいおい、死んだわコイツ」

もうすぐ夏も本番なのに、アイスピックで地球をカチ割ったらちようどキレイに割れるんじゃないかってくらい冷え切った部室だった。

寒いね、惑星規模かよ、凍てつく波動かな。

「……………そう、では証明してあげましょう」

雪ノ下の凍てついた視線が材木座を射抜いた。

ひいという悲鳴、ほら見ろどこがきやつきやうふふだ、結構リアルに怖いからな。

遊戯部の部室は奉仕部の部室と同じく特別棟にあった。

色々な学校はあれど、今考えるとおかしな部活が多いよなこの学校。

オカルト研究部とかSOS団とか古典部があっても、俺は驚かないよ。

材木座を先頭に、古典RPGよろしく、流れて俺達は一列についてきていた。

「じゃあ、行くか……」

なんだかんだでここまで来ていた。

うむ、と偉そうにふんぞり返る材木座、無表情の雪ノ下、居心地悪そうな由比ヶ浜。

一番後方の俺はまるで引率の先生のようなだ、わあ材木座くん楽しそう、みたいなね。

そんなパーティーの三番目、由比ヶ浜が不意に振り返る。

首だけを後ろに傾げて、斜に構えて、なにそれシャフ度なのとツツコミたい状態だ。

「ねえ、ヒッキー彼女いないの？」

発言までも斜に構えた、英語で言うならシニカル、すごい皮肉な質

問だった。

逆に、いるように見えますか？

「いないけど」

「けど？作ろうと思っただら作れるってこと？」

追撃も皮肉たっぷりに聞こえる、そんなつもりじゃないよな由比ヶ浜。

悪意のない言葉ほど人を傷付けるんだぞお。

「愚問よ、由比ヶ浜さん。この男にまともな男女交際なんて不可能だわ」

「ハッ！ライン越えだぞお前。いいか俺は人間として自立してる、自立してるということは完璧な存在、つまり究極生命体だから彼女とかいらないで自己完結してるわけだ。別に出来ないんじゃない、作らないんだ」

「比企谷くん、悪魔の証明って知ってるかしら？ググるといいわよ、ID真っ赤になる前に」

「してない」

お前、どこでそんなサブカルネタ仕込んだ。

あれか、妙にタイムマシンのついて質問した時期があったが、もしかしてゲームやったのか？

「でもさ、ゆきのんと出かけてたじゃん？あれは？」

「由比ヶ浜さん、世の中には言ってる悪いことと言うべきでないことがあるのよ」

「どうでもいいけど、もういいか？材木座がチラチラ見てんだけど、後ろ何回も振り返って着いてきているか気にしてるんだけど」

「そっかー、うん、そっか……あ、ごめんごめん、じゃあ行こうか」

焦ったように由比ヶ浜は扉に駆け寄り、上機嫌な様子でトントンと扉を叩いた。

さて、俺は鈍感系主人公、つまりはラノベの主人公ではないので男女の機敏に敏いのである。

つまり、これはあれだ、部活内にカップルがいると気不味いなど、そういうアレだ、八幡は詳しいんだ。

「私は来た！ 私は見た！ ならば次は勝つだけのこと」

「おい、どこの動けるデブだよ」

戸を開けばそこには積まれた箱の山、本、パッケージ。

まるでそれはビブリオマニアの書齋や古い街のおもちや屋さんのよう。

あつ、TRPGの背景で見たとでも感想が漏れそうなそんな有様だ。

「ここ、ユーギ部じゃないの？なんかゲームっぽくない」

「そうかしら、私は此方のほうがしつくりくるけど、由比ヶ浜さんがイメージしてるのはピコピコの方よね？」

「ピコピコって、おばあちゃんかよお前」

「だ、だって、ピコピコ言うじゃない」

私、不満ですと顔に朱色を差して雪ノ下が俺を睨みつける。

悪いが事実だ、恥ずかしいだろうが甘んじて受け入れる。

「まあ、ゆきのんゲームやんなさそうだよねえ」

「由比ヶ浜さんはやるのかしら？」

「やるよ、スマブラでしょ、マリカでしょ、マリパとどう森、ポケモンとか」

「す、すごい」

雪ノ下が慄いていた。

戦慄しているところ悪いが、全部同じメーカーで、みんなでワイワイやるゲームだ。

たぶん、コミュニケーションツールとしてやってるんだろうな。

まあ、俺はいつも一人でやってたけどね。

「あとFFとか。画面綺麗だし、超カッコいいよ！映画みたいで泣けるし、チョコボ可愛い」

「ペっ」

「えっ、なに、怖……」

材木座が唾を吐く仕草を見せる。

見せるだけだよな、仕草だけだよな？

全然喋らない不審者がキレだったので由比ヶ浜がビビっていた。

まあ、不審者だし仕方ない。

怯えた由比ヶ浜が俺の背中に隠れて、それに対して材木座が余計に苛ついて追い打ちを掛ける。

「にわかめー!」

「は、はあ!?意味分かんないんだけど!超ムカつくんですけど」

「やめとけ材木座、俺も昔は同じだったが今はライトユーザーにも優しくなった。そう、寛大になるのだ。まあ、新人女ライターに書かせるのはやっぱつれえわ……」

「お前は何を言ってるんだ?」

そのうち分かるさ、いまどのくらいまでシリーズ出てるんだろう。

まあ、どのシリーズも良いものだ。

ザナルカンドは見ただけで泣ける、生まれ変わっても魂に刻まれてるんだろうな、あの感動は……。

「どうした八幡、お前消えるのか?」

「すごく遠い目をしている」

「そんなことより部員はどこにいるのかしら」

一向に進まない材木座はリーダーの座を降ろされ、ガンガン行こうぜな雪ノ下が前に出る。

少し進むと声がする。

積み上げられた本や箱を回り込めば、男子が二人いた。

あー、たしか相模の弟と俺が色々と手伝わした奴、あと材木座となんだかんだ仲良くなった奴らだ。

そうかそうか、遊戯部ってコイツらいたのか、思い出したわ。

となると、この後の展開は脱衣大富豪だったなと流れるように記憶が蘇った。

「その黄色い上履き、貴様らライイエローか」

「いや、一年生ですけど」

「そこはマジレスするんじゃない!空気を読まんか!」

年下と分かったからか、強気に材木座が吠える。

お前、自分より弱そうな相手には態度大きくなるよな。

「何を遊んでいるの?」

「お、おいアレって」

「ああ、二年の雪ノ下先輩だ」

「な、なんだって……」

ガタツと片方が立ち上がり、片方がメガネをクイツとしながら驚いている。

マジかこいつ、結構有名人だったんだな。学年を越えて知られるとはまあ、可愛い先輩の名前とか俺も知ってたな、めぐり先輩とかめぐり先輩とかめぐり先輩とか、めぐり先輩しか知らねえじゃねえか！

「フハハハ！ 久しいな、昨日は随分と大口をネットで叩いていたが今更後悔しても遅いぞ。泣いて無様に謝ろうとも慈悲はない。我が人生の先輩として灸を据えてやろう！ じゃあ、先生方よろしくお願いします」

「すごい丸投げを見た」

「この男、自分の発言が恥ずかしくないのかしら？」

「ねえ、共感性羞恥って言葉知ってる？」

「う、うぬう……」

俺達の言葉の刃に、材木座はラオウのような呻き声を上げて崩れ落ちた。

メンタル弱っ！

遊戯王って、楽しいよね

「おい、さつき話してた人？うはー痛え」

「だろー、マジやべえよ」

wwとか草が生えてそうな嘲笑だった。

プークスクスでもいい、材木座は動揺していた。

「え、は、八幡。我、今、何か、変だったかな？」

「安心しろ、変なのはデフォルトだから」

「そうか、安心……あれ？」

いつか、変じゃなくなるといいな。

遊戯部員は秦野と相模と言った。

秦野は猫背気味の痩せ型、眼鏡はフレーム無しでシャープな感じだ。

相模は中学生みみたいな風貌の細型、眼鏡は丸みを帯びたレンズだ。覚える気がないのでメガネで判別することにした。

「まずうちさあ、格ゲーあるんだけど……やってかない？つて誘ったらしいじゃん。それだとやる前から勝負見えてるし他のことにしないか？」

「いや、そんな事は言っていないんですけど」

「淫夢かよ……」

我ながら無茶な要求をしていると思う。

サツカー選手に、磯野野球しようぜというようなものだからだ。

アドバンテージを失いたくはないだろう、だから難色を示された。領かない、これは緩やかな否定だ。

「よし分かった、この部屋にあるゲームをしよう。これだけあるしな」

「それならまあ」

「いいですけど」

控えめな返事、しかしメガネは二人共キラリと光った。

うむ、滲み出る自信、ゲームで負けるはずがないというスゴ味があるッ！

「けど、変える以上は何か見返りが無いと」

「じゃあ負けたら材木座が土下座でいいか。俺が責任を持って謝らせるから」

「は、八幡！土下座は商人にとっての最終奥義、素人が手を出してはいいものではない」

「じゃあ、適当にゲーム選ぶぞ。そうだな、おおこれなら知ってるぞ」
「それ最新作なんですよ、まあ全クリしてありますけどね」

懐かしいなと思ったのだが、どうやら最新作だった。

俺が手にとったのはPSPで出来る、ギャルゲーだ。

時々、カードでバトルするがそれは些細な問題だ。

「デツキ作ってやってみるか。なーに、カードの方はやったことあるから余裕だぜ」

「シンクロという新システムついてこれますかね」

馬鹿、お前、遊戯王なんて相手にターン渡さなければ勝てるから。

何なら遊戯王は1ターンの歴史で出来てるからな。

おっと先攻ドローできるのは時代の流れを感じる。

「よし、デュエルするぞ、おっと先攻だなドロー！」

「自慢じゃないですが、僕はこのゲームをやり込んでいる。授業中ですら手放したことはない。アンタの負けだ」

「おい授業はちゃんと受けろよ。さて……お前に相応しい敗北は決まった！」

俺はPSPを片手にビシッと指差した。

この勝負、我々の勝利だ。

「八幡、その敗北は命の煌き……」

「俺のターン！全ての源！手札から【王立魔法図書館】を召喚する！」

「魔法図書館!?そうか特殊モンスター、その効果は魔法使うごとに魔力カウンターを乗せ、取り除くことでドロー出来る能力！」

王立魔法図書館

星4 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 2000

このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

自分または相手が魔法カードを発動する度に、

このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大3つまで）。

(2)：このカードの魔力カウンターを3つ取り除いて発動できる。自分はデッキから1枚ドローする。

「さらに、大空を越える無限！【トウーンのもくじ】を発動！【トウーンのもくじ】を手札に加える！ドロカード【トウーンのもくじ】！発動、ドロカード【トウーンのもくじ】！来い、我が魂！【ブルーアイズ・トウーン・ホワイト・ドラゴン】！」

トウーンのもくじ

デッキから「トウーン」カード1枚を手札に加える。

ブルーアイズ・トウーン・ホワイト・ドラゴン

星8／光属性／ドラゴン族攻3000／守2500

このカードは通常召喚できない。

自分フィールドに「トウーン・ワールド」が存在し、自分フィールドのモンスター2体をリリースした場合に特殊召喚できる。

①：このカードは特殊召喚したターンには攻撃できない。

②：このカードは500LPを払わなければ攻撃宣言できない。

③：このカードは、相手フィールドにトウーンモンスターが存在しない場合、直接攻撃できる。存在する場合、トウーンモンスターしか攻撃対象に選択できない。

④：フィールドの「トウーン・ワールド」が破壊された時にこのカードは破壊される。

「だが、トウーンモンスターをサーチしたところでトウーン・ワールドがなければ召喚できないはず！」

「まだだ、まだ俺のターンは終わってないぜ！【王立魔法図書館】から魔力カウンターを3個取り除いてドロー！【トレードイン】発動、無様な姿を晒すくらいなら死ぬ【ブルーアイズ・トウーン・ホワイト・ドラゴン】！墓地に送り2枚ドロー！」

「そ、そのためのブルーアイズ！」

この時点で手札は五枚、魔力カウンターは1、そこから俺はカードを発動する。

「手札から装備魔法【折れ竹光】を発動！」

折れ竹光

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は0ポイントアップする

「攻撃力0ポイント、ただの魔力カウンターを乗せるためのカードだと!?!」

「それだけではない!更に【黄金色の竹光】を発動!【竹光】と名が付いた装備カードが場にあるので、俺は二枚ドロウできる」

「イ、インチキ効果もいい加減にしろ!」

黄金色の竹光

自分フィールド上に

「竹光」と名のついた装備魔法カードが存在する場合に発動できる。

デッキからカードを2枚ドロウする。

「魔力カウンターを取り除きドロウ!ドロカード!再び【折れ竹光】を発動!続けて【黄金色の竹光】を発動!」

「出た!八幡さんの竹光コンボだ!」

手札は六枚、魔力カウンターは2!

「【成金ゴ布林】を発動、一枚ドロウする代わりに相手のライフを1000回復する!そして魔力カウンターを除去してドロウ!」

「手札の枚数は変わらない、デッキ圧縮か!」

成金ゴ布林

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

その後、相手は1000ライフポイント回復する。

「手札より【折れ竹光】を発動!魔力カウンターは3、除去してドロウ!手札は8枚だ!」

「【折れ竹光】が三枚、来るぞ相模!」

「【ハリケーン】発動、全てのカードを手札に戻す!」

ハリケーン

フィールド上に存在する魔法・罫カードを全て持ち主の手札に戻す。

「助けてくれ、秦野……」

「再び【折れ竹光】を三枚発動！続けて【黄金色の竹光】更に魔力カウンターを除去してドロー、手札は9枚！フツ、八幡の勝ちです」

「こんなの、こんなの遊戯王じゃねえ」

「俺は手札より【打ち出の小槌】発動！更に魔力カウンターを除去してドローもするぜ！」

打ち出の小槌

自分の手札を任意の数だけデッキに戻してシャッフルする。その後、自分はデッキに戻した数だけドローする。

俺は四枚の残して全てを戻す。

【成金ゴブリン】を二枚発動、そして再び【打ち出の小槌】発動！三枚戻す、そして魔力カウンターを除去してドロー！同情するぜ」

俺の言葉と同時に特殊勝利ムービーが画面に流れた。

魔法陣から伸びてくる巨大な手、そこには封印されし巨人がいた。

「封印されしエクゾディア、そんなどうして事故らずに揃えられたんだ……」

「何だこの人、一人でやってるよ」

「フッフ、フハーハッハッハ！どうだ見たか小童共！この男はボッチを拗らせ、ボッチを極めし男！そんじよそこらのデュエリストなど、ソリティアで終わらせるのだ！どうだ、これが遊戯王だ！遊戯王の負の側面、いや闇、そう闇のデュエルなのだああ！」

「材木座、うるさいぞ。訳が分からないから由比ヶ浜達が引いてるだろ」

まあ、テンションが上がるのはよく分かる。

俺も、最後事故ったかとちよつと焦ったからな。

俺は項垂れる後輩二名に向かって、その顔やめなーと小町によく言われる笑顔で告げてやった。

「遊戯王って、楽しいよね」

「クソがアアアア!?!」

「くそ、最初からPSPを投げ捨てればよかったんだ！エクゾディアの対処法なんて捨てるしかねえよ！」
発狂する後輩の姿は、最高だった。

俺はアカギや金と銀で履修済みだ、タツグでやる麻雀はイカサマがあるって詳しいんだ。

「……だ」

「んっ？」

「まだだ！」

項垂れていた相模と秦野はその場で上着を脱いだ！

まさか、まさかまさか、回避しようとも世界線は収束するということか。

俺は失敗した？

「な、なぜ脱ぐのだ！」

「いやー、秦野くん、負けちゃったねー」

「そだな相模君、油断したなー」

そこに敗者の悲哀はない、むしろ楽しそうだ。

「困ったな、負けたら服を脱がなきゃいけないんだから」

ベストがさつと投げられた。

まるで意味が分からんぞ。

「なっ、何よそのルール！」

「ゲームで負けたら脱ぐ、常識ですよ」

「麻雀もじゃんけんも脱ぐものですよ」

いや、じゃんけんは負けて脱がねえから、それは野球拳だから。

じゃんけんっていうのはゲームで殺人ばかりおこしてるような過激なプレイヤーを追い詰める時に使うか、追い詰められて勝負を有耶無耶にするためにじゃんけんで決着をつけるためか、はたまた漫画家の先生を三本勝負で追い詰めてスタンドを奪いかけるとかそういう時に使うのだ。

「では、第二回戦としましょう。ただし、遊戯王は終わりだ。ここからは麻雀にさせて頂く」

「我、麻雀なんぞ打てないぞー！」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ。話聞けし」

秦野はどこからか雀牌と卓のシートを取り出す。

ガチだ。ゲームじゃない、リアルな麻雀だ。

しかも、これ、象牙の高いやつじゃないか。

「咲を読んでから麻雀は覚ええました。この秦野容赦せんツ！」

「敗北を知らないものに勝利はないのだ。さあ、先輩方、受けてもらいましようか！」

「ゆきのん、もう帰ろうよ、付き合おうのアホらしいし」

「そうね。服を脱ぐ行為に生産性は皆無だわ、ただの自己満足に付き合う気はないわ」

もつともな正論だった。

世界線は収束しても、俺は α でも β でもない、ダイバージェンス γ の壁を越えて成し遂げたのか。

「逃げるんですか？じゃあ奉仕部は、僕たちに負けたってことですね」
「ッ！」

「雪ノ下？」

「……負け？」

「雪ノ下！」

「おま、秦野オ！何やってんだよ、秦野オ！」

「雪ノ下が、退出しようとしていた足を止める。」

「取り消しなさい……その言葉……」

「ダメだよ、ゆきのん！見え見えの挑発だよ！」

「所詮、奉仕部は敗北者じゃけえ……」

「乗るな雪ノ下！戻れ！」

「相模イ！お前、なぜそれを言った！」

「雪ノ下は由比ヶ浜や俺の声を無視して、完全に振り返った。」

「材木座がビビって一歩下がる、おい、お前味方だろビビるな！」

「構わないわ。勝てばいいのよ。ルールも今覚えるわ」

「お前、ルール知らないのかよ」

「別にサンマでも構いませんよ、その場合先輩達はフリでしょうけどね。おっと、まさか自分達がゲームを指定した癖に、指定された時は文句を言ったりしませんよね」

「大丈夫よ、問題ないわ」

おいやめろ、一番負けそうな台詞じゃないか。

しかもルール知らないって、いくら頭がいいお前でも無理だろ。

俺だけじゃなく由比ヶ浜も思ったのか、雪ノ下に抱きつくように止めようとする。

「ゆ、ゆきのん。流石に覚えてたては無理だよ」

「ポーカーなら嗜みがあるのだけれど、34種類136枚の手配を使って14枚で役を作るのね。役は規則性があるから覚えやすいわ、難しいほど揃えにくくて翻数が大きいのね。場に出たカードを記憶して相手の残り手札を予想する、ポーカーみたいなものね」

「うう……あ、あたしも！あたしもやる！だって、ゆきのんだけに任せるっておかしいもん！」

おい、ナチユラルに俺はスルーなのか。

そう思ってたら由比ヶ浜が俺を見る。

なんだよ、心の声漏れてたか。

「ヒツキー、私にもルール教えて」

「お、おう。それは構わんが、最初は打てないもんだぞ」

「大丈夫、数字を順番に揃えて、同じ色とか揃えて、あと赤いのがアレばいいんでしょ」

「おっと先輩。アドバイスは控えてくださいよ、するなら役があるかどうかまでです」

俺が指示して打たせることを釘指す。

コイツら、由比ヶ浜の胸をよく見ている。

なるほど、それが狙いか。

分からなくもない、ばいんばいんだもんな。

「さあーはようーはようはじめようではないか！ええい、ルールなど見るでないわ！」

「露骨すぎるだろ」

「やっばこの人おかしいよ」

こいつ、女子の裸がみたいだけでは……。

材木座がニヤリと俺を見て、親指を立てながらグツジョブとでも言

いたげにポーリングしてきた。

グツジョブじゃねえよ、やつぱりじゃねえーか。

なんなんだ、男子高校生はエロいことしか考えてないのか。

「由比ヶ浜さん、別に付き合わなくてもいいのよ」

「ダメだよ！ゆきのんだけ脱ぐのを黙って見てられないもん」

「それだと負けてる前提になるんだけど。それに、別に私が倒してしまっても問題ないのでしょ？」

「雪ノ下、分かかってそれ言ってるんだよな」

「私、何かおかしいこと言ったかしら？」

なんだおめえ、私なにかやらかしましたかって、なろう系主人公かよ。

いや、雪ノ下のハイスペックなら転生してると言われても信じられるまではあるがな。

さて、俺の予想ではコイツらはイカサマをする。

俺はアカギや金と銀で履修済みだ、タッグでやる麻雀はイカサマがあるって詳しいんだ。

「ローカルルールはなしで、赤ドラは四枚、喰いタンありで一荘戦でもっとも、誰かが飛ぶかもしれないですけどね」

「どちら？くいたん？とぶってレッドブル？」

「あー、由比ヶ浜。専門用語はやりながら教えてやるから」

首を傾げる由比ヶ浜に？が付いているのがよく見て取れた。

さて、雪ノ下の方は……。

「……………」

「は、八幡。なんか寒気がしてこないか」

「気のせいだ材木座、たぶんトイレ行きたいとかだろ」

「いや、右目とか光ってないか？もしくは両目が赤くなってないか？」

「どこのクルタ族だよ、誰でもいい気分になってんじゃねえーか」

たぶん、頭の中で役とか思い出してるんだ。

由比ヶ浜なんか、百人一首を覚える選手みたいにブツブツ役の名前言ってるしな。

「一局、飛ぶ度に一枚」

「一、二、六回負けたら見えちゃうじゃん、頭おかしいよ!」

「フッフ、狂気の沙汰ほど面白いんですよ」

「だからいい、ギャンブルは狂ってるほど面白い。だからこそ、さあ賭け狂いましょう」

ノリノリである。

視線は常に胸に、欲望に忠実なコイツらはノリにノッていた。

ちよつと男子、気づいて女子の視線!

殺意の波動に目覚めてるよ!

「……潰すわ」

ほら、由比ヶ浜ばかりみるから、魔王目覚めてんじゃん!冷たい麻雀しそうだよ!

さて、そういう訳で麻雀が始まった。

学校という場所でギャンブルはいかがおもなのだが、男子高校生の内なる俺はいぞもつとやれと盛り上がっていた。

しかし、大人として見過ごせないのではないかという内なる俺も居る。

結論は見守ること一択だ、決して女子高生の下着が見たいわけではない。

さて、東一局、親番は由比ヶ浜だ。

遊戯部がサイコロを回して、山を数えながらここからですと指導しながら手配を揃える。

由比ヶ浜には簡単な役を教えたが果たしてどうなるか。

「わーい、私の親番だ!それ、ポン!」

「あつ、それもポン!」

「よし、ポン!」

〔②③白西〕〔5〕〔①横①①中横中中發横發發〕

「ねえ、どう!どう!」

「お、おう……」

あれえ、コイツ本当に麻雀初心者か!?

役満狙ってないか、小三元、大三元、どっちも行けるんじゃない?!

「フフン、同じ色と絵柄揃えるといいんでしょ。これとか役になるって習ったし」

「は、牌が……煤けて見えるぜ」

「馬鹿な、こんなオカルトありえない」

泣いてるだけかと思いきや、まさかの役満手前まで来ていた。

ふむ、次は必要ない役無しの西を捨てるか。

「あつ、それロンです」

「えっ！そんな、もうちよつとで揃いそうだったのに！」

しかし、由比ヶ浜、ここで何故か「5」を切る。

ドラはちよつと当たったら危ないからできれば捨ててほしくなかった。

特に真ん中だから当たりやすい数字だし。

〔五六七八八⑤⑥⑦23344〕〔5〕

「タンヤオ、ピンフ、ドライチ、三翻三十符で3900です」

「な、なんて？」

「まだ大丈夫よ、由比ヶ浜さん」

「大丈夫大丈夫まだ慌てる時間じゃない。よし、次行ってみよう！」

「大丈夫だけど、切り替え早くない？ねえ、早くない？」

「雪ノ下、気にしたら負けだぞ」

偽物の方が本物になろうって気持ちも籠もってるからお得だって

潰す、という雪ノ下の言葉に嘘はなかった。

第二局は雪ノ下の親番、えげつない手が連発され、遊戯部は厳しい戦いを強いられる。

「ロン、1300」

「あ、あってます」

ば、馬鹿な！あの短時間で俺すら微妙な点数計算をしつかり出来るだど!?

遊戯部だって早見表見ながら計算しているのに覚えたのか。

驚く俺と雪ノ下の視線が合う。

「何を驚いているの比企谷君、早見表を丸暗記すればいいじゃない」

「ナチュラルに思考を読まないでくれないませんか、ニュータイプかお前」

「顔に書いてある……なんて言ってしまうと、まるで私はどこかの漫画家のようにけど、正確には普段よりも挙動不審な動きと視線の方向、早見表から私に移った動きから、早見表に関する驚き、タイミン

グからして点数計算出来たことに驚いたと推測したのよ」

「普通の人はできないから、何なの、諜報組織のエージェントなの？あと、サラツと普段から挙動不審みたいに言うなよ、日によるだろ」

雪ノ下は、何いってんだオメエとでも言わんばかりに、こてんと首を傾げた。

その純粋な瞳が俺をいじめる、やめて八虐は流行ってないよ！

「まあ、や、安い手だし……次は親だから」

「何言ってるのかしら」

「ひよ?」

「まだ私の親番は終わってないわ!」

そ、そうか！親番で親が上がったとき、麻雀では連荘というのがある！

それはもう一度、雪ノ下が親をやり百点分の棒を場に置くという物

だ。

雪ノ下は我が物顔で点棒を手に取り、まるで生花や茶道の場にいるような気品でゆっくりと棒を置いた。

なんだ、垂直に立てたり投げたりはしないのか。

そして、東二局一本場が始まる。

「由比ヶ浜さん、ごめんなさいね。ツモ、2000オール」

「うえ!?これ、もしかして私脱ぐ」

「そうね、でもルールだから」

「味方から脱がされることもあるの!?!」

その時、八幡に電流走る。

ざわざわ……ざわざわ……

コ、コイツら……それが狙い!一見、一般的な脱衣麻雀だがそれが罨。

女子と男子の服装の枚数差を考えると女子の方が多く、防御力があるように見える。

だが……だが、男はラスト一枚まで、女子は四枚確保しないとけないボーダーラインがある。

四枚以下まで削れたらコイツらは下着を見れる、つまり勝ち!勝ちだ!

逆にパンツを見られてもコイツらはどうとも思わない、見られたら困る女子よりも圧倒的なリード!

圧倒的、圧倒的リード!さらに!それを加速させる味方のツモ!

言うなれば、フレンドリーファイアツモ!

当然、女子の方は味方を気遣い使えない、上がり方を制限するそれは、男子側を有利にさせる!

「先輩……駄目ですよ」

「ツ!?だが、こんなの」

「一度始まったゲームです、まあ予想外の手でしたがね」

「嘘だろ、なんて卑怯な」

「ところがどっこい、現実!現実なんですよ、先輩」

そんな俺と相模の後ろでは材木座のフオオオオオが響いていた。

うるせえ、電波の良い所に行くかサーバーメンテ終わるまで待て！

「う、上着脱いだけだけでキモっ」

「フツ、知っていたさ。オタクに優しいギャルはいないってな」

「はあ!?ギャルじゃないし!ウザ、マジキモいんですけどお」

「ぐふうううう」

おい、何勝手に自爆してんだよ、フレンドリーファイアを受けに行くな。

雪ノ下はただ、黙々と麻雀卓を見ていた。

お前、それはそれで怖いよ。何か反応しろよ。

「何をしているの。由比ヶ浜さんのは所謂コラテラルダメージというものよ、続けましょう」

「偶然上がったからってまだまだですよ」

二本場が始まる。

和気藹々としていた雰囲気は、今や処刑台前に並ぶ囚人達の集まりのように静かだった。

ここから脱出するには首を切られる前にドラゴンとか来ないと無理そうだ。

「フツ、序盤ではついている。リーチ!」

「ロン、7700」

「すばらッ!?!」

「次」

雪ノ下がすかさずロン!お前、腕とかワムウ並に疼いてないだろうなあ!

「ポン!」

「ツモ、4100オール」

「バ、馬鹿な!」

「確率論と心理学のゲーム、それに捨て牌は開示されてるのだから手牌も予想出来るわよ……出来るわよね?」

「うーん、ゆきのんみたいに捨て牌から予想できない……靴下にするか」

「ず、ズルい!靴下はズルだ!というか脱ぐなんてトンデモナイ!」

由比ヶ浜、普通の人は出来ないぞ。

いきなりデカイ岩を叩き斬れ、切れるよね？つて言われてるようなもんだぞ。

あと材木座くんさあ……ここはそういうお店じゃないし、性癖を押し付けるな。

というか、四連続で上がれてすごいなお前。

「ダ、ダブルリーチ！勝った！もう終わりだ！」

「御無礼、ツモです」

「は、はあ！揃ってるのかイカサマだ！」

「イカサマの証拠はあるのかしら、あるとして言えるの？例えばマージングとか積み方とか」

「そ、それは……」

「ツモ、6200オールよ」

いったいどういうことだと雪ノ下と遊戯部を見る。

確かに牌は使い込まれていて傷や汚れがあるが……やはりイカサマ！チーム麻雀だからイカサマをしていたのか！

「負けが続いてボロを出したというところかしら、もつとも説明できるとしたら不正行為を働いたと自らの首を締めるだけだけど」

「そうだ、じゃんけんで勝負しませんか」

「駄目よ、五本場」

雪ノ下から冷たい眼差しが後輩達を襲う。

怖ええ……イカサマするコイツラもだけど、それを見破る雪ノ下も怖ええ……。

しかも、今まで気づいてなかったら、序盤はリアルに計算と心理学で普通に麻雀も強いっていう。

ハンターハンターとかジョジョで出たら強キャラに違いないよ、迂闊にボスに近付かない暗殺者のなキャラだよコイツ。

「うう……見んなし」

「ぬう、リボンか……日和ったか」

材木座、お前はどっちの味方なんだ。

「おい材木座」

「落ち着け八幡、ゲームとは楽しむものだ。もっと余裕を持て」

「余裕をなくしてるのはお前なんだが」

俺が文句を言おうとしてたら、ため息が遮る。

「なるほど、そういうスタンスなんですね」

それが秦野だと気づくには少し時間がかかった。

これまでの弱気になってビビってた印象とは違う、明らかに攻撃的な色が透けて見える声だ。

「なんていうかユーザー視点終始っていうのはちよつとねー」

「ぬぬぬ……どこのプロデューサー目線だ貴様」

「貴方の番よ」

「すいません……剣豪さんさあ、なんでゲーム作りたんですかあ？」

この剣豪さんとやらは多分材木座だろ、お前後輩に剣豪とか呼ばせてんのとツツコミたいが、ここはぐつと我慢しよう。話が進まないからな。

「フツ、愚問好きだからだ。好きなことを仕事に、正社員なら安定してるしな」

「ハッ、好きだから。最近多いんですよ、それだけで出来る気になっちゃう奴」

「次」

「すいません」

材木座が何が言いたいと由比ヶ浜から後輩の方に視線を向ける。

カチンと来たのだろう、そして反論しようとしたのだろう、だが言葉に詰まった事を表す息を飲んだ音がすぐに聞こえる。

「現実逃避、夢を言い訳にして、してますよね」

「な……にを……」

「薄っぺらいんですよ、ユーザー視点っていうか、ユーザーのまんま、表面なぞってるだけっつーか」

「止まってるんだけど、次」

材木座は堪えるようにして、拳を握ってうつむいた。

「ゲームの何たるか知らない若手クリエイターにも多いんですよ。TVゲームしかやったことないのに作ろうとする、革新的なことが出来

ない、斬新な発想を生む土壌が養われてない、ワンパターン、好きだからって作れるほどゲームは……あつ、すみません」

「ぐぬぬぬ」

材木座が遂には唸る。

「アンタ、誰かに誇れること、得意なこと、無いでしょ？ 縋ってるだけだ」

正論なのだろう、材木座は遂にドカッと近くの椅子に座り始める。

大丈夫か、息してるう？

「好きな映画や小説は？ もちろん、アニメやラノベ以外で」

「ぬお!? お、おうふ……」

もはや多重債務者のような憔悴しきった症状だった。

虚空を見ながら口をパクパクしている、有り金全部溶かしてそのような顔だ。

「アンタはエンタメの、すいません、エンタメの本質を分かってない！ 俺達は源流から、基礎から勉強してるんだ、やべっすいません、半端者がゲームを作るとか見てて恥ずかしいんだよね」

古いゲームの歴史を本で調べ、実際にやってみて、ゲームとは何かと勉強している遊戯部。

ブヒブヒ、キタコレ、モエー、可愛いキャラで遊んでるだけ、罵倒されて当たり前。

でも俺は少しだけイラツとした、材木座が馬鹿にされるのは別に独占欲もないし、異論はない。

「双方の話を聞いていたのだけど遊戯部の方が正論よ。引導を渡しなさい比企谷くん、友人が手を下してあげるのがせめてもの情けというものよ。自分で納得できないと分からないタイプだもの」

「ゆきのん、手が止まってるよ。麻雀しようよ」

「お前麻雀しながら聞いてたのかよ、ちよいちよい指摘してたから集中してたと思ってた。あと殺すのかよ」

「してたわよ。マルチタスクは誰でもできることでしょ？ 違うの？」

「違うわい」

お前、その傲慢さは何なの、出来ない人だっているんだよ？

ただ、彼らのように調べたりすると遊ぶのは違う。

彼らの努力は正しいし、材木座の怠惰は責められてしかりだ。

だが、正しいやり方が偉いなんて誰が決めた。

教科書通り、カリキュラムをこなして、ノルマを達成して。

それじゃあ、伝統と正攻法でやってるだけだ。

過去の財産に依存して、権威に寄りかかって、何者でもない自分を誰かの求める形に塗り固めて量産型の人間を作ってしまうだけだ。

「あのさ……あたし、ゲームとかよくわかんないけど。初め方が正しくなくても終わりよければ、よく分からないけどヨシ！でしょ」

「由比ヶ浜さん」

「最近見たアニメでも言ってたよ。偽物の方が本物になろうって気持ちか籠もってるからお得だって……とところで麻雀は？」

「絶対、そんなこと言つてないぞ。言わないキャラだぞ」

まあ、だいたい言いたいことは分かる、なぜそのチョイスと思うけれど。

材木座は、答えを得たよ由比ヶ浜、みたいなキメ顔で立ち上がった。

由比ヶ浜はビクツツとして引いていた。

「そうだ……俺には誇れる物がない！だから、これに賭ける、その何が可らしい！」

材木座は涙を啜り、肩を揺らし、胸元を掻き抱きながら慟哭した。

潤んだ瞳は痛々しい、秦野と相模は嫌悪に満ちた眼でそれを見る。

それは同族嫌悪かもしれない、材木座を通して過去の自分を投影しているのかもしれない。

「この世界はラノベやアニメの世界じゃないんだ。理想と現実の違い、夢は叶えられると思つて生きていくなら、理想を抱いて溺死しろ！現実には敵わないのに、夢が叶う訳ないじゃないですか」

「おーい、麻雀しないの？」

「そんなこと！とうの……昔に知っている！作家志望のゲーセン仲間は就職したし、二次選考を通った人はニートだ！我だって、現実くらい、知っている……知ってるんだ」

材木座が虚空を掴んだ。

何を掴んだのかは分からんが、ギュギユと指ぬきグローブが悲鳴を上げる。

「ラノベ作家になると公言すれば、腹の中で馬鹿な夢見てるだの、現実見ろよだの、せせら笑ってることだって分かってる、それでも……」理想と現実で進路を選ぶことに関しては、教職をやつてれば嫌でもぶつかる問題だ。

本気で応援してくれる人間も、止めてくれる人間も、夢を語っても誰も本気にしないのだ。

だからいつか諦めて、自分がなりたくなかった奴らに、夢を見ている人間を笑って側に回って、夢を見ていた自分を誤魔化したくなるんだ。

「なれるかどうかじゃない、なるんだ！」

「……あー、うん、どっかで聞いたことあるけどスルーするわ」

「スルーしておらんではないか！」

「ねえ、麻雀しようよ？」

うーん、あのさあ。

雪ノ下もゲーム中は、手を止めるなって怒ってたけどさ。

由比ヶ浜、ちよつと空気読んで、いや盤外戦術っていうか外野が騒がしいから俺らが全面的に悪いけどね。

「そうね、まあ、次で終わらせるわ。誰をハメしようとしたのか、分からせてあげるわ」

「ねねっ、ヒッキー、こっち来て」

意気揚々か、それとも虎視眈々か、喉元を噛みつこうとする肉食獣のような殺意の籠もった視線を雪ノ下から感じた、一瞬視線が由比ヶ浜の胸に向いてたが、ひよつとしてさっきの雪ノ下の視線から考えることから……おつと心理学的に内心を読まれるかも知れないから考えるのをやめよう。

それよりも、人の袖をクイクイ引っ張ってくる由比ヶ浜に仕方ないなど思いながら従う。

どうせ役の確認でもしてもらいたいんだろ。

「んっ」

「何だよ」

「バレるから耳貸して」

そう言つて由比ヶ浜が人の耳たぶを引っ張つてくる。
痛い痛い、分かったから、子供か。

「見てみて、これ、同じでしょ、役あるでしょ」

「ふあ!？」

「ヒツキー?！」

急に耳元で囁かないでくれますかね!?

びつくりするだろうが、驚かすつて言えよ!

由比ヶ浜はわざとやってんのかとばかりに仰け反つた俺を無理矢理に引っ張り。
また、見ろと催促してくる。

まわりに聞こえないように手をメガホンにしてるのだが、囁くせいで耳がくすぐつたい。

「同じ奴四つあるから、あと一枚で上がれるでしょ?！」

「お前これ!ツうごごご!？」

「二人でどうしたのかしら!?!由比ヶ浜さんの番よ」

「やー、何でも無いよ。ごめん、役があるか確認してもらってから待つて!！」

俺は、思わず見ていた役について驚きの声をあげようとした。

しかし、すかさず動いた由比ヶ浜が片手で俺の口を覆う。

遊戯部とか雪ノ下がイカサマした影響か、それともリアルラックなのか。

由比ヶ浜は人差し指を顔の前に立てながら睨みつける。

「ちよ、しっ!ゆきのん達にバレちゃうじゃん」

「お、おう。悪い……」

「もう、しつかりしてよね。で、大丈夫そう?！」

「あ、ああ。上がったらな」

いや、上がったらマジでヤバイ。

だって、リーチが一翻だとしたら、それは十三翻だ。

麻雀が分からない奴らでも分かるか、役満つてやつだ。

名前を四暗刻という。

これは話の腰をおつてでもやりたくなるわ。でも、自覚ないんだろうな初心者って怖い。

「よし、リーチ！」

「なるほど、リーチ出来るかどうか見たかったのね」

「私も場とか確率、出来るからね！これは期待度？期待値？アゲアゲだよ」

「はあ、由比ヶ浜さんは数学よりも国語かしら。あと、少なくとも場に出てないやつと言ってるような物じゃない」

しまったという顔で後ろにいる俺に振り向く由比ヶ浜、いや俺のせいみたいな態度やめな〜。

まあ、スジとか関係ないし行けるんでは。

今までの流れが嘘のように、どんどん終局に向けて牌が捨てられる。

おかしいなと思いつくと背後に回ると、由比ヶ浜以外が後一枚、一向聴という奴になっている。

……ただ、それ由比ヶ浜が持つてるから二種類待つ両面待ちという形ながら片方の四枚しかチャンスはない。

しかも場を見る限り、どちら一枚しか入ってない地獄単騎とよばれるスゲー確率の悪い待ちだ。

「可笑しいわね。バラけてないのかしら、今の捨て牌は迷っていたからこの待ちじゃない？そうなるって誰かが四枚持つてるってこと？まさか」

「あつ、ツモ？ちよつと待ってね、みんなみたいに一気に倒すから」

何かに気づいてS A N値チェック入りそうな雪ノ下が、化け物を見るような眼で由比ヶ浜を見る。

由比ヶ浜は満面の笑みだった。

原因はお前らのイカサマだと思うよ。

「げえっ!?!」

「げえっ!?!」

「そんな、こんなオカルトありえない……」

固まる三人に由比ヶ浜の代わりに報告してやった。

「四暗刻、役満。遊戯部は飛んで、雪ノ下は2位だな」

部室には暮れゆく夕日が差し込んでいた。

ガッツポーズする由比ヶ浜と、発狂する部員2名、頭が痛そうな雪ノ下の姿があった。

ははは、なにこれ無理ゲーすぎる。

「今回の件からお前達が得る教訓は、人生は運ゲー。好き嫌いとか、知識の有無、才能じゃなくて最後は運がある奴が勝つてことだ」

材木座の夢が叶うかどうかも運次第だな。

なお、少しズルかもしれないし、そうはならんかもしれないが、将来の材木座は小さい会社で遊戯部の奴らとPCゲームを作っていたりする。

実は夢を叶えてたりするのだ、まあ今はまだ夢の話だ。

リーマンショックって、サラリーマンがショックって意味じゃないのよ

前回までの八幡ライブ、突如廃部の危機に陥った奉仕部。

八幡は起死回生の策として、アイドルグループを作ることに……なったりはしていない。

本当は東中の変人と名高い、雪ノ下雪乃と一緒に奉仕部というのを作り、宇宙人とか未来人とか超能力者とかと奉仕活動を……という訳もなかった。

本当は遊戯部とかいう部活で助けを求めるのび太くん(材木座)を助けたのだった。

倒し方は簡単デュエルしたんだ、遊戯部らしいな。

「私のターン、私はフィールド魔法を発動。更にエクストラデッキから除外することでモンスターを特殊召喚。フィールド魔法の能力でライフを払ってリリース無しで通常召喚。召喚が成功したので能力ですべてのモンスターを破壊し、一番攻撃力の高いモンスター分のダメージを与えるわ」

「うわあ、ひとりですりティアやってるよ」

「材木座が一撃か、エゲツねえな」

なお、現在は我が部室の魔王に得意分野で挑み調子に乗っていた材木座が僅か一週間で逆転されていた。

誰だよ、この女に遊戯王なんて教えたの。半端な気持ちで入ってくるなよ、デュエルの世界によ。

「雪ノ下、そろそろだぞ」

「そう、フツ……無様ね」

「ぬうううう、おのれ、おのれえ……」

一週間前、初心者相手にワハハハと高笑いしていた材木座が懐かしい。

俺はチラッと時計を見て、復讐というにはオーバーキル気味の雪ノ下に声をかける。

今日は、由比ヶ浜の誕生日会を部室でやるのだ。

本当は学校に色々と持つてくるのは問題があるのだが、そこは俺がせつせと貯めたラーメン屋の一杯ただスタンプ券で先生に承諾させた。

まあ、ケーキくらい良いだろうとか祝ってもらえる年齢かとか闇深いことを言っていたが気にしないでおく、こわっ……とづまりしとこ。

「やつはろー、あれどうしたの？」

「少し早いけど、あんまり遅いと下校時刻になるってひ、ひ、引き気味くんが」

「おい、俺の名前で遊ぶんじゃない」

「そうね、引かれ気味くんだったわね」

「悪化してるじゃないか」

俺達のやり取りに、ムハ、ムハハハと笑い声を上げる材木座。

おい、お前が笑うのかよ、しかも作り笑いじゃないか。

「今日は、ケーキ焼いてきたのよ」

「華麗にスルーしたな」

「今日は、ケーキ焼いてきたのよ」

「ドラクエかな。同じこと言ってるなあ」

そう言つて、雪ノ下がお店で買ったんじゃないかとも思えるようなちゃんとした紙の箱を取り出して開ける。

開けると、そこには立派なショートケーキがホールである。

本当に買つてないの？クオリティーやばくね？

「へ？ケーキ、なんでケーキ？」

「お前、誕生日じゃん」

「私、誕生日じゃん！」

「そうだよ」

今気付いたと言わんばかりに驚く由比ヶ浜、そこからは切り替えも早くテンションが上がっているのかキャツキャウフウフ、女子二人で盛り上がっている。

おい、助けを求めるように俺を見るんじゃない。

百合の間に挟まると怖いんだよ、後方で見ている材木座おじさんが煩そうだし。

「ゆきのん、ありがとう！誕生日覚えてたんだー」

「む、むぎゅ……近いわ由比ヶ浜さん、あとデカイ、暑苦しい」

何がとは言わない方が良いんだろうな。

羨ましい体勢だが、ふと思う。

そう言えば前回は何か気不味くなって部活に来なくなり気味だった。

まあ、俺と雪ノ下が付き合ってるという勘違いをしていたからなんだが、それで部活がダメになるとか俺ってばサークルクラッシュャーだよ。

後、俺が余計なことを言って拗れてしまったこともあったな。

あれはあれで笑い話にはなったが、あの頃はガチで悩んだ物だ。

「これ、プレゼント」

「ま、まさかプレゼントもー」

「ほら、俺からもやるよ」

「えっ、聞いてないんだが。我、何もないんだが」

元からお前を誘ってないからな、気にするな俺もお前を気にしないことにするからな。

材木座が所在なさげにソワソワして、机の遊戯王カードをチラチラ見てる。

たぶん、貰っても喜ばないからやめとけ。

なんやかんやあつて夏休み。

由比ヶ浜が事故のことを負い目に感じているのを和解、とかそういうのは穿り返さなかったのだからな。

そういうのは時間が解決してくれるとか、なあなあで済ませるのもありだなと俺は社会人になって学んだ。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、何してるの」

「株」

「株は18歳からだから出来ないでしょ」

「未成年でも親の同意があれば0歳から証券口座作れるんだぞ。これからはサブスクの時代が来るし、有名所は絶対上がるんだって。なんなら、今のリーマンショックが最安値すらあるから」

「ああ、不景気だもんねー。うんうん、サラリーマンも大変だよねー」
リーマンショックって、サラリーマンがショックって意味じゃないのよ、小町ちゃん。

絶対分かってないだろう妹の面倒を見ながら、夏休みを過ごしていた。

読書感想文なんて言うもんだから、ちよつと見てやろうと思ったのだが熱が入りすぎてしまつて中々の完成度になつてきた。

まあ、でも、先生がコンクールとか出したら表彰されるんじゃないかと思えるような出来には出来てはいる。

ただ、こういうのつてクオリティーが高すぎると身内の犯行を疑われるので要点だけ教えて本人によるオリジナリティを出させるというのも絶妙に必要だったりする。

「何か買ってくるわ」

「マジ、じゃあ小町ハーゲン、ハゲン食べたい！」

「ここぞとばかり高い物を要求してくるなあ」

「お金じゃないでしょ、気持ちじゃ大事なんだよお兄ちゃん！」

「いや、値段じゃなくてカロリーの話」

「……ほら、外は暑いし実質ゼロカロリー？」

「ゼロカロリーかぁー、未来に生きてるなあー」

それ流行るの大分先だけどね。

既に七月も終わり、アブラゼミが大合唱。

俺はこういうのがタイプです結婚して、いいでしょうと彼らは大合唱で婚活中である。

うるせえ、誰だよ風物詩とか言ったやつ。

ただの公害だぞ。

小町の負担を軽くするため暫くは俺が家事、ついでに自由研究の手伝いも兼ねて本を買いに行く。

別に通販でもいいんだが時間あるし、海浜幕張界限で大きめの書店

を見るのも手だろう。

ふらふらつと歩いていると緑色のジャージが目に入った。

ウチのジャージ、なるほど部活帰りの学生かな。

「と、とっ!？」

サラサラと流れる綺麗な髪、部活動をしているのに眩しい白さの手足、美少女にしか見えない線の細い体型。

戸塚だ、部活帰りの戸塚がおる！

しかし、その戸塚は足早に手を振りながら誰かに近寄っていった。

誰よその男！同じ部活仲間だろうなあ。

そっか、戸塚は部活か。部活には友達いるよな。夏休みだし、友達相手に笑顔を向けるくらい当たり前だよな。

俺だけが仲良しなんていつからそう思ってたんだろ。

俺の一番が、ソイツにとつての一番じゃないなんて、なんで忘れていたんだろうか。

ほんと、私ってバカ。などとメンタルが鬱になってるが切り替えよう。

「八話」

「見た」

「堕ちたな」

「ああ」

「アオいいよね」

「いい」

切り替えようとした矢先にゲーセンにでも行こうとしているのか材木座がいた。

友達らしき奴らと話している、単語だけの会話をしている材木座だ。

何だお前ら、ゲンドウと冬月なのか。

あんなに楽しそうにまだマジの話をしているところを邪魔しちや悪いし、世間体も悪いと思うので気付かないふりしよう。

まったく、専門用語だけで話しちやうオタクくんさあ、そういうのが通じるのって重度のオタクだけだからなあ。

自分より下に見える人間を見ると少しだけメンタルが回復したな。

「理系コーナーは……」

本屋に来て、店内で理科系の本を探していると、ふと視線を感じる。いる、何かがいる、俺の背後にいる！いや、夏だからって急にホラーになる訳ではないけど。

でも、この見られてるって感覚はなんだろうな、首の後ろになんかモヤツと、これが殺気って奴なんだろうか。おいおい、誰かに俺、殺意を抱かれてるって訳？

でも明らかに呼吸する音とか物音がするんだよなあ。

意を決して振り向くとそこには見覚えのある人物がいた。

「……………」

「……………」

肩にカーデイガンを羽織り、スカートを履いている清楚な出で立ちの女。

女は、そつと本棚に物音をたてないように持っていた本を戻していた。

そんな体勢で、俺とガツツリ目があっている。

うん、雪ノ下雪乃だね、彼女がいた。

先に動いたら死ぬ、みたいな感じで見つめ合う俺達。

やめろ、目と目が合う瞬間好きだと……違うな、見つめ合うと素直にお喋りできないほうだなこれは。

「グラビア」

「猫」

「くっ」

「ふっ」

何かを悟ったのか、それとも不利と見たか雪ノ下は逃げるように書店を後にする。

不毛だ、またひとつ不毛な戦いが行われてしまった。

ところで雪ノ下雪乃が持っていた本は、猫の写真集であった。

もういつそ飼えよ。

書店から本を見繕って出ていこうとすると、呼び止める声があつ

た。

「あつ、ヒツキー」

ふと、立ち止まったが俺の名前は花の高校生比企谷八幡、ひよんなことから高校生になってしまったが断じて引きこもり、通称ヒツキーではないので反応したら負けだった。

「ちよ、無視するなし」

「……おう」

「間！なに、今の、間あ！」

思う所があったのでと、案の定由比ヶ浜がいた。声で分かっていたが、由比ヶ浜だった。

黒いキャミソールに透かし編みのカーディガン、サンダルと夏仕様。

なんだろ、カーディガン流行ってんのかな。

「ヒキオじゃん」

ふと、そんなことを思っていると渋谷の街とか六本木にいそうな、背中の防御力なさげなミニスカワンピースを纏った三浦がいた。

こうして見ると、マジでキャバ嬢に見えるから不思議。

高校生に見えないな、マスカラとかアイラインとかアイシャドウとか色々やってるからかもしれない。

目元のメイク種類多いな、流行ってんのかな。

「ユイ、あーし、海老名と電話」
「り」

短いやり取りだが、何か成立したのかカツカツとヒールの音を発しながら離れていく三浦。

り、って何、材木座より短縮言語で会話してない？

「今日はその、優美子たちと遊ぼうと思ってる……まさか、見られるなんて」

「おい、浮気の現場を目撃した旦那への言い訳みたいに言うな。あと、優美子って誰だ」

「だ、旦那!? て、てか優美子は優美子だし、さっき喋ったでしょ！」
なんだ、あーしさんのことか。

あと、ヒキオじさんは喋ったことになるのか、ならんだろがい。

「ヒツキーは？」

「買い物」

「へー、誰かと遊んだりしないの？」

「しないな」

「夏休みなのに？」

「夏休みだから遊ばないんだろ」

「えっ？」

「えっ？」

夏休みは休みのためにあるわけで、遊ぶためになあるわけじゃないんだが。

これが思想の違いって奴なんだろうか。

「夏生まれなのに夏苦手なんだね」

「……なぜ私が夏生まれだと知ってるのかしら、貴方つてもしかしてストーカー？」

「なにそれ！ゆきのんの真似!?!ちよつと似てるし！」

さつき雪ノ下がいたからな、なおここに本人がいたら俺達は死んでる。

「次はヒツキーの誕生日だし、誕生日パーティーしようよ！」

「いい。いらん。やめろ」

「拒否られた、拒否られ三段活用!？」

「いや、パリピじゃないし俺。あと、小学生じゃないのにお誕生日会って恥ずかしくね?どんな顔したら良いか分からんし」

「笑えばいいと思うよ」

お前はシンジくんか、じゃあ俺は綾波。

私の代わりはいるもの、だって私は社会の歯車、うわそんな綾波嫌だ!

「じゃあみんな遊びに行くのは？」

「みんなって？」

「友達？」

「友達って？」

「……い、嫌なら二人で、とか？」

「戸塚と二人か、いいな」

「さいちゃん!? 何で、今の流れでさいちゃん!？」

お前、だって友達と言えば戸塚だけしかないだろう。

お前らはアレだ、クラスメイトとか部活動の仲間だし。

「まあ、お前と行くのもいいけど。恥ずかしくないか」

「恥ずかしくないけど？」

「いや、だって、実質デートじゃん」

「……恥ずかしく……ないけど」

「間！なに、今の、間あ！」

「いや、だってヒツキーが急にそういう事言うから」

先に言ったのはお前なんだが。

「別に、遊びに行くかどうか話す必要ないだろ」

「えっ……あ、うん」

「俺達、たまたま会っただけだし」

「えっ、早く帰りたいの？ 私のこと嫌いな感じ？」

「いや、連絡先知ってるんだから夜にでもメールしろよ」

「えっ……あ、うん。そっか、そだね！ また連絡する！」

「はいはい、またあとでな」

そう告げると由比ヶ浜はくると踵を返して三浦の元へと駆け寄る。

俺はそれを見届けてから家路へとつく。

はあ、顔が熱いな。瞬間移動で家に帰れたら楽なのにな。

バカ、社会に出たら2ヶ月も休みなんて無理だよ。夏休みでダラけることは学生にしか出来ないよ、毎日が日曜日なニートでもないかぎり

ソファーに沈み込んで、今日も今日とて株取引。

未成年が出来るのは現物取引だけなのだが、それでも未来の株価を知っていると小遣い感覚で稼げる。

もつとも、それは10年ごととかになりそうだけど。

メガネのジンスとか、CMでよく聞いてたモノタロウとか、数千円になる株が十数万円で買えるのだ、意味わからないよね。

一万円で買ったなら、500万くらいになると思ってくれたら良い、ヤバイ。

「ウエザーニュースがこの価格で、買うだろこれは……取り敢えずG A F Aとかネットフリックスとか押さえとくか」

「お兄ちゃん、暇なの？一日株取引してて楽しい？」

「正直デイトレじゃないからつまらないし、やってないぞ。ほとんど You Tube 見てるんだよ」

スマホが出てからそんな年は経ってないし、PCが主流の時代だった。

まだWindows7が出るか出ないかっていう、驚き……ニコニコも最近できたんだ。

「もつと学生らしいことしなよ」

「バカ、社会に出たら2ヶ月も休みなんて無理だよ。夏休みでダラけることは学生にしか出来ないよ、毎日が日曜日なニートでもないかぎり」

「海行くとか、山行くとか、夏祭りとか学生時代の思い出のことだよ」

「そういうのゲームとかで疑似体験出来るから間に合ってます」

「終わりだよ、お兄ちゃん。それは、青春時代を過ごせなかった大人がやることだよ」

平行線ですね、でも仕方ないじゃん。

レトロゲーが出来るのは今だけなんだから、忙しいんだよ。
むしろ大人になってからやろうとすると、高かったりするんだよ。
このチープなレベルでこの値段、みたいになるんだよ。

「10年後にはYou Tubeはみんな見るようになるから」

「あー、ホームビデオとか映画とかアニメが見れるやつでしょ?」

「みんな携帯で見えるようになるよ」

「片手で映画とか見れるわけ無いじゃん」

「見えるんだな、これが。」

まあ、昔の人からしたら半日で江戸から大阪とかに移動するのも夢物語だし、案外こういう技術の進歩というのは嘘だあみたいなのを
実現していくってことなのかな。

「あー、映画見たくなってきたな。ビデオ借りてくる」

「マジかよ、まだDVDじゃなくてビデオあるのかよ」

嘘、俺の高校生の頃って昔過ぎー!これからビデオもなくなっていく
んだよなあ……PSPで映画も見えなくなるな、そういえば。

なんだかノスタルジックな気分になっていたら、携帯がなった。

おっと、アマゾンさんからの発送メールかな?と思いつながらケーブ
ルの携帯を取った。

「なんだ由比ヶ浜じゃなくて、平塚先生か」

返せるときに返そうと思って携帯を置くと、今度は電話が掛かって
くる。

瞬間、思い出される平塚先生の大量メール……そうだった、早めに
出ないと面倒くさいことになる。

「もしもし、比企谷です」

「おう、比企谷くん!いやあ、寝ているのかと思って電話したんだ」

「先生、もし出なかった場合に大量にメールとか送っちゃ駄目ですよ。
彼氏とかにそういうことすると、重い女だと思われて嫌われますよ」

「……………」

ブツン、と電話が切られて、ツイッターと一定音がする。

えっ?えっ、えっ、えっ?待って、なんか俺した?

あつ、掛かってきた!

「もしもし?」

「比企谷くん!寝ていると思つて電話したんだ」

「……………」

えっ、えっ、えっ?きつきのやり取りは?あれ、どうなってるんだ?
?

これは、触れないほうがいいのか?いいんだろうなあ……

「要件はなんですか?」

「唐突だが、キャンプに行きたくないか?」

「……………ああ、地域の奉仕活動で林間学校のサポートスタッフが必要なんです。そういえば、この時期に千葉村行きましたっけ」

「まだ言つてないのにどうして分かったんだ……というか、場所までよくわかつたな」

「あれですよ、中学で自然教室行ったから」

やべっ、と思わず焦る。

そうだった、俺は懐かしいとか思ったけどよく考えたらこれからの話しだから知ってる方がおかしかつた。

戸塚の寝顔とか戸塚と飯食つたとか、葉山が小学生女兒と喋つてた記憶しかないけど、ああ鶴見もいたか。

俺の記憶の半分が戸塚つてどうなんだ?まあいいか。

「それで」

「分かりました。どこに集合しますか?」

「えっ、あつ、ああ。行つてくれるのか?」

「はあ?仕事なんだから行くに決まつてるでしょ」

「いや、仕事じゃないけど……」

仕事……じゃ、ない!?

そうだった、俺つてば学生だったと迂闊なミスをした。

いや、教師やつた時も似たような無茶振りあつたから、いつもの感じで承諾しちゃつたよ。

「はあ……先生のことだからレンタカーを借りてるんですよ。教師の負担が大きいですから今度から、公共機関を使って移動するほうが良いですよ。連絡はこつちでやつときますから、人手がいるつてこと

で集めますんで、先生は体裁の為に募集してる生徒と連絡してください。ああ、ちゃんと保護者に外泊許可取ってるかの確認を本人か保護者からしてくださいよ、後々トラブルになると面倒ですから」

「手慣れてる!? いやエスパーかね、どうしてレンタカーを借りてると分かったんだ」

「返事は？」

「……あつ、はいやつとききます」

生徒思いなのは良いことだが、もう少し自分の負担についても考えてほしい。

いつもフォローするこっちの身も……いや、今はしてないんだっけか。

いや、若い内から習慣化するのはよくないし、周りを頼ることを教えないと行けないだろ。

これでいいはずだ。

教師って盆休み以外は普通に仕事だからな。

電話を切った俺は、勉強の息抜きに自分へのご褒美って大事、みたいな丸の内〇Lみたいな事を言う小町にキャンプ行くぞと声を掛けた。

あと、ラインで由比ヶ浜と雪ノ下に部活動でボランティアがある旨と無理ならこちらから先生に連絡する事も伝えておく。

ああ、あと戸塚はマストだ。材木座は、どうせコミケで忙しいから要らないだろ。

勉強はノロノロしてたのに、遊びに行くぞと聞くと機敏な動きで小町は準備する。

何お前、切り替え早くね？ 仕事は遅いけど、プライベートはアクティブな大人になりそうだな。

重そうだったので詰め終わった荷物を持ってやると少し嬉しそうにしてくる。

お前が最近、チョロインになってきてお兄ちゃんは心配です。

「いやあ、なんだかんだ小町の話聞いて更生してくれて小町は嬉しいよ」

「何の話だよ」

「またまた、お兄ちゃんが自分からキャンプに行くなんて頭おかしいよ」

「さりげなく、罵倒してくるなよ。部活動だから仕方ないだろ」

「昔のお兄ちゃんなら、携帯放置して電池切れを言い訳にしてたと思うよ」

「……ああ、そうだな。お前すげーな、お兄ちゃん解像度高くね？」

「お兄ちゃんのことは何でも知ってるのだ、あつ、これ小町的にポイント高い」

そろそろ、ポイント溜まってなんか貰えたりしない？その小町ポイント結局なんなんだよ。

そんな事を考えながら、由比ヶ浜とラインしながら駅のロータリーへと向かうと先についていた奴らが見えてきた。

パンパンに膨れ上がったコンビニ袋、ピンク色のバイザーにTシャツとホットパンツ。

何だお前、水ポケモンのジムリーダーかよ。

由比ヶ浜の後ろには、少し恥ずかしそうに視線を逸らす雪ノ下がいた。

雪ノ下にしては珍しいジーンズ姿、立ち襟の白いシャツはどこか清涼感がある。

「グラ——」

「ね——」

「くっ！」

「ふっ！」

開口一番に小町の前で爆弾を投下しようとしたようだが、残念だったな！こっちは猫の写真集を見てたことを把握してるぞ！

いやでも、よく考えたら猫か水着姿の女かと言えば俺のほうがダメージデカくね？

つうか、まだ根に持ってたのかよ。

「ヒツキー、遅い」

「夏休みに当日呼び出しで集まれる方がどうかしてるだろ」

「集まろっていったら、集まれるもんじやない？」

普通予定調整とか、あるじゃん。

ああ……いつからだろうな予定を調整しないと人に会えなくなっ
ちまったの。

これが若さか。

「結衣さん！やっはろー！」

「小町ちゃん！やっはろー！」

バカっぽい挨拶だな、流行ってんの？

「雪乃さんも！やっはろー！」

「やっ……こんにちは、小町さん」

吊られそうになったがギリギリ我に返ったらしい。ものすごい速
度で顔が真っ赤になっていた。

「雪ノ下、にやっはろー」

「ハア？」

「……いや、なんでもないっす」

ちよつと、ふざけただけじゃん。

キレるなよ、こええよ。

もうやだ、空気が辛い、俺帰る。

「八幡っ！」

えっ、えっ、この声は……！

真夏の太陽よりも眩しい笑顔が、俺に向けられて注がれる。

戸塚の可愛い笑顔は万病に効く、俺のメンタルが回復した。

スマイルがプリティでキュアした、戸塚はプリキュアって分かん
だ
ね。

「戸塚さん、やっはろー！」

「うん、やっはろー！」

FOOOOO！なにそれ可愛いもつと流行らそうぜ！

「全員、揃ってるな」

そこには筋肉モリモリのマッチョマン……ではなく、デニムとT
シャツにカーキのキャップとキャンプ女子みたいな格好した平塚
先生がいた。

「先生似合ってますね。あつこれ虫除けスプレーと日焼け止め」

「あつ、うん……ありがとう」

「駄目ですよ、そういうズボラなところ。しっかりしてください」

どうせ忘れてるだろうと思って、コンビニで買った袋をそのまま渡す。

なんだよ、なにか言いたげだなお前ら。

「ヒソヒソ、ヒソヒソ」

「ヒソヒソ、ヒソヒソ」

「何か言いたげにヒソヒソとか口に出してるんじゃないやねえよ、せめてなんか会話しろよ。ヒソヒソってまんま言う奴ら初めてみたぞ」

まったく、すぐに色恋沙汰に持つてくんだから……違うから！本当に！そういうの困るから！

後で他の先生に噂されると教師側は困ったりするんだよ！ねっ、平塚先生！

「い、行こっか……」

おiiiiiiii！お前も満更じゃないみたいな反応するな、誤解されるだろうが！

ああ、クソ、男運最悪だから、この人耐性なかったんだっ！

俺は何だか気恥ずかしくなって、先に車の助手席に座るのだった。

「何してる、行くぞー！」

「小町さん見て、オタクの比企谷くん照れてますわよ」

「あらあら、うちのお兄ちゃんったらお可愛いこと」

やっぱりお前ら、ヒソヒソで会話してろ！

大人になると、30過ぎてから太るし、脂っこい物も食えないし、婚期に焦るようになるからな

「夏休みはどうかね」

「はあ、普通にしてますね。アニメ見てゲームして、家で勉強してますよ」

「そ、それは普通なのか……?」

「社会人になったらお盆休み以外仕事じゃないですか。公務員ならお盆休みも仕事ですけど」

「……そうだな」

車内の空気が、俺と平塚先生の周りだけ静かだった。

後部座席のキャツキャという声が虚しさを目立たせる。

働きたくねえなあ……

関東平野に暮らす千葉県民にとって海は馴染みがあっても、山は珍しい。

あの無感動そうな雪ノ下ですら、感嘆のため息をもらすほどだ。

戸塚と小町と由比ヶ浜は疲れたのか眠っていた。

トランプやウノなどで騒いで疲れているのだ、子供か?

俺なんてその間、平塚先生とスクライドとかガンダムの話をしてたよ。

なんだよ、サンライズ推しかよ。

「千葉村か」

「今回も自然教室と同じ二泊三日だが、大丈夫かね?」

「そういうことは早く言ってくださいよ、まあ準備してますけど」
意外と覚えているもんなのか、二泊した記憶が俺にはあった。

なんだかんだ、今考えると陽キヤみたいなことしてたよなあ。

視界には雄大な山が飛び込んできた。

「おお、山だ」

「山ね」

「山だな」

山としか言えない。

俺のつぶやきに雪ノ下と平塚先生が繰り返すように頷いた。

関東平野に暮らす千葉人にとつて山といえ、埼玉で言うところの海くらい珍しいのである。

スプラッシュマウンテンぐらいしか見たことないかもしれない。

いや、それは言い過ぎか。

車を降りると草の匂いがした。

そういえば、これから流行るグランピングという金さえ払えば手軽にキャンプが出来る物があったな。

静かなキャンプ場がリア充達の巣窟になるのだ。

あの、なんだろう、内輪で盛り上がったところに陽キヤがやって来て我が物顔でにわか知識ひけらかす感じに似てるかもしれない。

キャンプ場は焚き火の音や風の音を楽しむんだよ、音楽を楽しむんじゃないやねえ。

「どうした比企谷、すっごい顔してるぞ」

「疲れましたね」

「んーっ！きつもちいいー！」

「由比ヶ浜を見習ったらどうだ」

「先生、あれが若さって奴ですよ」

「うう……」

平塚先生が身動き固まってしまった。

コンマ0秒で返すことで発生するクリティカル、これがレスバの確信！いや、普通に致命傷な一言なだけだったな。

「人を枕にして寝ていれば気持ちいいでしょうねえ」

「うう……ちくちく言葉だ」

あつちも似たようなことしてる、仲いいな。

小町も戸塚と微笑みながら去年来たんだみたいな報告をして楽しんでた。

その報告いる？女子つてそういうので楽しめるよね。

つまり、楽しんでる戸塚は女の子かもしれない。

平塚先生の指示に従って荷物を降ろしていてもう一台のワンボックスカーがやってきた。

車から降りてきたのは男女四人組、リアリティーショーでも始めるのか？

そう、我らがスターのお出ました。

「や、ヒキタニくん」

「これはこれは、未だに人の名前を正確に覚えることも出来ないミスター葉山のお出ました」

「なんでねつとりしてるのかな？」

「ふうむ、グリフィンドールに10点減点」

まあ、教師としての形式上、ボランティア活動に一部の生徒だけというのは如何なものかとか、嫌味言われるし、仕方なくって奴だろうな。

でも俺は陰キャボッチとして、スリザリ的に減点しまくるからな！

俺、スリザリンなのかよどっちかっていうとイジメられるしレイブンクローじゃね？

イジメられちゃうのかよ。

「フッフフ、今日は何のために集まったのか」

「行きますよ平塚先生」

「置いてって良いの？あー、自分の荷物くらい持つわよ」

「あつ、待ってよヒツキー！ゆきのん！」

「……………」

ボランティア活動だったのは分かるし、そういえば今の時期は雪山もツンドラ状態の戦場ヶ原のようなデレない時期だったから葉山がいると不機嫌になるのも分かっていた。

ので、さっさと二人を引き離しちゃいましょうねえと言う訳だ。

平塚先生の自慢げな語りは犠牲になったのだ。

俺達の集団とダラダラ歩く葉山のグループ。

間には由比ヶ浜や戸塚がいて何となしに会話しているので一つの

集団に見えるだろう。

由比ヶ浜はアイツは多分、ハツフルパフだな。アホそうところがハツフルパフっぽいし、ハチミツ好きそう。

本館に荷物を置いたら、俺達は集いの広場とやらに来た。

ああ、キャンプファイヤーとか出来るところね。

そこには体育座りで待つ100近い小学生の群れ、小学生6年生なだけあって体格にはバラツキがある。

幼稚園児よりは論理的で、しかし中学生よりはアホで、そして高校生よりガキなのが小学生だ。

気軽に話し掛けると、通信ケーブルって何?とか、メモリカードって何?とかジエネレーションギャップで簡単に牙を向いてくる。

やだ、小学生怖い。

生徒達の前で先生が腕時計を見ながらずっと立っていた。

「はい、みんなが静かになるまで3分かかりました」

いわゆるお約束である。

全校集会や学級会で前フリに使われる、気まずい空気にしてからの説教。

俺も高校生にやったことがある。

そして先生から俺達の紹介が始まる。

「これから3日間、みんなのお手伝いします。何かあったら僕達に言ってくださいね。この林間学校で素敵な思い出を作りましょう。よろしく願います」

拍手喝采だった。

葉山の打ち合わせなしの挨拶には補正が掛かっていたのか、女子ウケがすごくいい。

これがイケメンのなせる技か。

なお、面の良い女である雪ノ下は矢面に立つのは嫌いだ。人がの上に立つのは好きな女である。

というわけで、オリエンテーリングはーじまるよー。

よーい、スタートである。

すでに決まっていたのか小学生達はグループごとに分かれて行動を始める。

子供の頃は班分けでメンバーを決めるのが嫌だったが、大人になると一人で行動しないといけない。

少なくとも先生がグループを決めてくれなくなる大学とか、周りはグループ出来てるのに一人だけで授業を受けたり、初日に自分から話しかけないと友達とか作れなかったりするからな、ソースは俺。

「いやー、小学生マジ若いわー！高校生とかおっさんじゃね」

「戸部やめてくんない？あーしがババアみたいじゃん」

「いや、マジ言ってるねーから！ちげーから！」

ワイワイガヤガヤと戸部と三浦が騒いでる。

俺からしたらお前らも若いよ、ガキの範疇だよ。

「僕が小学生の頃は高校生って大人に見えたな」

「小町からしても大人って感じしますよ。兄を除いて」

「大人になると、30過ぎてから太るし、脂っこい物も食えないし、婚期に焦るようになるからな」

「ぐっ……やめろ比企谷。それは私に効く」

「……ヒツキーの一言が流れ弾だよ！先生、大ダメージだよ！」

夏休みに仕事を押し付けてきたんだ。

これくらいの意趣返しぐらい別にいいだろう。

それに苦しんでる平塚先生からしか得られない何かがある。

「ああ、そうか。その子、ヒキタニくんの妹だったのか」

「おい、何回教えたら学習するんだ。ウチの小町はお前にはやりません！」

狙ってるのか、俺の妹を！

退け、俺がお兄ちゃんだぞ！あまり小町に近づくなよ！

血を見ることになるぞ、俺の！

「葉山隼人です、よろしくね小町ちゃん」

「小町、ソイツはロリコンだ。喋るんじゃないぞ」

「誤解を生むようなこと言わないでくれるかな!？」

「見てろよ、この林間学校でも小学生女子とばっか喋ってるからな」

「おい、本当にやめろ！」

然りげ無く小町を俺の背後に隠して、葉山からゆつくりと離れていく。

来るなよ、来たら小町がどうなってもいいのか、言い訳ないだろ！

「お兄ちゃん大変！妹過激派として錯乱しているよ！」

「狂ってるのは俺じゃない、世界の方だ」

「ダメだ、あまりのイケメンにお兄ちゃんが絶望している」

「うるせ、ほっとけ」

俺も無用な争いはするつもりはない、だが小町狙いと分かったら話は違う。

ウチの小町は我が家のアイドル、アイドルは結婚しない、つまり小町は結婚しないの！本当だもん！

そんなやりとりをしていたら思わぬところから追撃が来た。

「確かに大変かもしれない……ヒキタニ君受けオーラ凄いよ！ヘタレ受けて感じだから迫られたら即落ちそう！」

「おい初めての会話がそれでいいのか！出てねえよ、出てるとしたら絶望のオーラくらいだよ。馬鹿野郎おまえ、俺は勝つぞ！」

「えっ、つまり誘い受けてこと!？」

「なんでだよ！なんで受けのままなんだよ！この筋肉を見ろ、普通に力で抵抗するわ」

「ふむふむ、うへへ……つまり筋肉受けということですね」

「違う。全然、違うよ！受けが強いってガードが固いってこと？俺、戸愚呂兄ってことなの？」

「誰それ」

知らねえのかよ、格ゲー界でも屈指のクソキャラだぞ。アイツ、体力全然減らないからな。